

東京原発事故

@makeanovel



これは架空の物語。

東京という都市を舞台にした空想小説です。



ここに登場する人物は語り手を含めてすべて虚構であり、現存する人物とはなんの関係もない。

1、紗英①

1、紗英



生あたたかさを感じて、唇と鼻の間を押さえた。

そこに押し付けた、掌の人差し指の付け根にぬるっとした感触があり、離れた瞬間、鮮やかな赤い液体が付着しているのが目に入る。

ほとんど同時に、

「センパイ、鼻血」

同じ編集部の後輩、鳥島ワカコがそう言った。

ワカコの声は静かな編集部のフロアの人間すべての耳に届いたと確信するが、もう最近では誰もこちらを向くこともなくなったことを思い出す。

わたしはワカコと一瞬あってしまった目を逸らして手早くデスクの上のティッシュの箱に手をのばした。

鳥島ワカコはこのフロアで唯一、四六時中マスクで顔を覆っている。その理由について誰かが尋ねるとそれにワカコがお決まりの受け答えをするというのひところギャグとして編集室で流行していた。最近ではあまり見ない気がするが、たまたまわたしが見てないだけかもしれない。

「じゃあこのページのデザイン、このイメージで一度作ってくれるかな」

わたしはティッシュを押さえたままで言う。

「いつまで仕上げればいいですか」

マスクにくぐもったワカコの声も聞きなれた。

「明日一杯でお願い。今日はもう帰るんでしょ」

ワカコのぱつんと揃えた前髪とマスクの隙間に、しょっちゅう変えるカラーコンタクトの色な

のか、そもそも彼女は元々こんな目の色なのかもうわたしには判別がつかないのだが、透明なブルーグレイの色で2つの並んでいるものが、わたしをじっと凝視したままだ。

「結構出てますよ。ティッシュ変えたほうがいいんじゃないですか」

ワカコに言われて見てみれば、確かに一枚のティッシュ全体に赤が広がっており、抑えている手が湿ってきていた。慌てて3枚ほどティッシュを追加した。

「じゃ、お願いね」

わたしは自分の作った誌面のラフを片手でかき集めてその紙の束をワカコの前に置いてそこを離れる。

先ほど「センパイ、鼻血」と言ったときはフロア全体に届く声を出したくせに、次にワカコはわたしにしか聞こえない声で、

「死にたいんですか」

と、確かに呟いた。

聞こえないふりをしてわたしは自分のデスクに戻る。

もうワカコのほうは向かない。彼女がジャケットを羽織って鞆を持ち、お先に失礼しますと編集室を出ていくまで落ち着かない気分で過ごす。誰かがワカコの帰宅したあとに「ワカコちゃんよくやるなあ。がっちり一日中マスクつけて」とまた彼女をからかったりしはじめることをわたしはどこかで期待している。そういうことも確かによくあった。夏まではしょっちゅうだった。しかしそれもみんな飽きてしまったようだ。もしくはマスクのワカコに慣れてしまった。

しばらくして、

「仕事終わったー？紗英ちゃん」

山崎先輩の声がしてわたしの背後に立った気配を感じる。振り向く前に鼻血が止まったのかティッシュをチェックした。鼻血はどうやらとまったみたいだった。

「表参道に新しくオープンする店のパーティの招待状来てるんだけど、夕食がてらいってこない？」

山崎先輩の誘いは無条件にのるという生活をもう10年以上続けているので、オッケーの返事をたぶん反射的にしたのだと思うが、先輩が、

「じゃ、そろそろ行こうよ。お腹へっちゃった」

と言いながらコートを羽織る姿を見ながら、いつどんな承諾の返事をしたものか、もうよく分からない。最近物忘れが多い気がする。

1、紗英②

1、紗英②



地下鉄駅構内から階段をのぼり表参道に出る。街を行き交う人は長いブーツを履いてファーを巻いている人も多い。まだそれほど秋は深まっていないと思っていたが、自分だけが薄着をしすぎなのではと急に不安になる。

「どんな店なんです？」

「有機野菜のみを使用するってコンセプトみたいね」

先輩はオーガニックとかスローライフにまつわる書籍を数多く編集してきたので、その手の店との付き合いが多かった。わたしのところにもしょっちゅうその手のブランドの新発売のお香やボディーソープだとかが余ってまわってきた。

昔その場所に確かに他の店があったはずなのにどんな店なのか思い出せない一角に、道に面した部分がほとんどガラス張りの建物がいつのまにか出現していて、そこが今度オープンするという店であるらしかった。先輩はほとんど顔パスなのでわたしも一緒にそそくさと入場する。この業界で15年働いているが、パーティに入場するときいつも断られるのではないかと背筋が冷たくなる。出版社宛にきた招待状を持っても、だ。そんなもの出すから余計おどおどしてみられるのよ、わたしみたいに最初から顔パス当たり前って態度で受付すればとめられたりしないのに、とかなり以前に先輩に言われた気がするが、もうどのくらい昔なのか思い出せなかった。

店内は昼間は日が差し込み明るい雰囲気なのだろうが、今日はあえて照明を控えめにしており

暗かった。間接照明がところどころでぼんやりと光っている。よく見ればオレンジ色のかぼちゃを割り抜いて顔を刻み、ランタンにしてあるものだった。

ウェイターにワイングラスと一緒に手渡された小さなカードにはそのワインも丁寧に作られた有機ワインであることが印刷されている。ひと口飲んだが、酸っぱい味がしただけだった。野菜を使った様々な料理がカラフルに盛りつけられていて、人々は談笑しながら、オーガニックワインとともにそれを味わっていた。

そのうち、店のオーナーであるという男性のスピーチが始まる。

「皆様本日はようこそパーティにお集まりくださいました」

ざわめきに混じってそのマイクの声はよく通って届く。

「...さて、東日本大震災から早いもので半年以上が過ぎました。

被災地の復興を願い、今日は特に被災地の野菜を中心に仕入れをさせていただきました」

というところで、自然に拍手が起きて、それは止まらなくなる。

拍手が盛り上がり、それがまた自然発生したのと同じように鳴り止んだとき、

店のオーナーにはいつの間にかくっきりとスポットライトが当たっていた。

彼の顔はたくさんの人のあたたかい拍手に本当にあたためられたように上気していた。

その余韻を味わうような恍惚とした彼の鼻から一筋、赤いものが流れ落ち始めた。

気づいているのかいないのか、彼は、それを拭いもせずに、

「さあ、今日は心ゆくまで料理とそしてワインをお楽しみください」

そう締めくくり、またひときわにぎやかな拍手が起こった。

あちこちで乾杯がおこって、ガラスのぶつかる澄んだ音がこだました。

ふと気がつくと、先輩の鼻からも一筋の血が流れていた。

そういえば先輩の鼻血は初めて見るかもしれないと気がつく。そしてこのオーガニックワインは、まるで血の味がすると思ったところで、わたしもまた鼻血が再び出ていることに気がつく。

暗くて気がつかなかったが、会場のあちこちで鼻血を出している人がいた。みな笑っている。とても楽しそうで幸福そうに見えた。ティッシュを持っていない人には、皆、自然に親切にティッシュを差し出していた。慣れたものとわたしは見入った。

そう、慣れてしまえば、どんなことも平気だ。

わたしはワイングラスの残りを飲み干すと、なにか料理を食べるために、色とりどりの美しくておいしいような料理の並ぶカウンターに近づいていった。

2、ワカコ①



クリスマスがこれだけ浸透した国だから、そのうちきっと、とは思っていた。ここ最近、見事にこの季節、街はジャックオランタンや黒い魔女の人形、オレンジやパープルのハロウィーンの飾り付けで溢れるようになったことをワカコは素直に喜んでいる。

ワカコは数日前に職場の最寄りである恵比寿駅構内にディスプレイされた3つの大きなジャックオランタンに、早朝まだ通勤客の少ない頃、マスクを付けてきた。

しかし帰宅するときに見たらマスクは全部取り払われていた。自分が使うマスクではないのでその時はガーゼでできた安物を使ったのだが、ワカコは今朝、自分用に買った高価なN95マスクをアロンアルファを使って絶対に剥がれないようにまた3つのカボチャそれぞれに接着してきた。

この間は透明なテープで止めただけだったのがいけなかった。

まったく手抜きであった。敵はマフィアたちだ。ぜひともアロンアルファで戦うべきだったとワカコはひとりごちながら、ついでにカボチャそのものもその台座から移動できないようにやはりアロンアルファをべったりと塗りしっかり接着した。

もちろん駅の監視カメラにうつることを考慮して彼女は十分な変装をした。髪は全部ニットキャップの中にたくしいれてサングラスにマスクをつけて顔を覆い、ジーンズの下には身長が15センチアップするシークレットブーツを着用（身長165センチの彼女はそれで180センチとなる）、古着屋で調達したブカブカの男物のコートの中に、体格をよく見せるために開発されたジャケットを通販で買って着込むという念の入れようだった。ブーツもなかに詰め物をして28センチのサイズを履いた。。歩き方なども練習しておいたので絶対にあれがワカコだと監視カメラくらいでは

判らないはずだった。皮の手袋もはめていたので指紋も残していない。

恵比寿駅を出てしばらく歩き、大きなオフィスビルの男性トイレの個室に入って着替え、ごつくみせていたジャケットなどを脱いでもまだ男性と見える恰好でトイレを出て、職場に着く前にまた別のトイレで本来の自分のいつもの服装に戻った。

2、ワカコ②



その日、退社したワカコはドキドキしながら3つのジャックオランタンのディスプレイに近づいた。朝の変装はしていない。従来 of 女性としてのいつものワカコの姿をしている。それでもN95マスクはいつものようにしっかりつけていた。

なんとカボチャもマスクも無事だったうえに、NO NUKESと書かれた黄色のタスキが3つのジャックオランタンそれぞれにかけられていた。しばらく観察していたら、時々立ち止まる人がそれをスマートフォンなどで撮影している。

ピンときてツイッターで検索した。「恵比寿駅 カボチャ」と。

「恵比寿駅でこんなもんを見つけました！#脱原発」というコメントなどとともに、そのマスクをしているジャックオランタンの写真がアップされている。しかももう10種類は違う写真を見つけたし、それぞれがたくさんリツイートされている。中には反原発の大物アカウントの人にリツイートされた写真もあって、今日の午後くらいから爆発的にツイッター上に拡散していることをワカコは知った。

それを確かめるとワカコは駅構内の成城石井へ入ってゆく。

汚染された国内の食材を避けるためにほとんど毎日足を運ぶようになった。

今まで利用していた自分のアパート最寄り駅の汚染食材しか売らなくなったスーパーも時々寄る。ただしなにも買わない。特に汚染のひどそうな食材をかごにいれようとしている人にワカコはおもむろに近づいていく。ガイガーカウンターをその食材に当てて、「うお、高い。やばいこれ

」と言って大袈裟にのけぞったりしてみせる。それを見た者はたいていその食材をまたカゴから売り場に戻した。そのうち店員につまみ出されるかと危惧していたワカコだったが、注意をしてくる人間はまったくといっていいほどいなかった。店長らしき人間もワカコのことを透明人間として扱った。ワカコが近くでガイガーを持ってその大仰なそぶりを見せても、眉ひとつ動かさずに店長は素通りしていった。

とにかく放射能の「ほ」の字も口に出すことが憚られるという重い雰囲気がかこ首都を覆っている。あの日のフォールアウトとともにその黒い霧のような「口に出せない風潮」もまたやってきて、居座り続けているのかもしれない。もう半年が経とうとしている。それなのに首都の人たちはますます何事もなかったように毎日を過ごしている。

ワカコはそれなのにどうしてこの首都に自分が居続けるのだろうか時々自分に問いかける。ワカコは勤務している出版社に特に思い入れがあるわけでもない。とっとと首都とおさらばしてどこか西日本、もしくは外国に「ズラかる」ことも可能だった。彼女は語学に長けていたし、どこに移住してもやっていけるタフさを持っている。

彼女は3月、原発の爆発を知って直ちにタクシーを飛ばして空港へ向かい沖縄へ逃げた。会社には地震で倒れてきた家具で頭を打って入院したとメールを打ってそのまま病休を使うことができた。誰もそれ以上追求してこなかったし見舞いにいきたいとどこの病院かを尋ねてくる者もいなかった。

四月の半ばに戻ってきても、会社で頭の怪我を心配してくれる人もいなかったし、また戻ってきたことを心から喜んでくれる人もいなかった。

ワカコはそれからずっと首都に住み続けていた。

ワカコは見続けていたかった。

なにを？

ワカコは自分のツイッターアカウントで、恵比寿駅のジャックオランタンの写真をあげている人のツイートを引用して、自分もツイートした。

「ヒヒヒヒ、なにも知らずにみんな死に絶えてゆくのを、愉快じゃのう」

彼女のアカウント名は「死神」だった。

来月、10月31日は冬の入口。その日、あの世とこの世が繋がって、良くないものたちがこの世に紛れ込んでくる。その日こそ、きつとこの都市の首を狩る大きな鎌を携えたヤツがやってくるはずだった。もうすぐ。もうすぐその日はやってくる。

ワカコはほとんどその日を心待ちにしているような気分になっている。

早く、全部、終わってしまえばいい。

ワカコはツイッターのアプリを閉じて鞆にしまうと、外国産のチーズやらオリーブやらワインやらの詰まった袋を持って帰路につく。

一人で今日も祝宴を催すのだ。

ゆっくりと沈み続けている巨大都市の甲板で人々は最後のダンスを踊っている。オーケストラも演奏をやめる気配はない。

ワカコはシャンパンをあける。

乾杯。フルートグラスを高く掲げて、そしてその繊細に弾ける泡を一気に飲み干した。

3、外国人男性



日本に赴任が決まったとき、我が欧羅巴大陸の同朋が記した日本での体験記めいたものを何冊か読んだ。

エキゾチックさ、あるいは禅のスピリット、浮世絵の味わい。

そういったものに取り憑かれて熱病患者のようになって焦がれても、彼の地の人の心の裡には決して入り込めないという苦悩。

みんなして仏像みたいな穏やかな笑みを称えてはいるが本当のところは何を考えてるのか判らない。

多くの書物にはこのようなことが述べられていた。

そして、表情が乏しいだけでなく、感情の起伏もまた乏しいというその民族について、僕はそれなりに親しみを感じて、初めての日本行きの飛行機に乗ったものだ。

今では、ペレグリン・ホドソンが書いていた、駅の構内に漂ううどんの匂いというものを実際にどんなものかを知っているし、日本にいる間に本当に沢山の駅を利用したが、その匂いはハルキムラカミ風にいえば宿命的に日本の駅というものにしみついているものであることも理解した。しかしついにこの国ともお別れする日がやってきた。

僕の勤める会社が東京にあるアジアの拠点をシンガポールに移転することに決めた。僕もそのシ

ンガポールの新しい支社に移ることが決まった。

そして僕は日本を離れる前にどうしても声をかけてみたかった女の子に気持ちを打ち明ける決心をした。

恥ずかしながら僕は、自分の職場と棲家であるマンションのある恵比寿で彼女を時々見かけるようになって、あるとき仕事が終わって帰宅していく彼女のあとをつけた。

それでなにをするつもりもなかった。ただ、彼女のアパートの場所を知ったに過ぎない。

アパートの向かいにファミレスがあったので、僕は休日になるとここに来てひがな本を読んだりお茶を飲んだり食事をして過ごすのがここ何年の習慣になっていた。

運が良ければ休日の彼女がアパートから出てくるところを目撃できると思っていた。しかし彼女が休日にどこかにでかけるのを僕はほとんど目撃することはなかった。彼女はどうか土曜日と日曜日はほとんどどこにもでかけることなくしっかりと部屋に閉じこもっているらしかった。彼女の姿を見ることができなくても僕は彼女の近くで過ごしていることでやすらぎを感じた。

震災直後、彼女はしばらく東京を離れていたみたいだ。しかしひと月ほどしてまた戻ってきて、恵比寿にも姿をあらわすようになった。

久しぶりに見た彼女は、かなり本格的なマスクでがっちり顔を覆っていた。

誰から見ても、放射能を防ごうとしているのがわかった。

単なる花粉をガードするような生やさしいマスクではなかったからだ。

僕はその日ついに24時間営業のそのファミレスで朝までを過ごしてしまった。もう会社の東京での業務は全ては終えていて引越しや移動に使ってよいとされる休みに入っていた。

ファミレスの窓の外の明け方の住宅街はまだ半分眠っているようだった。それでもここを離れがたく僕は窓際から彼女のアパートの扉を見つめていた。

しかし次の瞬間、僕はぎょっとした。彼女のアパートの部屋の扉が開いて、大柄な男性が出てきたのだ。なんということだ。彼女の部屋に、昨日男性が泊まっていたとは。

僕は慌てでレジを済ませて外に飛び出す。

男性は駅に向かっているようだ。僕はこっそりとそいつのあとをつけた。

電車に乗ってしばらくして気づいたが、電車は僕がこれから帰るべき恵比寿を通過しようとしていた。これ以上男性を追わずに、恵比寿で降りてマンションに戻るべきか迷っていたら、男性はまさに恵比寿駅で下車した。こいつも恵比寿に棲んでいるのかと胸糞悪くなったが、僕もそこで電車をおりた。

そして少し距離を置いて男性の後ろを歩いていたら、男性は立ち止まって奇妙な行動をとりはじめた。

恵比寿駅構内に飾ってあるハロウィーンのカボチャにマスクをつけているのだ。

そう、あの子が震災以降ずっとつけているあの大きめのマスクを。

もちろんその男性も同じマスクで顔を覆っていた。サングラスもしているので顔はほとんど見えない。

男性は接着剤のようなものでマスクを完璧にカボチャに固定しようとしている。

まだ駅には人が少なく、男性のやっていることを気にとめている者もないようだった。

男性はマスクを3つ付け終えて、さらにカボチャにまで接着剤を丹念に塗ってそれを台座にしっかり固定した。

彼女のボーイフレンドは熱心な反原発活動家というわけか。

男性がいつてしまうと、僕はマンションに帰って、引越しの準備もほとんど済んでがらんとした部屋で、**NO NUKES** と書いた黄色のタスキを作成した。

3つ出来上がるとそれをもってまた恵比寿駅にとって返して、それらをマスクのジャック・オ・ランタンのひとつひとつにかけてやった。

これでこいつらがただの風邪ひきさんである可能性は排除された。

れっきとした反原発活動家たちのできあがりだ。

僕は満足した。

彼女と、あのボーイフレンドが早く安全な場所に逃げて、幸せな未来を築くことを祈った。

そしてやっこの国を去る決心がついた。

4、祐介



祐介は、9月19日、この日になって初めて、はたと気づいた。デモというものに、いったいどんな服装をして臨めばよいものか。

フルオーダーで作ったスーツを着て365日のうちの大半を過ごしている。

休日も襟のついたシャツを着ないとなんだか落ち着かなくて、ポロシャツやトレーナーなど、スポーティな洋服がワードローブにほとんどないことを特に不便だと感じたこともなかった。

とある高級スポーツジムの会員にはなっているが、ここ最近は忙しく毎月の会員料が勝手に引き落とされているだけの利用となっていた。それでも祐介は贅肉とは今のところ無縁だ。

出張でNYに出かける際に、取引先の人間が紹介してくれた、プライベートな顧客だけを相手にしている店でスーツは作るようにしていた。

その店の店員のマーティンのアドバイスに従ってシャツやコート、小物に至るまでを自分の美学に則ってTPO別に挑めてきたつもりだった。人を見かけだけで判断するのは阿呆だが、だからといって身なりに無頓着すぎるのはもっと阿呆だというのが祐介の考えだった。

しかし。デモに参加するという時と場所と場合にふさわしい服装というものを、これまで祐介は想像だにすることがなかった。

なんなら国際電話で今すぐマーティンと連絡をとって、デモに相応しい洋服ってなんだろうかと意見を仰ぎたいとすら思った。今NYが何時なのか計算までしたところで、それがいかに馬鹿げた考えであるかに気づいて、祐介はぎゅっと目を瞑った。

あの震災が起きてから、デモは都内の至るところで目撃するようになっていた。

しかし自分には関係のないことだと思っていた。祐介には祐介の戦う場所があったし、デモで頑張る人には任せておき、自分は自分の職務をこなすことでこの国の未来に貢献しているはずだと信じていた。

でも、数日前。

祐介は恋人と待ち合わせた恵比寿駅の構内のカフェに向かって歩いていた。

ふと、ちょっとした人ばかりができていることに気がついた。7,8人が取り囲むのは、マスクをつけたオレンジいろのカボチャだった。

カボチャの中に電球が入っているらしくて、カボチャの目からは灯が漏れている。本来口と鼻の穴からも灯は漏れるはずだったのだろうが、それらしっかりとしたマスクで覆われていた。

NONUKESというタスキをかけられたそのマスクのカボチャはあたりを優しく照らしていた。

懐かしかった。佑介は幼い頃、両親の仕事の都合で数年間アメリカで暮らしたことがある。ジャック・オ・ランタンは魔除けのカボチャ。悪い奴から守ってくれる正義の光。

トリック・オア・トリート

アメリカの甘すぎるキャンディーやチョコレートをそれほど好きだったわけではないけれど、あのカボチャのオレンジとセットになって佑介にとっては子ども時代のよき思い出として記憶の奥のほうにしまわれていた。

「会社にね、ずうーっとマスクしている子がいるの。絶対に外さないのよね」

恋人がそんな話を最近するようになった。

目障りなのよ、と訴えているわけでもない。

共感するわというのでもない。

しかし最近、確かに彼女は会うたびに、そのマスクの同僚の話をするようになっていた。

しかし佑介のほうとて、それにどんな反応をすることもできないでいた。

そしてその恵比寿駅のジャック・オ・ランタンに近づいていったとき、その側にたっていた若者の一人にチラシを渡された。

チラシには9月19日、明治公園で「さようなら原発5万人集会」があると印刷されていた。

佑介は、これから今日、人生初めてのデモに参加しようとしている。

5、ワカコ③



2011年9月19日、明け方までツイッターのタイムラインを追っていたワカコはそれでも一度仮眠するためにベッドの中に入った。

すでに部屋の中にほの明るさが感じられた。

ジャック・オ・ランタンの形をしたペカペカした透明のプラスチックなどで作られた玩具みたいなライトをソニプラなどで毎年ひとつは買っているのをずらっとベッド周りに並べてある。

それらが明滅する部屋でワカコはほとんど一晩中パソコンにずっと向かっていた。

彼女の「死神」というアカウントは露悪的な言葉遣いで一部からは猛烈な批判を受けてはいたが、それも反原発運動の過激なひとつの手段として受け入れられてフォロワーはシロウトとしては多い方だった。

性別も居住区も明かさず、「死神」は、首都がすでに目に見えない殲滅状態であると繰り返しツイートし続けている。

都市の実態である生命はすでに剥奪されており、蜃気楼のような街並みの中を蠢く、元・都市生活者たちの描写が連綿と続く「死神」のツイートは確かに不気味なものだったが、それを警告と捉えてツイートを支援する者が増えていた。

さて、ワカコがマスクをかぶせた恵比寿駅のジャック・オ・ランタンがネット上で猛烈な勢いで拡散されて反原発のひとつのシンボルとなっているのは知っていたが、気になる発言をつい先ほど見かけていた。

「あの恵比寿のジャック・オ・ランタンにNO NUKESのタスキをかけていたのは金髪碧眼の超力

ッコイイ外国人男性だったよー。私目撃したんだよ〜」というものだ。

ふうん、超カッコイイ外人、ねえ・・・

眠りに落ちる直前にワカコはコレクションしたカボチャのライトをひとつひとつ消しながらそう呟いて、そして、ベッドに入ってスコンと眠りに落ちた。

目が覚めると9月19日の首都はいい天気だった。

タイムライン上には「暑くなりそうだからデモに参加する人は水分補給忘れずにね」「放射能の拡散予想だと今日は関東内陸が要注意だからマスクをしたほうがいいよ」というデモに関する呟きがいくつも流れている。

原発事故以来、少しずつ規模が大きくなって繰り返されてきたデモの今日は集大成と言えるのかもしれない。戦いはずっと続くにせよ、今日はとても重要な日だという認識がタイムライン上には感じられた。

ワカコはペットボトルの水でコーヒを沸かし、成城石井で昨日買ってきた外国産のシリアルにドライフルーツを混ぜ豆乳を注いだものを食べながら、眠りに落ちる寸前に気になっていた**NO NUKES**のタスキをかけた外国人青年についてなにか続報はあるかとパソコンのキーを打ち続けた。

しばらくすると、カボチャにタスキをかけたらしき本人のツイッターアカウントがあっさりと判明した。それは主に英語で書かれたツイートだったが、時々日本語も混じっている。日本の原発や放射能関連のニュースを英語にしてどんどん海外に向けて発信しているらしきそのアカウント主が、恵比寿のジャック・オ・ランタンにタスキをかけた発言を確かにしていた。なぜタスキをかけたのかなどは一切書かれていないが、確かに本人は自分がやったことだと述べていた。

ワカコはこのアカウントをフォローしておいた。このアカウント主も今日はデモに参加すると書かれている。

ワカコも今日はデモに参加する。

6、紗英③



目が覚めるとまた生あたたかいあの感触だ。

自分の体液だと思えば、懐かしさのようなものを覚える。

そんなことを言えば、またあのワカコに「死にたいんですか」と囁かれてしまうのかもしれない。

だとしても。

体液に触れるというのは生命の原初の記憶のようなものを辿るような心地がする。

3月以降確かに鼻血を出すことが増えた。尋常じゃないとワカコは言う。

じゃあ一体尋常って何なのよ。

わたしはワカコがマスクをしてまで必死に防御したいものについて思いを巡らせる。

マスクをしないわたしを責めないで！

ときどきそう叫びだしたくなる。

だってそうでしょ？かの地で起きた事故を起こしたのはわたしじゃない。

悪いのはわたしじゃない。

なのにマスクをしないことで、わたしをどうか責めないでほしい。

日々囲まれている食べ物が汚染されているのもわたしのせいじゃない。

最初は怖いと思った。でも仕事をやっていく上で、食べないわけにはいかなかった。

だってレストランや料亭の取材をしてあるくのがわたしの仕事のメインなもの。

これまで何冊ものグルメ本を作ってきた。

取材をさせてもらう店で聞けると思う？

この食材に含まれる放射性物質はキロあたり何ベクレルですか？って。

彼と付き合い始めて、まだそれほど経ったわけではない。

でも彼とは、一連の結婚までの莫迦莫迦しいゲームを経ても、この先一緒にいたいと思っていた。本気でそう思った。

自分の信念を曲げてかわいいお嫁さんのふりをしてまで結婚していく女たちを馬鹿だと信じてきたが、そういえば会社に気に入られたくてたくさん信念も曲げてきた。結婚もある程度は致し方ないと諦めて、そう、彼の伴侶というやつになりたいと思った。

彼と子どもを作って、小さいながらもあたたかい家庭というものを持ちたかった。

でもあの事故が起きてからすべてが無意味に思えてきた。

事態がかなりまずいと気づいたときにはもう手遅れだと思えた。

ワカコは四月の半ばまで会社を休んでいた。彼女が東京を離れていたという噂はきっと本当だろう。震災で怪我をしたことになっているがどこにも傷跡なんて残っていない。3月の東京になにが降ってきていたのか、ようやくうといわたしにもわかってきたよ。ワカコ。あなたがなんでマスクを外さないのかも。

ティッシュでおさえないと、またシーツにシミを作ってしまう。わたしはノロノロとベッドから這い出る。

でもティッシュの前に、急に思いついて、携帯で彼に発信した。

数回のコールのあと、留守電につながる。

数日前に一緒に食事をしてからお互い忙しくて連絡をとっていない。この3連休の前半もわたしは取材に忙しかった。ようやく今日がオフなのだ。しかし彼の予定を聞くのを忘れていた。彼にしたって今日は休みでないのかもしれない。

すぐに携帯が振動してメールを受信したことを知らせた。

「おはよう。電車の中だから電話を取れなくてごめんね。今日はデモに参加しようと思います。よかったら一緒に参加しませんか」

という彼からのメールだった。

デモ？

とっさには意味が判らなかった。

最近都内で週末になればどこへいっても目撃してしまうあの人の群のことは知っている。

でもその人達と彼とがうまく結びつかなかった。

一度、彼の車の助手席でその群を見たとき、運転席の彼はそれについてなにもコメントしなかったではないか。

わたしはひどく混乱した。

それから忘れていた唇の上に手をやってみれば、今日もやはり鼻血が出ていた。

7、外国人男性②



9月19日、目を覚ますと東京は明るく晴れ渡っていた。

ツイッターをすぐにチェックすると、今日は気温が上がりそうだというツイートをいくつも見かける。

しかし空の高さや光線の具合は紛れもなく秋の到来を告げていた。僕はコーヒーをいれて引き続きiPhoneを眺め続ける。

そしてまた窓の外の東京の空を眺めた。

美しく澄んだ東京の空を眺めて、この都市がまさか放射能に汚染されているなんて、信じがたい気分になった。

3月の震災以降、幾度もそんな気になった。放射能なんて実はどこにもなくて、僕だけが悪い冗談にひっかかっているのではないか。日本語の不自由な僕がニュースを読み間違えているだけで。

しかし海外のニュースではより残酷に東京の汚染の度合いを報じていた。

それなのに東京の人々は麻酔にかかっているように平然と街の中を歩き回っていた。このときほどニホンジンが本当になにを考えているのか理解できなかったことはない。

いや、嘘だ。僕にはなんとなく判る。ニホンジンがどうして平然としているのか。

だって、僕にしたってここを去りたくないと思っている。

東京ほどわくわくするような、それでいて快適な都市はない。

安全で豊かで人々は優しかった。

心から東京が好きだった。

夢なら覚めて欲しい。

東京じゅうの人が夢を見ているつもりになっている。

きつといつかこの悪夢が覚めるに違いないと信じて。

でも彼女は夢を見ることができなかった。マスクで顔を覆って険しい目をして歩いていた。3月以降、彼女はますます身体を硬くして、全てを拒絶して生きているようだ。

それなのになぜ彼女は東京を去ろうとしないのか僕には判らない。

そして僕の方はといえば、日本を脱出する決心がついたものの、日本を出るのは、どうしても参加したいと考えていた今日の「さよなら原発5万人集会」が終わってからにすることにした。

日本の業務をシンガポールに移すために夏は休みを返上で働いた。

引越しや移動にあてがわれた休みに加えて遅めのバカンスを取得中だった。多くの同僚は引越しの準備が整うとすぐに日本を脱出していた。女性社員と幼い子どもや奥さんは3月の時点ですでに本国に帰っていたし、僕達社員も事故のあと本国に帰ってもよい許可が出ていた。

5月以降に通常業務が再開されたのは、最初からシンガポールにアジアの拠点を移すことが目的で、ほとんど残務処理だけに明け暮れた。それでも希望者は日本を離れていることも許されていたのだ。年配の上司が僕にも帰国を勧めてくれたが、僕は業務の完了する8月末まで東京の支社に残る意志をみせた。無理をするなど言われたが、僕は日本に心残りがあった。正確に言えば、彼女のことが心配だったのだ。

ツイッターをチェックしていて、フォロワーが増えていることに気づき、どんなユーザーなのかをチェックした。

そのなかに「死神」というアカウントがあった。

時々リツイートされて僕にも届くこのアカウントの発言は読んだことはあった。

ひどく恐怖を煽る内容のものが多かったので最初は不快な気分させられることもあった。しかしだんだんその内容が現実に近いように思えてきて、このものをはっきり言わない国においては、こういう人間もまた必要なのだと思うようになった。

しかし「死神」さんが僕になんの用があってフォローをしてきたんだ？

確かに僕も脱原発を訴えるアカウントの一人だが、どこかで接点があったのだろうか。

死神は数千人にフォローされてる割に自分からフォローしている人間の数がとても少なかった。僕がその数少ないフォローの中に選ばれるのは光栄なことと言えるのかもしれないが、なんとなく釈然としないことだった。

僕は朝食を食べて、明治公園の集会に出かけるためにマンションの外に出た。

恵比寿駅のカボチャは今日もマスクをし続けている。

僕はふと思いついて死神にメンションを飛ばしてみる。

「おはようございます。フォローありがとうございます」と。

電車に乗ってしばらくしてこちらにもメンションが届いたことを知らせる表示が届く。

死神からだった。

「こちらこそ、ジャック・オ・ランタンにタスキをどうもありがとう」

僕は確かにあのジャック・オ・ランタンにNONUKES と書いたタスキを自分がかけたことを

ツイートで告白していた。

しかし「死神」から札を言われるとはね。

僕はそしてハッとした。

死神は、ジャック・オ・ランタンにマスクを接着した大柄な男性なのではないかと。

8、ワカコ④

9月19日、ワカコは今日は変装をすることなく、普段のワカコの服装でアパートを出る。さすがにシークレットブーツを履いて男の恰好をしたままデモで歩き続けるのは難しい。それにデモの群衆に紛れるぶんには特に姿を変える必要性はないと思われた。

もちろんマスクはつける。さらに大きなサングラスで顔を覆う。これは変装のためではなく、当然、防御のためである。

例の、目には見えないあの粒子状になった奴らがこの都市を支配している。そいつらを一粒たりとも体内に入れるのはゴメンだ。

そもそも原発をこの国に導入した奴はみんな墓場だろう。

核を支配できると無邪気に信じて核を生み出したアタマの足りない科学者たちももう冷たくなって地面の下で蛆虫に喰われながら一にも知らずにのんきに眠っていやがるのか。火遊びしてみたら後始末できなくなって泣いている子どもみたいな連中め。

ああ忌々しい。

ワカコは核を生み出して責任もとらずに死んでいったそいつらと日本にそれを持ち込んで推進に関わった馬鹿どもをを一人残らずズタズタにしてやりたいと思う。蜂の巣みたいに穴があくまで突き刺して殺してやれたらどんなにスッキリするだろうかと想像する。

推進してきた政治家や官僚の残党が少数、醜く・しぶとく生き残ってはいるだろうが、もう内側から腐敗し始めたような肉を檻樓のようにまとった老人と成り果てている。

そのゾンビみたいなヤツを今さら殺したところで、死人を殺したみたいに手応えはないだろう。そして、だ。

あのおぞましい電力会社も今の政治家も官僚も、すでにこの馬鹿げた日本社会の支配者ではなくなっている。

今、日本のみならず、この地球という惑星全体を支配しはじめたのは、ほとんど眼に見えないあの粒子状の奴らなのだ。

愚かな政治家や電力会社社員や官僚どもをブチ殺したとしても、この粒子状の小さな悪魔は消えてはくれない。

ブタみたいな原発推進の奴らも、なんの罪のない我々も、もう等しくこのミクロの悪魔の支配下に置かれた。もう誰も逃げられない。日本を脱出したとしても逃げられない。もうこいつらは地球上から消えうせない。

史上最悪の事態だとワカコは呻く。

そしてこれをきっかけに人類は亡びるんだらうとワカコは考えている。

ふいにiPhoneが振動したことに気づく。

ワカコのツイッターアカウント「死神」あてのメンションだ。

例のNO NUKES のタスキをジャック・オ・ランタンにかけたという（噂では金髪碧眼のハンサム

である) 主からだった。

「おはようございます。フォローありがとうございました」

という単純な挨拶のみだった。

フォローを受けるたびにこのような挨拶をしているだけかもしれない。

それでもワカコは返事を書いた。

「こちらこそ、ジャック・オ・ランタンに**NO NUKES** のタスキをかけてくれてありがとう」

そう返信したら、ワカコは妙に楽しい気持ちになっていることに気がついた。

こんな気持ちは、久しぶりだった。

9、佑介②

佑介が紗英に惹かれたのは、紗英が打算もあれば腹黒いところもある女性だからだ。

それで彼女は開き直っているわけでもない。そういう部分を人目につかないようにしているのは社会を生きていくうえでの礼儀だが、なにがなんでも隠してしまえばいい子ちゃんになれると信じているようなところもない。裏表がないというほどサバサバしているのとも違う。

みんな複雑な内面を持った人間だということは佑介なりに理解している。ただ、あらゆることに對する彼女のスタンスは佑介が共感できるものだった。

お金も地位も名声もないよりはあったほうが良いと自分が言うときと、彼女が言うときのそれには近いものがあると。

つきあったり結婚したりする女性が必ずしも自分と同じ価値観を持っていなくてもいいとは思っていたが、紗英の価値観に共感することはまた、自分にとって心地よいことだった。

紗英の価値観はとりもなおさず、自分のこれまでの人生を肯定してくれるものだ。

褒められたものではないにしても、肯定してくれると感じられる。佑介にはそう思えた。

紗英と出会ったのはとあるパーティだ。

パーティに慣れすぎている女性というのも嫌だが、慣れなさすぎている女性と調子を合わせるのも疲れる。そう、紗英はあらゆることにおいて過剰さも不足もないという点で自分と棲息している場所がかぶっているように感じたのだ。

ウブすぎずスレすぎず。

そういう生き方はズルいような後ろめたさがないわけではない。しかしこの東京という都市を生きて行くうえで都合がよかった。自分とて苦勞してそういうポジションを獲得したが、生きるために必死にやってきた結果だ。

そのパーティで佑介は、恋人になってもいいなと思う女性と一緒にいた。その連れの女性が一所懸命に紗英のことを褒めている。会場をあとにしても褒めていた。不自然なくらいに。それは彼女が紗英を脅威に感じていたからに他ならない。そのとき残酷な気持ちが佑介を支配した。その女性が自分にとって脅威に感じる女性を褒めるという方法で自分の恐怖を取り払おうとしているのなら、なおさら紗英を自分のものにして、そしてこの、目の前の女性に知らしめてやりたいと。

そして実際にそうした。

ただ、そのときの女性にとってはそれが幸せだったのだと思う。自分にふられたことによって一時的に傷付くにせよ、きっと自分ではない男性と結ばれたほうが彼女のためによいことだ。

むしろ自分に選ばれた紗英は自分とともにあまりよくない運命を伴にすることになったのだと。だとしたら今紗英を救うのは自分のつとめであるはずだ。

デモに向かう道すがらそんなことを佑介は考えていた。

電車の中で着信があった。

紗英から電話だ。今電話に出られるかまずはメールで確認するのが常の彼女がいきなり通話をしてくるのは珍しい。

最初デモに向かっていることをどうごまかそうかとアタマに浮かんだ佑介だったが、他にもないこれは彼女と彼女と僕の未来のために参加するデモなのだと、雷に打たれたみたいに気づいた佑介はメールにデモに向かっていることを書いた。そしてよかったら一緒に参加しないかと。デモに参加したあと、またアホみたいに高いスノッブなレストランで食事をするのだとしても、紗英と一緒にデモに参加したいと、佑介は本気で考えていた。

9月19日、さようなら原発5万人集会の日。

透明な青色が東京の上空をやさしく覆っていた。

10、紗英④

彼から脱原発デモに向かっているというメールが届いて、自分がデモに参加する・しないは別として、会うことになるならばと外出できるよう準備をすることにした。

追ってメールが入り、デモの前に催されるという脱原発の集会にまずは参加するとあり、開始の時刻と場所は明治公園だと記されていた。

素早く準備をして、玄関で少し迷ってからいつもはある程度高いヒールのある靴しか履かないのに、歩きやすそうな運動靴を選び、そもそも運動靴にも合うような服装をしていた自分のことが、よくわからないと思う。

本気で自分もあのデモの列に交じるつもりなのか問いかけてみるが、分からなかった。

でも世界はそもそもわからないことだらけだ。

311後はもっとわからなくなってしまうていた。

自分のことも世界のこともますますよくわからないままあの日から気がついたら半年ほど経っている。

家を出たというメールをしたら、まだ時間があるからこのカフェで落ち合おうと場所を指定したメールが返ってきた。

わたしのマンションから行きやすい場所で、なおかつそのあと明治公園にも移動のしやすい立地でもあると気がつく。

わたしも彼も馬鹿高い家賃を支払って都心に棲んでいる。

いつか結婚などをして一緒に棲むことになったら、それでもわたしたちは都心に棲むのだろうか。彼と出会ってからそんな想像を時々していた。

「都心は便利だけれど、子育てをするのなら、もう少し自然の多い場所でのんびり生活したいよね。僕の通勤時間は長くなるけれど家族の安心が一番だから」そんなふうに配偶者が言ってくれたとかで、結婚と同時に長年住み馴れた都心を去っていった女友達のことを思い出す。

わたしは全く高給取りではない。出版社の仕事は不規則で残業が多い分、平均的なOLに比べれば多少多い程度の収入で家賃の高い都心に棲むのはすごく苦しい。でも住み続けた。住所にもブランドがあるという馬鹿馬鹿しい周囲の価値観に染められているのだと思っていた気がする。

しかしよく考えてみれば具体的には一体周囲の誰の価値観なのかよく判らなかつた。あれほど退社後の時間を共にしている山崎先輩にしても、実はどこに棲んでいるのかわたしはよく知らないではないか。

深夜まで残業したあとよくタクシーで帰っていくからには会社のある恵比寿からそれほど遠くないと勝手に思っていたが、都心に棲むわたしにしたって給料日前はタクシーで帰るのはためられることだった。

先輩がいくらわたしより入社が数年早かったところで、お給料がそれほど違うわけでもないのだろう。

しかし彼は違った。彼は都心に棲むために無理をしているわけではない収入を得ている部類に属す。

彼は間違いなくお金持ちの範疇に入るのだろう。

確かに人柄もいいし、見た目もハンサムだといっていいくらいだ。でもわたしが100人に彼のことを紹介すれば80人以上に「お金目当てなのね」と思われても仕方がないと思っている。彼の経営する会社は最近ではそこそこ名前も通っている。

待ち合わせのカフェは、木立に囲まれた山小屋のような外観に、現代的で無機質なデザインの家具や食器を組み合わせ、不思議と落ち着ける雰囲気だった。そして産地にこだわった安全で、さらに美味しいマクロビオティック料理を供することで名が知れていた。外食の続いたあとの身体にやさしいとわたしも彼も休日のランチにもってこいだと考えてこれまで利用してきた店だ。

着席してしばらくすると、彼が現れる。

少し前にあった時となんら変わらない彼の穏やかな表情を見てホッとした。

大丈夫。彼はなにも変わっていない。

店内にはオレンジや黒のハロウィーンにちなんだ小物や飾り付けが目立った。わたしたちが通された席にも、小さなガラス製のジャック・オ・ランタンが置いてある。夜になれば中のキャンドルに火を灯すらしい。メニューにも季節限定のカボチャを使った料理やお菓子が並んでいた。そしてメニューのどのページにも「放射性物質を心配されるお客様の声により当店ではなるべく西日本と外国産の食材を使わせていただいております。産地はできるだけ詳しく記載させていただきましたが、不明な点など遠慮なくお尋ねください」と書かれていることに気が付き、わたしはしばらく目が離せなくなった。

11、外国人男性③

日本で暮らしてみて、ニホンジンは決して鎖国したままみたいな島国精神で生きているわけではないことを知った。閉塞的な部分はこの国にもある。むしろ日本で僕が出会ったニホンジンには、国際感覚の研ぎすまされた、思考の柔軟な人が多かった。それは仕事で出会った人に限らない。

世界中の国々のよい部分は素直に習い、それを器用に自分たちの生活に溶けこませている。食生活は世界のどこより豊かだし、そういう文化を吸収することを通じてあらゆる国への理解を深めようとする姿勢がうかがえた。

僕はNYに赴任していたこともあるが、リベラルな人間が多いといわれる東海岸、またヨーロッパ大陸の母国にしたって、自分たちが世界の中心にいるのだと自分でも知らずのうちに考えているせいで他所に目をやることが足りない人間も多い。

それに比べると多くのニホンジンの感覚は僕から見れば真っ当なことが多かった。

彼らは経済的に発展しても、いつも世界の中心に存在できないことがコンプレックスであるがゆえに、世界をちゃんと見ていた。

ただ、原発の嘘については多くのニホンジンも気がついていなかったし、僕だってそうだ。

しかしそれは国際的なマフィアみたいな連中がおおがかりに、金をかけてじつくりとぼくらを洗脳してきたからだ。

しかしなによりも僕は日本が肌にあったということだろう。たった一人の僕という個人がが世界はどうだ、日本はこうだなどと偉そうに断定できるとは思っていない。僕の非常に個人的な好みからすれば日本は暮らしやすく楽しくていい国だということだと思う。人々に親密な好感を持っている。

僕の日本びいきは会社の同僚達からもからかいの的になっているくらいだが、それが彼女に恋心を持つようになって加速したのか、もともとそうだったのかすでによく分らない。

しかし彼女のことも日本のことも僕の中では渾然一体となって、すでに失った懐かしいもののよう

に心に染み入る。

最初から、失うものだと知っていたからこんなに惹かれたのではないかと疑うくらいに。

初めて彼女を見かけたのは駅ビルの有隣堂で、もう一度会いたいとそこを訪れて、それから彼女が昼休みにはしょっちゅう現れることを発見した。

洋書のコーナーで本を吟味し、一冊を決めるとそれをレジに運ぶ。そしてそれを携えてどこかのカフェで昼食を取りながらそれを読む。読んでいる最中である本があっても一週間に2,3度は洋書のコーナーに立ち寄る。彼女は読書家だった。本屋でよく彼女を待ち伏せるようになった僕は、そのうち彼女が昼休みを終て、このあたりにある出版社の社屋に帰っていくところもつきとめた。出版社勤務という仕事柄か、勤務時間に厳密なルールがあるわけではなく、長いときは3時間も読書を堪能しているかと思えば、退社時刻が深夜に及ぶこともあり、平日の彼女は多くの時間を

会社のある恵比寿近辺で過ごしていた。彼女の勤務先の社屋が自分の勤務先のビルのすぐ近くだったこともあり、僕はこっそりと彼女の日常を観察することができた。僕は次第に彼女に声をかけるといふ当初の目的を忘れてひたすら彼女のことを見つめるだけで満足するようになった。彼女に声をかけようとすればするほど自分のニホンゴの拙さに気が引けて、その拙いニホンゴで自分の考えていることをどこまで彼女に伝えられるのか不安だった。その一方で僕はニホンゴの習得に力を入れた。彼女は英語で本を読むくらいだから英語に堪能なはずだ。だから英語で話しかけるといふことも可能だったのだが、僕としては彼女とは日本語で会話をしたかった。しかし僕は一向に彼女に話しかけることはなかった。それだけ勉強したおかげで会社ではニホンゴの達人扱いされながら、そうするとますます彼女に話しかけることがためらわれていく。なぜなのか自分でもわからなかった。そしていつまでもいつまでもこんなふうに彼女を見つめる日々が続くのだと思っていた。あの原発事故が起こるまでは。

9月19日、明治公園には早めに向かう。この集会とデモが成功すればあるいは？

なにか希望を見いだせるのではないか。

だから今日がいい天気で本当に嬉しかった。

頼む神様、今日は大きな余震などは勘弁してくれ！

明治公園の近くまで来ると、もう明らかに人が多いことが分かった。

様々な色の幟やプラカードを持った人間が轟めいている。

僕もNO NUKESと書いたレモンイエローの大きなプラカードを持参していた。

これはこの間ジャック・オ・ランタンにかけたタスキと同じデザインを意識した。

だからプラカードの四隅にはジャック・オ・ランタンのイラストも添えてある。

僕は公園に入ってゆく。

ものすごい数の人だった。まさかこれほどとは。

身体の内側から熱いものが吹き出してくるような気がした。

12、ワカコ⑤

ワカコがそもそも勤務先の出版社で働きたいと思ったのは、どうしても結婚したいと考えていた人物の著した本を出版している会社だったからだ。

その人物に近づくためにその会社に入ったにすぎない。

彼の本を18歳のときに読んだ。

これを書いた人と結婚することにしよう。この人以外と恋愛したりすることは人生の無駄だし、この人と恋愛するためだけにこれからは生きていこう。

ワカコはそう決心した。

彼の母国語を大学では専門に学んだ。

そして彼の本を出版している会社の試験を受けて入社した。

もちろん学生時代から彼の棲んでる都市にも通い続けた。

彼が利用するという店をネットの噂で拾い集め、彼を待ちぶせしてして過ごしたこともある。なんとか地元の間人から彼の棲家をつきとめられないか聞き込みだつてやつた。でも彼を目撃できたためしはないし、彼の名前はその街でも有名だったにも関わらず、彼が本当にここに棲んでいることを断定できるような情報を持っている人間にはついでおめにかかつていない。

さらにせつかく彼の本を出版している会社に入社できたのに、ワカコは希望している海外文学の出版している部署に配属させてもらえないまま入社5年が経とうとしている。

そして彼の、国内で唯一翻訳されているそのデビュー作を担当した編集者はワカコが入社した年に会社を辞めてしまつていて、翻訳者はいくつもペンネームを使っている謎の間人であり、その退社した担当編集者しかそれが誰であるのかを知らないのだという。辞めてしまつた編集者ともどうしても連絡がとれないのだった。

配属されてしまつた女性向けの料理やらインテリア、ファッションなどの書籍を扱う部署で、いつか海外文学の部署に移ることだけを夢見て耐え忍んできた。

フェイスブックやツイッターでも彼とは繋がり合っている。

しかしそれ以上の距離はなかなか縮まらなかった。

彼はワカコより3歳年上で、大学在学中に書いた第一作が世界的にヒットした。それが日本で翻訳されたものをワカコが18歳のときに読んだ。

カルト的な熱狂で若者に支持を受け、世界中に信者みたいなファンがたくさんいる。世界20カ国以上で彼の本は訳されて今も版を重ね続けている。

しかし彼が売れっ子の作家であることはどうでもよかった。ワカコは彼の精神がまるで自分の生き写しのように感じだのだ。

18歳のとき靈感に打たれたようにもう彼のこゝしか見えなくなつた。そしてワカコのアカウ゠トの「死神」というのは、彼のデビュー作に出てきた登場人物の名前だった。ワカコのつぶやきも、その登場人物の言動をなぞらえてあるのだ。

ワカコは3月、原発事故が起きてすぐに沖縄に飛び、そしてこれはもう彼のもゝとにいくしかない

と思った。そして彼に長い長いメールを書いた。今こそ長年の想いを伝えるときがきたのだと。

ワカコは明治公園に向かう途中に、NO NUKESのタスキをかけてくれた青年のアカウントをじっくり遡っていた。英語がメインに使われていたが、「彼」の母国語—彼女が大学4年間そして「彼」に長いメールを出すあの日まで必死に勉強しつづけたあの言語だ—もかなり頻繁に使われている。しかもおそらくはその言語こそ、そのタスキの青年の母国語でもあるようだった。英語も不自由しないで使えるようだが、母国語と思われる言語を使っているときがやはり一番表現力が豊かになっている。もちろんニホンゴのレベルもかなりのものに思えた。

一瞬このアカウントが「彼」なのではないかとワカコは甘い期待をするが、残念ながら「彼」がニホンゴを使えるという噂はワカコの長いおっかけ生活で一度たりとも聞いたことはないし、そもそも今現在、「彼」がこの放射能に蝕まれたトーキョーに滞在しているとも思えなかった。彼は現在もあの街のどこかで新作の執筆を続けているのだろう。

しかしとにもかくにも、この青年は、「彼」と同じ言語を母国語とするらしい。

それだけで親しみを感じた。

そして彼もまた今明治公園に向かっているらしい。

ワカコは明治公園に近づく。

すごい人だったが、マスクをつけている者は少ない。脱原発の意志を持って集った者たちであるはずなのに、放射能には無頓着であるのがワカコには解せないと思う。

もう一度ツイッターで例の青年のアカウントをチェックする。

彼の方も明治公園に到着したという眩きをしていた。しかもつい2分前だ。

さらにそれには公園の群衆を撮影した写真が添えられていて、ワカコはその写真を凝視した。

一体これは公園のどの辺りで撮影したものだろうかと。

13、紗英⑤

西日本の野菜だけを使ったという、さらに有機栽培であるじゃがいもやカボチャなどの温野菜とレタスなどの生野菜を組み合わせたボリュームのあるサラダ（ドレッシングとしてかかっているジュレの材料まで細かく明記してある）と、しっかり酸味のある真っ黒なライ麦パン（やはり原材料明記。ジャムやオリーブオイルなどが数種類ついてくる。それらの産地も明記）、それに有機珈琲（水も安全なものを使用と明記）を頼んで、それらがテーブルに並ぶと、それはいつもとすっかり同じの日曜日のランチの風景だった。

これから彼とデモにいくことを除けば。

わたしの制作している書籍や雑誌に使う写真のヒトコマみたいなそのテーブルの、しゃれたデザインの食器や、色彩と盛り付けの美しい料理、こういう風景をわたしは毎回毎回切り取って紙面に貼りつけて、さらに自分でもこういう世界だけに囲まれるように生きてきた。

実家で18歳までを過ごしたあの世界にあったもの、それは里芋の煮っ転がしだとか、ナスしか入っていない黒っぽい味噌汁だとか、練炭を使った掘り炬燵や、寒さで真っ赤な顔をしている級友たち、彼女たちが着ていた羽織半纏、巨大なツララと5月まで消え残る豪雪。

そんな日本昔ばなしのような光景は、しかし実際にわたしが確かに18歳までに囲まれていた世界で、でもあの18歳の春、こちら側にわたしはワープした。

使い終わったあとの練炭が雪の庭に転がっているのを、あれはお笑い芸人が田舎に滞在するというテレビ番組がたまたまついていて一緒に見ていた。彼があのでできた蜂の巣みたいなのはなんだろうと言った。わたしの幼い頃の日常に当たり前にあったものを彼が知らないことが衝撃で、それが恐怖で、「さあ？」という返事をすることによってわたしも彼の側にいるつもりフリをした。

でもわたしは蜂の巣みたいな灰のカタマリ、それがなんなのかずっと、一生知っている側の人間だというのに。

彼が田舎者をバカにしたりするところを見たことはない。ただ、それが自分の常にそばにいるパートナーであった場合、彼はどんな反応を見せるのか。試すのも怖かった。

彼がわたしの出身地を知らないわけではないが、でもわたしはもう上京して20年が経とうとしている。生まれて故郷で過ごした時間を東京ですでに追い越してしまった女だ。

食事をしながら、デモについて、あの事故について、この東京に降り積もったという物質について話をするわけでもなく、わたしと彼はまったくいつものような会話をした。彼が仕事でよく行くNYで最近話題になっていることや、わたしが仕事の上で聞きかじった最新の東京のグルメ情報など。

ミシュランの格付けがもうすぐ発表されるので秋はわたしのような仕事をしている者にとっても一番刺激の多い季節だった。

東京が冬支度を始め、イルミネーションのまたたく街は美酒と美食を求める人々で賑わう。彼らがわたしの編集したグルメ本を参考に街を右往左往しているかと思うと、わたしはちょっとした全能感のようなものを感じることができた。

ただし、それを一生ずっと続けていくのかということについて最近考えていた。そんなときにこの人が現れたんだって、と目の前の男性のほうをうかがう。

「野菜がどれも濃い色をして、味もぼやけてないね。こんな野菜を毎日食べたら元気が出るよね」

彼が残っていたサラダのじゃがいもをまたひと口フォークに刺して微笑んだ。

「しかも安全なんだし」

彼は続ける。わたしは返事ができない。

同意すれば、わたしが日々作っているグルメ記事に載せている店の料理が危険だと言うようなものだから？ 安全って、例えば農薬を使用していないとかそういう意味でいつも使っているそのことを指してるのよ。

彼が当てこすりでわたしに向かって安全について言っているのではないと判っているつもりだが、不安が大きくなる。

「そろそろ行こうか」

彼が腕時計に目をやる。

そしてわたしたちは明治公園へ向かった。

途中で目に飛び込んできたものでわたしは青ざめる。

あれは。

だんだん人が増え始めた道の少し前方を歩く、あの大きな本格的すぎるマスクをした華奢な体型の女性は、見間違えようもない。ワカコだった。

14、佑介③

目の前で、コーヒーを飲みながら自分の話に耳を傾ける女性、佑介は一度黙って、彼女の故郷の街を一人で訪ねたことがある。

震災の少し前、今年の冬のことだ。

もう随分遠い昔のように感じるが、あれは楽しい出来事だったと佑介は振り返る。

付き合い始めてから、幾度か彼女に故郷の町を案内してほしいと持ちかけた。

たいてい話をはぐらかされた。

一なにもない田舎なのよ、退屈するだけよ。

彼女はさらっとそれだけ言って、たいてい話題を変えてしまった。

彼女がなにか隠していると思ったわけでもないし、例えば結婚相手として実家に何か問題があるのではと疑ったわけでもない。

純粹に彼女の生まれ育った町なら見てみたいと思ってやったことだった。

羽田から飛行機に乗ってしまえば、飛行時間は40分と少々で、あっけなく到着したそこに、彼女のほうはもう数年帰ってないと聞いていた。

佑介は東京生まれの東京育ちで、いわゆる田舎での生活は皆無だった。

それまで東京以外の地方に関心を持ったことはなかった。軽んじていたつもりはなかったが、自分の視界に入ることもなかったために関心を払うこともなかった。

存在することは知っているけれど、特に気に留めることもなく生きてきた。

しかし彼女と知り合って、彼女のことを知っていくうちに、彼女が18歳まで暮らしたという、その雪深いという町に興味を覚えた。

それは今年の1月のことだった。

テレビニュースが日本海側が大雪だと伝えていて、彼女はわたしの故郷もあんな感じなのよ、って指したテレビ画面は、すっぽり雪に埋もれた山奥といった様相だった。

君はわりと山間部に住んでたんだね、と佑介が言うと、一瞬きょとんとした顔をされて、いいえ、平野部でもあのくらいは積もるからとそっけない返事がきた。

まさか。佑介には信じられなかった。あんなに雪が積もって、人々はどうやって生活するというのだろう。積雪はゆうに1メートルを越えている。

彼女は東京の一流の女子大を出ている。きっとそれなりに優秀な高校を卒業しているんだろう。その優秀な高校に通う優秀な、例えば18歳だった彼女たちのような生徒らは、まさかあんな雪をかきわけて学校へ通っているというのか。

佑介にはまったく想像の及ばない世界に思えた。

しかし目の前のこの女性がその世界に棲んでいたと知って、なんだか落ち着かない興奮にとらわれた。

そして次の日思い立ち、いくつかの仕事をキャンセルしてまで羽田に向かった。大雪のニュースを見たばかりで飛行機が欠航するかと心配していたが、飛行機は無事飛んで、青白く凍てついた平野に着陸した。

寒々とした静脈の色をした世界に降り立った時、佑介はここが同じ日本列島なのだと俄に信じがたいと思った。

そして彼は丸一日、その街を歩き回った。

雪道をいつもの革靴ではとても歩き回れそうになくて、駅の近くのスーパーに山積みで売っていた、膝まですっぽり覆う長靴に履きかえた。

長靴の膝のあたりにくるカバー部分の巾着の口のようにになっている紐をぎゅっとしぼって長靴に雪が入らないようにして歩く。こんな体験は佑介には正真正銘生まれて初めてのことだった。

住所を知っていたので彼女の実家の近くにも行って眺めた。その地方によくある、真っ黒で重そうな瓦屋根の頑健な一軒家で、他の家々と等しく雪に覆われていた。まさか呼び鈴を押したりする勇氣はなくて、しばらく眺めて満足してそこを立ち去った。

彼女の卒業した高校も探して立ち寄ってみた。

校舎は最近建てなおされたばかりなのか、妙にコンTEMPラリーな建築で、それが雪の中にそびえたっている風景ごと前衛アートの作品として存在しているみたいだった。しかしこの建物の中で、18歳たちが東京の高校生と同じ教科書を使って勉強をして同じ大学を受験して、次の春には同じキャンパスに立っていたりすることを思った。かつての彼女のように。

そして暗くなると、日本海の幸と地酒を出す、この辺りの常連で賑わう庶民的な居酒屋で心地よく酔って、駅前の簡素なビジネスホテルに一泊して次の日にまた飛行機に乗って帰ってきた。

それだけのこと。

しかし彼女には一言も言ってない。

14、佑介④

このデモが終わったら、あるいは彼女にその1月の話をしてみようかと佑介は考えている。いやその話をするだけでなく、もっと大切な話をしなくてはならないはずだ。

なにから話をすればいいのだろう。

今、なにをすべきなんだろう。

僕と彼女にとって何が大切なんだろう。

この集会とデモが終わったら分かるのではないか。そんな期待がある。

佑介は隣を歩く恋人のほうを見た。

最近仕事で忙しいと聞いていたが、それにしても顔色が悪い。痩せただけでなく、やつれた感じがする。そして、これまで幾度か鼻血を出すところを目撃しているし、今までになかったような体調不良を訴えている。

それはもしかして全部、放射能のせいだったのか。

そう気がついて佑介は血の気がひく思いだった。

まさか東京で？

あの事故が起きて、首都圏でも子どもや妊婦が避難したりしているらしいという噂を耳に挟むようになって、まさか自分たち大人が放射能で健康を害するなんて考えてもみなかった。

そして彼女は、職場にいつもマスクをしている後輩がいると話していた。

放射能とやらは、この首都までを脅かしているのか？

ビジネスで付き合うアメリカ人は、クールなところがあって、原発事故の話はしても、放射能の健康被害について熱心に話題にするような相手はいなかった。

ただ、時々、スーツを作っている店のマーティンからだけはメールで心配の言葉が贈られてきていた。

—ユースケ、健康でやってるか？東京にも放射能が届いているらしいではないか、君の大切なカノジョの健康は安全かと。

震災後なにかと忙しく、NYへいってもマーティンの店に足を運んでいなかった。

マーティンが客のことを気遣ってプライベートに関して心配のメールをくれるのはこれが初めてではなかった。しかしマーティンのメールから滲みでている、いつもとは違う緊迫感について、佑介は見ても見ぬふりをしてきたのではなかったか。

明治公園にはすでに群集と呼べるほどの人が集まっていた。

15、ワカコ⑥

ワカコが18歳で「恋に落ちた」と思っている「彼」、その作家には謎も多かった。

爆発的に売れた処女作の印税で放蕩的な暮らしをしてヒンシュクを買っているというゴシップ記事もあったし、印税はほとんど寄付にまわして本人は地味な生活をしながらストイックに小説を書いているという説もあった。在学中だった大学は退学したという説もあれば、卒業は一応したらしいという説、あらゆることに関して極端な諸説が入り乱れすぎて、噂が出れば出るほど何が本当なのかぼやけていく。それは誰かが攪乱するために故意にデマを流しているような意図をワカコは感じていた。

ワカコはその作家、「彼」に関する情報は世界中の言語に渡って調べ尽くしている自負があった。

世界中の彼のファンのネットワークを利用してあらゆる噂を読み漁っていた。そのために大学では誰よりも熱心に語学を勉強した。

彼がデビューした頃はインターネットは随分身近なものになっていて、もちろんワカコも最大限それを利用して世界中の最新情報を集めた。

10年前から今まで、ネット上で彼の名前を拾えば、その記事についてはとことん精査してきた。さらにワカコは、彼が棲んでいるといわれている街にも、休みがとれてお金が貯まる度に通ってきた。

その結果、彼に実態などないのではないかとワカコは疑ったこともある。

彼の頭脳のようなものだけが存在して、それが小説を書き続けているが、彼の肉体としての実態は、実在などしないのではないか。

もしくは彼に関する情報は全て彼のイメージだけをなぞったもので、その小説を書いているのは、名前も顔も別の誰かであり、彼の存在はそもそも影武者的に捏造されたに過ぎないのでは？

ワカコにとって、「彼」の実態というのはそもそも書かれた作品そのものである。

だから彼の実生活やゴシップを追うことはそもそも彼女の意に反することでもあった。

それでもワカコはどうしてもやめられなかった。「彼」にまつわることに関わっていないと、不安でたまらない。

デビューした年、正式な肖像写真が2枚と、プライベートのスナップショットが数枚流出したが、その年以降、写真や映像が出まわることはほとんどなくなった。流出したプライベートショットは知っている限り全て保存しているつもりのワカコだったが、その一枚一枚もかなり不鮮明だし、どれもこれも本来は別の人間を撮影したものではないかという漠然とした疑惑も持っている。もしその道のプロがそれらの写真を分析したら全部別の人間の写真だと判明するのかもしれない。

そのくらい彼についての正確な情報は少ない。

それなのに世界中に存在する膨大なファンとファンでもないただの噂好きも含めて、日夜、根拠の曖昧な噂話を増殖させている。

ワカコは彼の本質であると信じている作品とはまた別のものとして「彼」にまつわる情報という

、もうひとつの物語を調べることを楽しんでいることも自覚していた。

15、ワカコ⑦

デビュー作の3年後に第2作を、その2年後に第3作を発表し、それから5年は沈黙を守っていた。そろそろ彼が新作を出すのはいつかという期待や予想も最近は聞かれなくなってきた。「彼」の死亡説まで存在する。

デビュー作に比べて格段に難解となった2作目3作目は日本では翻訳されていない。ワカコはもちろん彼の母国語でそれを繰り返し読んでいる。デビュー作はエンターテインメント性も高く映画化もされていたが、2作目3作目は晦渋な表現が多くて、それで彼の評判は上がりもしたし、またある層のファンは離れていった。

デビュー作は「彼」がそれを執筆したという、ワカコも通い詰めたその街が導入部分の舞台となっていると言われていて、ワカコはその街に行くたびにどの部分がどの場所を舞台として書かれたものであるのかを夢想して過ごすのが常だった。

そして、いつも、夕暮れ時に、このまま目をつむってここに佇んでいれば、いつか「彼」が私を迎えにきてくれるのではないかと...、そんな願望をずっとワカコは胸にこの10年を生きてきた。その願望に守られていれば、あらゆる現実から目を逸らしていることができた。

「彼」はもうわたしのことを知ってくれている。だってわたしはもう10年も「彼」のことだけを考えて生きている。「彼」だって私のことを知らないはずがないという気持ち。

ただの恋よりも、もっと強い予感みたいなもの。

ワカコは（金髪碧眼の美青年であるらしい）ジャック・オ・ランタンにタスキをかけてくれた青年のアカウントのアップした明治公園の写真を見て、見当をつけた場所に移動して辺りをウロウロしていた。

先程から外国人の参加者も時々見かけるが、どうも、その青年だと思われるような人物はみかけていない。

とはいえワカコはその青年を見たことなどなくて、金髪碧眼らしいというツイートは確かにあったものの、その青年を見かけても本人だと分かると思っっているわけでもない。本気で探し出せるとは思っていないが、探せ出せなくても探してしまう癖は、「彼」を追いかけているうちに身につけてしまった習性なのかもしれなかった。

そしてその青年を探しだして何をしたいわけでもない。

「探す」ということがワカコの人生の目的みたいなものになっているのかもしれない。

見つかるか否かは問題ではない。ただ探しているのだ。

しかしワカコはあの日沖縄で長期滞在していたドミトリーの部屋から書いた「彼」に宛てたメールのことを思い出して複雑な気分になる。

返事はこなかった。確かに彼の公式サイトメールアドレスに宛てて出したそのメールには、返事はこなかったのだ。

そしてワカコは東京へ帰った。

ワカコは辺りの人間を注意深く観察しながら群集をかきわけて進んでいく。

もちろんなかなかそれらしき人物はみかけなかった。

当然だ、こんなに人間がいるんだもの。ワカコは自分自身に言い聞かせるように呟き、しかし、本当によく集まったものだと感慨深くその群衆を眺める。

3月、初めて東京で原発に反対する趣旨のデモが行われた頃、集まるのはせいぜい1000人程度だったはずだ。

今日の明治公園には数万人と思われる人間が集まっている。

ワカコは群衆に囲まれたその場所で足を止めて目を閉じた。

「彼」が迎えにきてくれるに違いないと夢想しているときのような、心地の良い空白がアタマの中に訪れた。

すると、

「あの一」

と、正面に立ち自分に声をかけていると思われる者がいて、ワカコは目を開けた。

そこには、金髪碧眼の青年が立っていた。

16、外国人男性④

9月19日、明治公園に集まった群衆の熱気を感じながら、集会が始まるまで僕は感慨深く辺りをうろついた。

震災、そして原発事故が起きてから、本当に様々なことがあり、心休まることはなかった。

311、あの日は金曜日で、第一回目の大きな揺れがおさまって僕はすぐに彼女の会社の社屋の様子を見に走った。

僕の勤務する会社では震災時、安全確保のために不用意に動かない注意とともに、家族が心配な者はすぐに自宅に帰宅してもよいと許可がおりた。

僕は彼女の安否を確かめることだけが頭に浮かんだ。

彼女の勤務する出版社の社屋は相当な年代物で、いつか巨大地震がきたら危ないだろうと常々感じていた。オフィスで午後2時46分を迎えていた僕は、揺れのただ中にいても彼女の勤務先の、地震が起きなくても崩れ落ちそうな社屋のことをずっと考えていた。僕のいた頑健なオフィスビルにしたって、このまま崩れ落ちるのではないかという激しい揺れだ。あの社屋ではひとたまりもないのではないか。もしかすると今頃彼女の会社はペチャンコに潰れているのではないか。オフィスビルを飛び出すと、また激しい揺れがきた。最初の揺れから10分ほど断続的な揺れが襲った。少し落ち着いたと外に出たのだが、まだこんな強い揺れが来るなんて。東京に赴任してから地震にはそこそこ慣れたつもりでいた。しかし今回のものは、今までとは全く別の次元のものに思える。

日本列島ごと木っ端微塵になってしまうのではないか。そのときツイッターのタイムライン上で、最初の強震が都内でも震度5強との情報を見ていた。震源地は東北らしく、津波警報についてのツイートがやたら多いのが不気味だった。

オフィスから飛び出した街は騒然としていた。

歩行者たちが揺れるたびに恐怖のあまり叫びだす。逃げ惑う。車も急停車したりしていて危険な状態だった。

本来なら週末の休みへとつながってゆく穏やかな午後だったはずの街は騒然としたものになっていた。僕はその中を走りに走った。

渋滞の起きている道路もあり、クラクションが空気をつんざいて不吉に響いた。

果たして彼女の社屋は潰れてはいなかった。

蔦の絡まるレンガ風の外壁に包まれた、西洋館じみた社屋（それは文学好きな彼女の雰囲気にとってもマッチしていて僕は気に入っていた）の前に、社員がゾロゾロと出てきていた。

普段は車寄せになっている部分に彼女が時々行動を共にしている女性社員の顔が見えた。一度彼女と一緒にいるとき、「紗英先輩」と呼んでいたのが聞こえて、彼女とはまるでタイプは違うが、とても美しい人だったのでよく覚えていた。

しばらくして、彼女もまた社屋の中から出てきたのを見た時、僕は深く安堵した。彼女は他の社員の誰とも交わらず、ずっとスマートフォンの画面を睨み、操作を続けていた。ネットから災害の情報を得ているのだろう。僕は彼女が無事なのを見届けてその日はひとまずまたオフィスに帰

ったのだった。

そんな311のシーンがフラッシュバックして、僕は喉が締め付けられるような気がする。

ニホンジンだけでなく、たまたまこの2011年3月11日にこの列島に居合わせた様々な人種や国籍の人間も、等しくこの震災に傷ついたので。

そして、今日、9月19日、さようなら原発5万人集会の群衆の中で、彼女を見つけてしまった。大きなマスクですっぱり顔の半分以上を覆っている。小顔なので本当に顔が全部マスクになったみたいだ。普段からよくそんなファッションなのだが、こざっぱりとした木綿の白いシャツとベージュのチノパンツ姿で、飾り気のない黒のナイロンのナップザックを背負っている。

そしてあの艶のある真っ直ぐな黒い長い髪は見間違いようがなかった。

あのとろけるやわらかい絹のような髪に最初惹かれて、有隣堂で彼女から目が離せなくなった。

あのときと同じだ。僕はふらふらと彼女に吸い寄せられていった。

先日彼女のアパートから出てきた、あのジャック・オ・ランタンにマスクを貼りつけた大柄な男性は今日是一緒ではないようだ。

気がつくと僕は彼女に声をかけていた。

17、佑介⑤

「あの子なの。鳥島ワカコ。会社にいつもマスクをしてくる」

紗英が指さした先、道を隔てた反対側の歩道に、ギョツとするような本格的なマスクで顔を覆った女性が歩いている。

普通に風邪をひいたときにポーズでするようなマスクではなくて、明らかに防塵を目的とした、「絶対に口や鼻から悪いものを吸い込まないように」綿密な設計のなされた機能を兼ね備えているようなやつだ。確かにあれを会社で毎日している人間がいれば目立つし、周りの者は気にはなるだろう。佑介も目を瞠った。

しかも彼女は、マスクをしていてすらとても綺麗な部類の女の子だとすぐに分かる、あんな女性ならなおさらだ、と佑介は思う。

どんなストレートパーマをかけてもなかなかああはならないだろう、おそらく天然のまっすぐな黒髪が特に印象的だった。

身につけている洋服はシンプルだが、どれも体型に自然にフィットしてるし、素材が上質なのでとても清潔感があつた。履いている革靴もかなり上等なものだ、と素早く佑介はその女性の服装を観察する。

佑介の恋人、紗英もどちらかという服装の好みはプレーンなほうだが、もう少しフェミニンな服を着る。

マスクの彼女の身につけているものは、ほとんど男物といっても通用しそうな素っ気のないものばかりだが、もしかするとあそこまで伸ばした長い髪は、あのくらい上品でシンプルな服装をしていなければ悪趣味に見えてしまうのかもしれない、だから彼女はいつもおそらくああいう服装をしているはずだ、と佑介は考える。

「あの子は君と同じ編集室にいるの？」

「そう。でも、本当は海外文学の部署を希望してうちの会社に入っただけなの。チャンスがあればそっちに移りたいみたいで、うちの編集室の出す出版物にあまり思い入れがないみたい。仕事はきっちりこなすけど、言われた以上のことはやらないっていうか。空いてる時間は多分、希望の部署に移ったらやりたいことのために使ってるはず。ヤル気がないわけじゃないのよ。やりたいことが今はやれてないだけで。能力はすごく高いと思う」

紗英の口調にマスクの子に対する非難めいた調子は感じられず、あくまで淡々としていた。本心からマスクをしているということ以外に、特にあの子に違和感や敵意のようなものは持っていないようだと佑介は気がつく。

紗英は、女性向けの書籍や雑誌の編集という仕事にそれなりにプライドを持っていて、例えば同業者でもライバルとみなした女性には競争心をむき出しにするようなところもある。しかしマスクの子が自分のやりたい方面とは別の分野を志しているのだから、紗英はそもそも張り合うという気はないのだから。それどころか普段はおそらく、希望の仕事ができないこの後輩にそれなりに優しい気持ちを持っていたのではないかと思えた。

紗英がしょっちゅう行動を共にしている「山崎先輩」という人がいるが、この人に関しては尊敬とライバル心の混じった複雑な感情を持っているらしく、佑介との会話の中にもよく登場した。だがマスクの女の子についてはこれまで佑介は聞いたことがなかった。

「ワカコも、デモに参加するのね」

紗英は、ワカコのいる側の歩道に横断歩道を渡り、公園の中に入っていくにしたがい、ワカコのあとを追うようにして歩き始める。佑介は黙って彼女についていく形になる。でも紗英はワカコに追いつこうとするわけでもなく、一定の距離を保ったままだ。

ワカコといえば、時々ポケットからスマートフォンを出してそれを覗き込むことに熱心でこちらがあとから歩いていることには気がついていないようだ。

佑介は紗英とワカコを交互に観察しながら、自分がデモに参加することを決めたのに、なんだか自分が紗英に連れ回されているようだと思える。

そう。紗英は自分にとって、初めて自分の行き先を自分ではない人に決定させてもよいと思えた女性なんだと佑介は思い出す。

食事をする店も紗英が探して自分で予約を入れる。去年の夏の旅行も、ほとんど紗英が計画をたてて手配したくらいだ。

公園の中はものすごい人で溢れかえろうとしていた。

「原発は子どもの命を奪う凶器」

「原発のない安心社会を」

というようなプラカードやノボリを皆持っているが、特に熱心な活動家というタイプの人は見かけない、と佑介は気がつく。

ごく普通の人々が、本来なら穏やかに過ごしていた日曜日の時間を使って、この明治公園に集まってきたのだ。



ワカコの姿を見てギクリと縮みあがるような気分になった。

それなのに気がつくわたしはワカコのあとを追うように歩いていた。公園の中はすごい人で、見失わないようについていくのは大変だった。

強引に人波をかきわけてまでついていこうとする自分に驚きながら、足をとめることはできない。

ワカコがもし振り向いてわたしを見つけたらどう言うのだろう。

マスクのまっすぐ切り揃えられた前髪の隙間からのぞくあの目は、いつもわたしのことをあざけていた？

いいえ。

彼女にそんな気はないとわたしは知っていた気がする。マスクをしていないことを彼女に責められている気がしていたけれど、ワカコは必死で訴えていたんじゃないだろうか。

—東京はマスクを外せないくらい、もう汚れてるんだよ—

ワカコは誰にどんなふうにかかわれてもマスクは絶対に外さなかった。

ワカコが震災のあと長く会社を休んで4月に会社に戻ってきたばかりの頃、あの不穏なマスクはもちろん皆のからかいの的になった。

それでもワカコはもともと聡明な女性だったから、そのからかいが陰湿なものに発展することにはなかった。エキセントリックさも魅力のうちだった女性がまたなにか新しいアピールをしてると、好奇の眼差しと同時に、好感をもたれていた気もする。

しかし、初夏が訪れ、本格的な夏が過ぎていこうとする中で、みな、だんだんワカコのやっっていることが、冗談ではないことに気がついていったはずだ。

会社の中で妙な咳をしている人間があとをたたない。

原因はよく分からないけれど、おかしい具合に身体を壊して会社を休む人が増えた。

他の部署で肺炎が流行している噂もある。

みんな、なにかがヘンだと気がつき始めた。

フツーじゃ、ない。

でも誰も口にできない。

ただマスクをしてるワカコだけが知っているし、それを口にしてくれるような気がしていた。

でもワカコはマスクをしてるだけで、会社にはくるけれど、静かに仕事をしてるだけだ。

ワカコに、なにか言ってほしかった。

ワカコがハッキリ言ってくれるのを待っていた。

「ねえ？死にたいの？なんでみんなトーキョーにいの？みんなバカなの？」

一瞬ワカコを見失った気がしてキョロキョロしたが、隣を歩いていた彼が「あ」

と声を出したので彼が見ている先を伺うと、ワカコが誰かに喋りかけられていた。

スラっとした長身の白人だった。

ここからだ二人がなにを話しているのかよく判らない。

でも人ごみに紛れたまま、わたしはワカコと、その外国人男性を見ていた。

二人は知り合いなのだろうか。

初対面同士のような礼儀正しさを保ちつつ、お互いの表情に親密な絆で結ばれたような優しさが伺える。

マスクで顔を覆っているとはいえ、ワカコのほうのあんな表情は見たことがなかった。ともするとツンとすまして取っつきにくい印象を与えるワカコが、あんなに気を許して話をしているあの男性は一体どういう存在なのだろう。深い仲の恋人というわけではなさそうだが、もしかするとそういう関係になる一歩手前なのかもしれない。

「マスクの…、鳥島さんだっけ。話をしている相手はボーイフレンドなのかな」

彼も二人を見ている。なにか良いものを見ているといった、眩しいような表情をしていた。

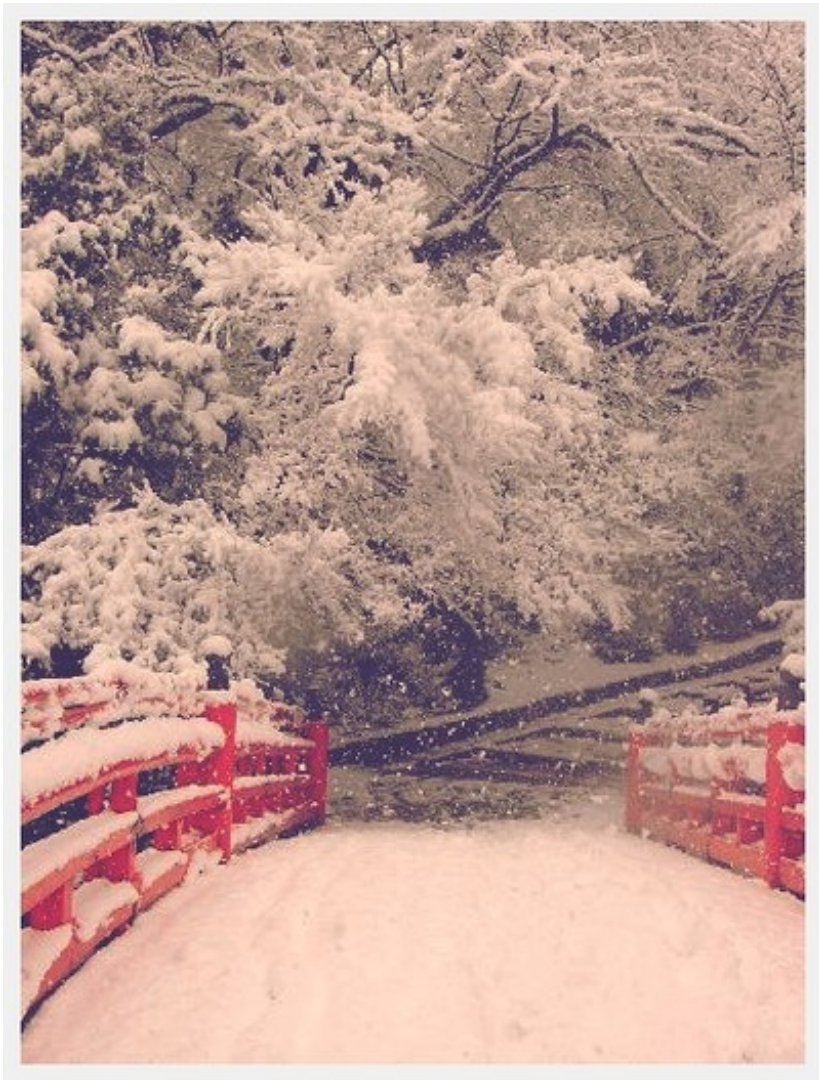
「そうね。なんだか良い感じよね、あの二人」

そう呟いて、わたしと彼は例えばワカコから見たらどんなふうなのかしらと思う。

いつものカッチリしたスーツを着た彼を見たら、いかにも紗英先輩の好きそうなタイプですよ、お金をうなるほど持ってそうなのが、などと皮肉めいたことを言われそうだが、さようなら原発集会にきている今日の彼を見て、彼をお金持ちふうの男性だと形容する人はいるだろうかと思ひ巡らせる。

そして、ここに集まっている人たちは、普段きっと様々な仕事をしている様々な立場の人なのだろうと、あらためて明治公園を見渡した。

いつも遠巻きに眺めていたデモの中に入ってみれば、そこはいかにも普通の人達の構成する空間で、なぜ今まで他人ごとだと思えたのかすでに不思議な気持ちがしている。



ワカコはその金髪の青年が誰なのかすぐに分かったような気もするし、誰なのかよく判らないまま会話を始めたような気もする。

とにかく彼の方から強く自分と話がしたいという欲求を感じたし、ワカコも同じように強く彼と話をしたいと思った。

だから話をした。

それも延々と途切れなくらいに。

初めて会ったとは思えないくらいに。

ワカコは不思議な浮遊感の中で、ひたすら夢中で彼と話をしていた。

やがて「さようなら原発5万人集会」が始まるアナウンスがあって、我に返るまで、しゃべり続けた。

そして、我に返って、彼の持っているプラカードに「NO NUKES」という文字と、マスクをしたジャック・オ・ランタンのイラストを認めたとき、恵比寿駅のワカコがN95マスクを接着したカボチャにタスキをかけてくれたという人物に違いないと確信したのだが、ではなぜ彼が自分に話しかけてきてくれたのか、あまり疑問にも思わなかった。

自分のほうがそのタスキをかけていた男性を探したいはずだった。

そしていつもあの街でいつかあの人が話しかけてくれると夢見ているような安らかな気持ちになって目を瞑っていたら、この男性が話しかけてくれたというわけだ。

ワカコは死神のアカウントで彼に話しかけていたことを思い出すが、死神のアカウントがこのわたしだと調べがついた、ということなど、ありうるのだろうか？

でももうそんなこともどうでもよかった。

この気持よく晴れた公園で、ワカコは彼と反原発集会のまっただ中にいるというのに、夢中で恋をしている一人の少女になった気分にいる。

これが初めての彼とのデートで、夢中で自分のことを知ってもらいたくて、また、彼のことを知りたくてたまらない、恋の初期症状にいるのだ。

ワカコは初めての体験であるにも関わらずはっきりそれがわかった。

今、自分が恋をしていると。恋に落ちてゆく真っ最中なのだと。

そして彼の切羽詰まったような、しかし親しみのこもった表情には、自分と同じ感情が含まれていると確信している。なぜ判ってしまうんだろう。

公園に設けられた壇上でスピーチが行われてゆき、やがて脱原発デモは出発した。人数が多すぎて、自分たちの出発はなかなかやってこない。

その間もひたすら、ワカコはその青年と話を続けた。

どうしてこの人とこれまで出会うことがなかったのだろう。ずっと出会うべき運命にあったのに、私たちはそれぞれ別の道を歩んできて、ようやく今日会えるというのが筋書きだったのかしら。この脱原発の集会で初めて出会うという運命が定められて、それぞれ生まれてきたのかしら。これまで30年近く離れて生きてきたけれど、それがとても不自然なことに思える。

こうして出会ったことが自然なことで、出会っていなかったこれまでの人生がニセモノだと思える。これから自分の本物の人生の幕が明けるに違いない。ワカコはそんなことがすっかり信じられる自分に、自分が一番驚いている。

幸福だった。こんな幸福は今まで味わったことがない。

やがてワカコとその青年の立っている辺りもデモの列として動き始め、ワカコはそのまま自然とその青年の隣を歩く。

本当は手をつなぎたい、とワカコは思ったし、相手もそう思っているような気がした。脱原発デモで初めて知り合った人と手をつないで歩くというのはどうなんだろう。

そしてワカコは自然に彼の手をつないだ。

とても安心した。

しかし、次の瞬間鈍い衝撃が二人の間の空を切り裂くように走る。

どよめきが起こる。

「爆発だ」

「どこかで爆発が起こったぞ」

そんな叫び声があちこちから聞こえ、デモを歩く人々は騒然となる。

周囲の警官たちが列を乱すなど怒号をあげた。



僕はこんな瞬間をどれほど夢見てきたのだろう。
彼女、いや、本当はもう名前だって調べて知っていた。
どうやって調べたのかって？

彼女が例の「紗英先輩」と呼ぶ女性と作ったらしき都内のショコラティエ情報に関する書籍（当時ワカコは紗英先輩としょっちゅう都内のチョコレートショップを取材してまわっていたのを、僕は尾行して知っていた。二人一緒のこともあれば、ワカコがカメラマンと二人で取材に行くこともあった）が、その出版社から出版されて書店に並んでいるのを発見して奥付を見たら、編集者のところに、紗英先輩の名前とともに、「鳥島ワカコ」という、おそらくは彼女の名前が並んでいたのが、最初に彼女の名前を知った瞬間だ。（ちなみにその本は記念に購入して、紹介されているショコラティエを巡るのは僕の密かな趣味になっていた。本国にいるときですら、そういう店の本場にいたのに全然見向きもしなかったのだけれど）

僕の愛しい女性の名前は鳥島ワカコ。
それを知っただけでとても幸福だった。
ワカコとこんなふうに話をする事だけをずっと夢見てきた。
そのために日本語を懸命に覚えてきた。

ワカコと話をすることは絶対に楽しいに決まっている。

話は尽きないだろう。

そう信じていたが、それ以上だった。

彼女は終始楽しげに僕の話に相槌を打ち、朗らかによく話した。

僕もいつもの僕からすれば随分浮かれてハイテンションに話をしている。

夢見てきたことが、実際に起きていた。

なぜこれまでこんなふうには話しかけなかったのだろう。

でも、今日話しかけたからこそ、うまくいったのかもしれないという気持もある。

樹が熟した。それが今日なのだ。何の根拠もないのに僕はハッピーなあまりにそう信じることができる。

その上、もしかして今日から、僕がたくさんたくさん夢見てきたことをひとつひとつ実行にうつすことができるんじゃないだろうか。

例えば天気の良い日は、バスケットに美味しいものを詰めてピクニックにいくだとか。

おしゃべりを楽しみ、ときにはお互い読書にふけり、また読んだ本についての話をする…。そんなありきたりだけれど、僕が心底欲しかった彼女との時間。

そういう諸々の夢が叶うのでは？

現に今、こんな素敵に晴れた日曜日、僕は彼女と楽しいお喋りに興じている。

ここがどういう場所で、なんのために僕達はここに集まったのか、ほとんど僕の頭から消えていた。

でも、同時にここに集まった人々は、結局、愛する誰かのために集まったんだということもずっと念頭にあった。人は愛する人のためにしか動けない。自分の欲だけのためには生きられない。

明治公園に集まった人たちが愛する、やはり膨大な人たちのことを思う。

誰だって、愛する人を守りたくてたまらない気持になったことが、あるだろう？

今、僕は、目の前にいるこの女性を守りたい。

この人をあらゆる悲しみ、暴力から守ってあげたい。

それなのに。

デモに出てそれほどまだたたないうちに混乱は始まった。

目の前には、真っ白な防護服と防毒マスクで顔を覆った人間（原発作業員として紹介される、まさにその人達が着ているような服装だ）がワラワラと湧くように出現していた。

彼らもまた今日のデモの参加者で、これはパフォーマンスなのではないかと思おうとしたが、彼らが携えているのは、おそらく本物の武器だ。

今、デモの隊列は乱れ、警官の怒号やホイッスルが飛びかい、辺りは騒然としていた。

真っ白な防護服の人たちはなおも増え続けた。みなマスクをしているので男か女かもわからない。いや人間なのかどうかすらも判らない。一体なにが起きたのだろう。

僕は彼女の手をきつく握り締める。

防護服の連中は、明らかにプロだった。

取り押さえようとした警官が束になってかかってくるのを、それを上回る統率のとれた動きであっさりと封じ込めた。しかも日本の警官の束より少ない人数で。

全員の体のキレが違った。彼らは日本の警官とは明らかに違う、実戦で鍛えられた集団だと僕の目にはうつった。



午前4時、タクシーで到着した羽田空港国際ターミナルは死んだように静まりかえっていた。電灯が抑えられてこの時間帯は暗いのだと知っていても、空港が閉鎖されてしまったのではないのかと訝しんだくらいだ。

あとから必ず追いかけるから。

仕事のゴタゴタを片付けてすぐに、追いかけるから。

だから君が一足先にいってくれ。

あんなことがあって、こぞって日本人が国外へ脱出するような事態になるかと思ってみれば、早朝の羽田空港は嫌に静まり返っている。

今日のデモ…いや、先程日付が変わったので昨日と言うべきか、9月19日、さようなら原発集会のあとの反原発デモの最中にそれが起きた。

彼から届いたメールに記載されているEチケットでチェックインする。

地下鉄などを使うのが怖くて徒歩で帰宅してすぐに荷物を作った。

「パスポートさえあればなんとかなる」と彼に言われて、荷物は最小限にした。

「最後に食事を一緒にとは思ったけど、仕事をなるべく片付けて、なるべく早く僕もおいかけるから」

と、彼はわたしをマンションまで送ってくれたあと、すぐにいってしまった。

「飛行機のチケットは手配してすぐにメールに送るよ」

そして、夕方、このNY行きの早朝便を手配したというメールが届いた。

実際に日本を脱出するといっても、どこにいけばいいのかわたしにも、彼にもよくわからなかった。

結局彼は、仕事のためによく行き来しているNYなら、と思ったらしい。

マーティンという、いつもスーツを作っている店の店員の電話番号が、困ったら連絡するようにと添えられていた。

洋服屋の店員が、いくら彼がお得意さんだとはいえ、まさか個人的になにか助けてくれるのだろうか。にわかには信じられないが、彼は、会社を経営している経験から、本当に信用に足る人間であるかどうかを見極める目はとても厳しかった。めったに人に気を許さないところがある。その彼が電話番号を書くのだから、きっと信用していいはずだ、と自分に言い聞かせた。

「首都圏電力の本社ビルと、経済発展省のビル、さらには国会議事堂をすっかり占拠してしまったらしい」

出発ゲートで搭乗を待つ、白人の大柄なビジネスマンふうの男性が携帯電話で喋っているのが聞こえる。

「奇妙な連中なんだ。ガスマスクをして防護服で身を覆ってる。さらに全員が武装している」
NY行きの便を待っているその男性は、しかしいくぶん古めかしく聞こえるほどのクイーンズイングリッシュを使っている。

そう、昼間、あの連中がいきなり街中に湧き出すように現れた。

おそろいの白い防護服。

フルフェイスのガスマスク。

あちこちで爆発音が聞こえたが、そのときは正確になにが起こっているのかわたしたちにはわからなかった。

しかし、その武装勢力は圧倒的な強さで、東京を制圧していったらしい。

夕方から夜にかけてのニュースはそのことだけであふれかえってた。

これまで、どんなに原発反対の巨大なデモがあっても沈黙を守ってきたテレビも、この日、明治公園の脱原発集会とデモに6万人を超える群衆が集結したことを述べ、その上で、その防護服の武装勢力について繰り返し伝えていた。



紗英をマンションに送り届てすぐに、佑介はオフィスフロアを借りている港区のビルへ向かった。

途中で拾ったタクシーの中のラジオニュースが騒ぎのことを伝えているが、まだなにが起きているのか把握しきれていないようだ。

運転手も、今日は都内のあちこちが通行止めになってますから覚悟してくださいと複雑そうな口調で言った。

恵比寿駅のジャック・オ・ランタンの付近で今日の「さようなら原発5万人集会」のビラをもらい、そのビラに記載されていたツイッターアカウントをフォローしてそれからツイッターから情報を得ていた。

ツイッターは、数年前に一応アカウントをとってみたものの、それ以後、佑介はほとんどログインもしてこなかった。

しかし、今回ビラに書かれていたひとつのアカウントをフォローしてみれば、気になる情報やリツイートを追って、どんどんフォローするアカウントが増えていった。そこで得た情報は、これまで新聞やテレビから見聞きしていたものとは随分違った。

というよりも、ツイッターのツイートを読んで知れば知るほど、これまでの既存メディアがいかにデタラメであるかを思い知った。

首都圏電力だけでなく、全国の電力会社は、独占企業にも関わらず、多大な広告費を投じてメディアを手なづけてきた。

まさに今回のような最悪の事態に備えて行われてきたことだったのだ。

民衆はまんまとメディアの嘘に愚弄されている。

自分までもがそうだったことが正直悔しかった。

電力会社の飼い犬であるマスコミは、原発事故のあと、放射能に心配は要りませんとお気楽な発言を繰り返してきたが、それはどうやら真っ赤な嘘であるらしかった。

旧ソビエトで起きた原発事故の本当の被害も隠蔽されてきたが、実は深刻な被害が今も続いているらしい。

現在の首都圏と同等の汚染があったらしいウクライナのキエフという都市では生まれてくる子どもの15%しか健康ではないという。残りの85%はなんらかの病気を抱えて生まれるくるのだ。そしてこれは未来の東京の姿なのかもしれない。

世界の原子力ムラがそうやって核にまつわる都合の悪い情報を民衆が知ってしまわないように、注意深く、そして莫大なお金をかけて隠蔽してきたというわけだ。

ときには真実を知る数少ない者たちを迫害しながら。

マスクをがっちりつけていたという紗英の後輩はおそらくこういうネット上の情報をいち早くつかんで、放射能から身を護っていたに違いない。

しかし、その日ばかりはツイッターのタイムラインも混乱していた。

なかなか真実だと思える情報をつかむことができないままタクシーはオフィスに到着して、佑介が一番最初にやったことは、紗英を安全な外国に逃がすために飛行機の手配をすることだった。秘書も休みだったので、直接代理店に電話をかけて羽田発のNY行きのビジネスクラスをおさえた。うんざりするほど累積しているマイレージを使って、アップグレードで簡単にファーストクラスを指定することもできたが、そんな大仰なシートに乗せられては、紗英なら返って迷惑に思うかもしれないと思いとどまった。

ESTAの登録は昨年一緒にハワイを旅したので、彼女もそれがまだ有効のはずだった。

チケット情報を紗英にメールして、確かに受け取ったと返事がきたのを見届けて、佑介はほっとしてデスクに腰を下ろした。

いくつかの仕事について、部下や取引先に電話をしなくてはならないが、今日は日曜だ。本格的に色々やらなくてはならないのは明日以降になるだろう。

そして社員たちを残して、はたして自分だけが国外に脱出することなど許されるのだろうか、同じ迷いがまた佑介を襲う。

いつのまにか日没が過ぎ、オフィスは暗がりに包まれていた。

誰もいないはずの背後の窓の外にざわめきのようなものを感じて振り返れば、地上35階から見渡すトーキョーシティの、溢れるような夜景が広がっていた。

なんと美しいのだろう。佑介は、見慣れているはずの夜景に息をのんだ。

そうか、部屋が暗いからこんなに夜景が際立っているのか。

いつもは煌々と灯の点ったオフィスにいたので、こんなクリアな夜景を見たのは初めてだと佑介は気がついた。

この宝石箱から光が溢れて弾けてるような美しい都市に、放射能が巣食っているなんて、信じられない気持だった。生まれた時からここに住んできた。東京をことさらふるさとだと感じたことはなかったが、自分が帰るべき場所は、ここ以外に思いつかない。紗英はどうなんだろう。随分長い間帰ってないという、あのすっぽり雪に覆われたあの北陸の街について、どんなことを感じているのかいつかゆっくり話を聞いてみたいと思った。

明日以降、様々な交渉をこなすために、今晚は徹夜で片付けることが山積みだ。

佑介は気を取りなおしてデスクに向き直る。ラップトップを開いて、仕事のフォルダに触る前に、もう一度ツイッターにアクセスした。

「東京陥落。防護服のエイリアンたちに占拠されてしまった首都」

そんな文字が踊っていた。

ここは、そして今は、一体いつ時代のどこなんだ？

—ここはトーキョーだぞ！

実際に佑介はそんなふうに叫んでいた。ここは東京だ。首都だ。

そして佑介は猛然と仕事を進めた。



明らかになにかが起きていた。

ワカコは信じられない気持ちで目の前に繰り広げられている光景を見ていた。

いきなり現れたあの大勢の白い防護服姿—それは原発で働く人びとがこれまでも身につけてきたものではあるが、現実には存在するとは思えない一種SFじみたコスチュームで、しかし311後いきなり日常よく目にするようになってしまった、あれだ—、の連中が起こしていることではあるが、

今まで起きたことのない、尋常ならざるなにかが巻き起こっているのは確かだった。

「あの防護服の人々は、デモの参加者にはまったく危害は加えてないよね。あの大仰な防護服という視覚だけで警官を挑発できている。そして挑発にのってきた警官だけを倒してる。手にしている武器も今のところ使っていない」

手をつないでいた青年がそう言い、ワカコも、なるほどそのとおりだと思う。

それを証拠に、慌てふためいてデモの列から抜け出る者も最初こそいたが、そのうちデモそのものはまた前進を始めた。

爆発音が起きる度に警官がそっちに突進して、防護服の連中と一悶着おきている。しかしその爆発音が、着実に警官をデモの列から離していた。

いつのまにか上空にはヘリが何機も飛び交っていて、ますます辺りは騒然としたきな臭雰囲気

包まれていた。

しかし、デモじたいはまだ生きていた。

ワカコも、そして周囲の参加者も、また声をあげはじめ、楽器を鳴らしていた者たちもまた太鼓や鉦を鳴らしはじめる。

「げんぱついらな一い！」

「命を守れ！」

そんな叫びがこだましていく。

「一体なにが起きてるんだろうね」

手をつないだ青年は、デモのシュプレヒコールをあげつつ、合間にスマートフォンを覗いていた。

それでワカコも気がついてすぐにツイッターにアクセスする。

しかし、なぜか自分の「死神」のアカウントにアクセスできない。この騒ぎで一時的にサーバーに負荷がかかりすぎているのだろう。

しかし、予備に用意しているアカウントにはあっさりログインできて、普段、原発に関する情報を集めやすいように選んでフォローしたメンバーの発言がタイムライン上に次々にあらわれるのを読むことができた。

「謎の防護服姿の兵士たちが首都をのっとりた模様」

「ユーストの中継復活しました。すごい数の防護服だ。これはテロですかね」

「先ほど入った情報。首都圏電力が完全に包囲されている模様。今、防護服軍団と警視庁の大規模な衝突が起きている模様」

「次々に倒されていくのは警官たちだ。防護服姿の奴らは強すぎる。タダ者じゃないな、奴ら・・・」

「霞が関にも防護服姿のやつらがなだれこんだ模様」

「経済発展省ビルも占拠されたみたい」

「今のところ、防護服、警官、双方どちらかが発砲したという報告はないですね」

そんなツイートが絶え間なく飛び込んできている。

隣の青年のほうも似たり寄つたりの情報を見ているらしかった。

「ここに参加しているのは危険かな。君をデモから抜けさせたほうがよいだろうか」

青年がワカコに聞いた。

「いいえ、防護服の連中はデモに危害は加えてないからわたしはこのままデモに残る」

「僕も、おそらくデモにこの先危害はないと思う。デモを抑える予定だった警官たちはもうすっかり防護服の連中を追うために車道に残っていない。デモ参加者が自分たちの力でデモを整然とこのまま続けることが大事だ」

青年の言葉にワカコもうなずいて、シュプレヒコールを上げ、さらにタイムラインを時々チェックした。

そして青年が驚いたような声をあげた。

「犯行声明のようなものが出たらしい。防護服の集団は『死神』と名乗っているみたいだ」

青年が読みあげたツイートの内容にワカコはギクツとする。死神？自分のアカウントが自立して勝手になにか行動を起こしたような気味の悪さを感じる。

そしてログインできなかった死神のツイートを、予備アカウントにログインした状態で念のためチェックした。

「我、首都を制圧す」

最後のツイートは確かにそうになっていた。

ワカコが投稿したものではない。

アカウントがのっとられてしまったようだった。言い知れぬ不安がこみあげてきて、めまいがするようだとワカコは思った。



ここはどこだ？

ディズニーランドよりよほどカラフルでキッチュでチャーミングな魔法の国。

僕はずっと夢を見ていたんだろうか。

かつてアジアの都といえば上海だったのだろう。

しかし僕の世代の欧羅巴人にとって、

アジアの中心はトーキョーであるという認識で育った。

アジアにとどまらず、数字の上でなら世界の頂点に立ったこともある、摩訶不思議な島国、日本。

バブルの頃、東京23区の地価の総額が、アメリカのあのただっ広い国土全部をまとめた地価と同じになったことがあるらしい。

経済というものに実態があるとは思えず、その脆さはバブル崩壊の時代からずっと懸念されてきた。リーマン・ショックでさらにみなそれを確信した。

実態のないものをさらに実態のない金で売買し実態のない経済がひとり歩きして、破綻が起きればいろんな形で人が死ぬ。しかしそもそも実態のないもののせいで、なぜ人が死ななければならないのか。時には自死という形で。

日本のバブルが弾け、アメリカでリーマン・ショックが起き、それでも人々は夢から醒められないままだ。世界中の人が大きな博打から手を引くことができないでいる。負けても負けても中毒みたいに、次は勝てると思い込んでいる。

さらに現在、わが欧羅巴大陸のあちこちで経済は破綻の様相を呈している。資本主義経済というもの自体が終焉を迎えそうな気配を肌で感じるこの時代に、日本であの信じられない震災が起き、原発は史上最悪の事故を起こし、派手に核爆発までした。国土に、3つ目の、ヒロシマ・ナガサキよりも性質の悪い核爆弾が落とされたようなものだ。

それなのに、やっぱり東京は、キッチュな色彩を放ちながら、あの控えめな笑をたたえている。合成されたアニメの声優のようなその声は人間の声ですらなくて、しかしなによりもトーキョーらしいその声が、一定のトーンとリズムで歌い続けている。抑揚もサビもないそのメロディはしかし存外心地よい。音楽にも「カワイイ」っていうものがあるなんて信じられない気分だったが、ニホンジンは「カワイイ」音楽まで発明してしまったんだと僕は感心した。

感情の排除された、まるで機械の歌う恋ならば傷ついたりすることもなさそうで、僕はそういうタイプの曲を結構たくさんiPodにダウンロードしていた。

日本語のオタクという言葉はいろんな受け止め方ができると思うが、僕はオタクという言葉のもつナイーヴさにシンパシーを感じた。好きな女の子に声もかけられない「草食系男子」で、さらにその女の子のあとを尾行するのが日課の僕は、ニホンジンのなりをしていれば「オタク」と呼ばれたのだろう。

そして、今現在の目の前の光景。

ゴジラもウルトラマンも出てこないが、それよりももっと現実離れた、真っ白な防護服姿の連中が犇めいていた。

統率のとれた軍隊みたいにそいつらは動いて、警官を打ちのめしていった。

連中の腕があまりにもたつので、ドタバタした乱闘という感じにはならず、警官は皆、飴のようにぐにゃっと締め上げられて、真空パックにされてゆく工場の製品みたいに見えた。

僕は本物の戦場を見たことがない。しかし、生きるか死ぬかの瀬戸際で鍛えあげられた殺気は、きつとあんなふうに静謐さに満ちているのだ。殺るか殺られるか。もたもたしている余裕は戦場には存在しない。感情の介在する余地は、一瞬の命取り。

ふと、連中は見せかけだけであんな防護服を着ているのかということが気になった。僕は、事故以来携帯しているガイガーカウンターで計測を試みるが、普段以上に値が急激に上がったということはない。他にも都心で放射線量が高くなっているツイートがないかチェックしてみたが、今のところそんな広告は見られない。

代わりにこんな情報が飛び込んでくる。

「防護服の連中のものと思われる声明がネット上に出たらしい。彼らは自分たちを死神と読んでいる」

とあった。

YouTubeへのリンクが貼られていて、そこへ飛んでみると防護服にフルフェイスの防毒マスクが一人登場して、スピーチを始めた。

日本語ではない。ネイティブの水準は満たしている英語だったが、デモのざわめきの中、スピーチをしっかりと聞きとるのは不可能だった。

そのとき、隣のワカコが血の気の引いた顔をしていることに気がつく。

「どうしたの？」

ワカコは眉間に皺を寄せて、手にはiPhoneがきつく握りしめられている。

「なにかひどい情報でも？」

僕は重ねて尋ねる。

「わたしのツイッターアカウントが乗っ取られたみたいなの」



機内に入るとすぐに野菜のスムージーを手渡されたが身体が冷え切っていて受け付けず、なにかあたたかいものが飲みたかった。

早い時間とはいえ、9月の朝がそれほど寒かったわけではない。しかし緊張感のせいだろうか、指先がこごえるように冷たく感じる。

飛行機が水平飛行を始め、スチュワードに頼んであたたかいスープを持ってきてもらい、それをゆっくりと飲んだ。

このスチュワードは、まさに飛行機が離陸しようとして滑走路をスピードを上げて走り出したとき、通路をツカツカと自分のシートに向かって歩きながら、胸で十字架を切って「アーメン」と呟いた。それほど大声ではなかったが、ちょうど呟いたのがわたしの目の前だったので、わたしは一瞬驚いた表情をしたと思う。それを見てとった彼は軽くウィンクをして通りすぎていった。キリスト教徒の数の少ない日本ではあまり見かけない仕草だったので驚いたこともあるが（日本の航空会社のCAはまずそういう仕草をしないだろうし）、それにしてもその呟きは、いやにくつきり硬質な響きでわたしに届いた。

アーメン。

神様。

これまで飛行機に乗って、墜落したらどうしようか、などと心配したことはなかったが、そのスチュワードの仕草を見て、いきなり自分の靴底の裏は、機体の底の厚みだけしかなくて、その下にはな一んにもないことが思い起こされた。いわばわたしは空中に腰掛けているようなものなのだ。

ぽっかりと、わたしは空に浮かんでいる。

高速で移動しながら。

明日から会社はどうするの？というわたしの言葉に、

「そんなものはもうどうでもいい。日本にこれ以上、もういないでほしい。日本の空気を吸って

ほしくないし、日本の食物も食べないでほしい。生活のことはなにも心配しないで。どうか日本から逃げてほしい」

と彼が言ってくれた。

仕事は好きだった。誰に強要されるわけでもなく続けてきた。

でも、どこかでこんな立場を夢見てこなかったか。

生活の保障はぜんぶ、男がしてくれて、わたしは一切の責任から逃れて暮らす。

それはつまり誰かに従属することとひきかえに手に入れる、庇護されている立場のニセモノの自由だと、これまで毛嫌いしてきたものではないの？自問するが、わたしにはもうよくわからない。

結婚しようと言われたわけではない。でもそう言われたような気がする。

マスクをつけたワカコよりも、わたしは例の「ホーシャノー」とかいうものから、遠くへ逃げることができる。

これまで結構たくさん「ヒバク」しちゃったかもしれない。

でも。

今からは「ヒバク」することのない世界にゆくんだ。

彼がツイッターなるもので読んだ情報によれば、すでに体内に取り込んでしまった「ホーシャノー」も、汚染されていない場所に逃げれば、だんだん排出されていき、「ナイブヒバク」は減ってゆくという報告があるらしい。例の旧ソ連で起きた事故からの教訓であるという。そう、小学生の高学年だったか中学生の頃、そんな事故があったっけ。

黒い雨が降るから、雨に濡れるな。そんなふうに言われていたっけ。そんな遠い外国の事故ですら、雨に濡れると死ぬかもしれないと騒いだくせに、この狭い国土の中で原発が大爆発しちゃったのに、わたしたち、どうして平気でいられたんだろう。

離陸してまだそれほど経っておらず、日本に近い上空にいるとしても、「ホーシャノー」からだんだん離れられることが嬉しかった。全身の細胞のひとつひとつが歓喜している。もう、「ホーシャノー」で染色体が傷つくこともない。あんなものを四六時中浴びて生きていたなんて。それを望んだわけでもない。でも、嫌だと言えなかった。逃げることなんて、できないと思っていたし、だからみんな、東京で、おとなしく何事もなかったように働いているし、わたしもそうしてきた。

それなのに。

なぜ今までそんな汚染の中に平気でいられたのかももう不思議な気持ちになった。

みんな！逃げて！そこは危険よ！

機内から拡声器で東京にまだいる人達に、いいえ、日本中にいる人達に言ってあげたかった。

安全地帯に自分が入ってしまえば、簡単に認められる。

そこは、危険地帯なのだと。

やがて飛行機は、北米大陸を目指して、地球の北を一路目指す。

千島列島、アリューシャン列島などの文字が目の中のディスプレイに記されている。

例のスチュワードがやってきて、シャンパンを注いでくれた。

わたしはそれを掲げる。

再び彼に会える日はいつなんだろう。彼は無事にわたしに会いに来てくれるのだろうか。

わたしは、彼と、結婚できるんだろうか。

ずっと、夢見てきたっていったら、笑われるのかしら。

結婚に憧れてきた？

いいえ、誰かに無条件に愛されたかったの。

打算もなにもなく、ひたすら愛してほしかったの。

ずっと、ずっとそれだけを夢見てきたの・・・。



写真は故郷の雪景色を昔撮ったもの↑

窓の外、東京は湖に水没した太古の遺跡のように眠っていた。

いつか、放射能汚染によってこの都市が本当に廃墟になってしまったら、それはそれで、たぐいまれなる美しく幻想的な遺跡群となるのではないか。

ひと晩中デスクに向かって仕事をしていた佑介は、明け方、手を止めてまた背後の巨大な窓の向こうを眺めている。

疲れで頭が痺れるような感覚が、妙に快感だった。

ちょっとしたハイになっているのだと自分でもわかる。

腕時計で確認すると、おそらくもうすぐ紗英が日本を発つために搭乗口にいるはずだ。

コーヒーでも飲み明け方の街に降りていこうかと考えていると、ふいにSkypeのコール音が鳴り響く。

パソコンのディスプレイに、NYのマーティンのIDが表示されている。

日付が変わる前に、紗英のことを頼むとメールを出しておいたのだ。

「やあ」

WebCamを通して、マーティンの顔が現れた。

今日は仕事がオフなのか、自宅のアパートの一室らしき場所からskypeは接続されていて、マーティンはゆったりしたトレーナーを着ている。

しかし寝床からそのまま出てきたようなだらしなさはなくて、そのリラックスたのための衣服もまた彼なりに美しく着こなしていた。マーティンほど美しくスーツを着こなす男性には滅多におめにかかれないが、彼はそもそもとても美しい男性であることにあらためて佑介は気づく。

彼はもともと広告会社に勤務していたという。

しかし広告という実態のないものを売ることの自分の中の矛盾に疲れて、

実態のあるもの――それは職人が丁寧に裁断したり、縫製したりした、高級なスーツやシャツ

やネクタイだ――を、

ちゃんと客と向き合って、直接手で渡して売る仕事をしたいと転向したと聞いた。

本人も、なにか手仕事によるアートを生み出すことに生きがいを感じているということだった。仲間とのグループ展の案内のメールを何度か貰ったことがあったのに、そういえばこれまで佑介はあまり関心を払ってこなかった。洋服を縫製する段階で出てくるはぎれを利用した立体作品であったと記憶するがこれまでその作品を見に足を運んだことがなかった。

「広告というものの実態は、例えば気の利いたキャッチフレーズだったり、芸術性にも溢れた印象的な写真や絵画、動画が代弁してくれる、商品のイメージやなにかであって、イメージだってもしかすると、れっきとした実在するものであるのかもしれない。

だからあくまで僕自身の感覚の問題なんだろうね」

マーティンと、接客用の個室でよくとりとめもなく話しあった。

マーティンは続けた。

「イメージそのものも、それを代弁しているキャッチフレーズにしろなにかを表現した絵にしろ写真にしろ、僕にとっては堅実で手応えのある現実とはかけ離れていたんだよ。

いや、僕がその商品について個人的にイメージするものと、広告のために打ち出すイメージが乖離していくばかりだというか。

しかも動く金額の莫大さには虚しくなるばかりだった。

それらのものを売っていると、そう、自分がどんどん生きている感覚が希薄になっていくんだ」

マーティンはそんなようなことを述べていた。

白色人種の髪の色の変り加減について佑介はどのような区分があるのか詳しくないのだが、店で会うときはきちっと撫で付けられた髪が、今日はふわっと顔にかかっているせいか、いつもより淡い金色に輝いてみえ、そして佑介が考えているのよりひどく若く見える。

一瞬、この職業とは離れた表情をした彼が、NYという街を紗英と歩いているシーンを想像して、佑介は嫉妬を覚える。

「やあ、メールは読んだよ。ありがとう。僕に君の大切な恋人のことを頼んでくれて。嬉しいよ」

マーティンがしゃべりだし、動画は抑揚のある音声の躍動感に比べて、ぎこちなく動く。

「明朝JFKに紗英を迎えにいったら、ホテルに送り届ける。君が手配しているという長期滞在できるアパートメントはいつ頃入居が可能なのか分かったらまた連絡してほしい」

佑介はなんだかマーティンに気圧されてしまう。

紗英を守ることができた自信に満ち溢れていたはずなのに。

「よろしく頼んだよ。本当にありがとう。快く引き受けてくれて」

「どうってことない。よく決心したよ。こちらのニュースでも日本の騒ぎについて繰り返し伝えているよ。一体あの防護服姿の集団は何者なのか専門家達があれこれ予想しているが、CIAにだってあんな完璧な部隊は存在しないだろうってね。日本にとって救世主なのか、それとも、名前の

とおりに、死神になるのか」

死神・・・。

佑介は、廃墟のような、それなのに美しい首都の眺めを今一度振り返って眺めたい気がして、自分の背後の窓の外の風景は、そうだ、マーティンのほうにwebcamを通して伝わっているのだと知る。



ツイッターアカウントを乗っ取られたことが判っても、
具体的にどうすることもできず、
ワカコは最後までデモの列に参加した。
信じられない騒ぎが首都に起こっているはずなのに、
その割には、辺りが妙に静かなのが気がかりだった。
脱原発の叫びは、乾いた秋の空気の中に硬質に反響した。
占拠された国会議事堂、経済発展省、首都圏電力のそれぞれの建物が一体どうなっているのか、
内部に関する情報はなにも入ってこない。
そもそも今日は日曜日なので、省庁や電力会社のビルに一般の職員は数多くは出勤してきていないはずだった。
デモがゴールした時点で、お互い確認をしたわけではないが、
ワカコは今日知り合ったばかりの外国人男性と行動をこの先もずっとともにするのが当然だという
気持で、離れることなど考えられず、二人で暗くなった東京を歩いていた。
「乗っ取られたアカウントっていうのが、じゃあ、死神なんだね」
青年が言う。
「君が死神で、ジャック・オ・ランタンにタスキをかけてくれてありがとうって死神アカウント……つまり君が僕にメンションをくれたんだね。
そしてジャックをランタンにマスクを被せていたあの男性は、君の……その、仲間なのかい？」
青年がジャック・オ・ランタンにタスキをかけたのだから、
ワカコが男装して恵比寿駅でマスクをアロンアルファで接着しているところを目撃していてもおかしくはない。
そして、ワカコが死神のアカウントを使ってタスキのお礼を言ったことから、
自分の男装姿が死神アカウントと関連あると考えているのだろう。しかしでは、そもそも青年が
なぜ初対面の自分に話しかけてきたんだろうか。あの男が自分の変装だと、どこかで見破ったか

らなのではないのか。それにしても青年はとぼけているわけでもなく、マスクをつけた男性と自分を別の人間だと考えている。

ワカコはあれは自分の男装なのだと打ち明けた。

青年は最初目を丸くして、そのあと盛大に笑い転げた。

つられてワカコも可笑しくなって笑い出す。

結局、青年が自分になぜ話しかけてたのか判らないままだが、そんなことはどうでもいいように思えた。

「食事を一緒について思うんだけど、安心して食べられるレストランも今の東京にはないし、安全な食料を買いこんで、僕のうちに食べませんか」

二人の笑いが落ち着いたところで青年がそう言い、ワカコは喜んで承諾する。

歩いている道のすぐ先に、地下鉄駅への下り口を見つけて階段を降りてみると、地下鉄は止まっているとのことだった。改札の周辺で駅員が拡声器で、それが今日起きた防護服集団の首都圏占拠事件の影響であることを伝えている。代替手段も今は確保できていないとのことだった。

地上に戻ると、先程は聞こえなかったヘリコプターの轟音がする。

頭上に夥しい数のヘリが移動していくのが見えた。

すぐに今度はパトカーの赤色灯が何台も連なって過ぎていく。

首都圏は今までとは明らかに違う事態に陥っていることは確かだった。

それでもワカコは、今、この瞬間、幸せだった。

ずっと出会いたかった人が今日の前にいた。

この人に出会うために生まれたのだと信じられる人が、目の前にいた。

二人はやがてタクシーをつかまえる。

「やれやれ、一体何が起きてるんでしょうね」

タクシーの、50がらみの運転手は最初軽口のようにそう言ったが、

ワカコと青年が今日のデモに参加したことを知るやいなや饒舌に喋りだした。

「私は数日前の未明に正体不明の大型車が常磐道から首都に乗り入れてきているのを目撃してるんです。

なにしろ普通の車両ではありませんでした。

先日深夜に拾ったお客を乗せて三郷インターから常盤に入って北上したんですがね、

そのあと、延々とその正体不明の大型車両が、反対車線を首都に向かってたんです。

異常なものを感じましたね。きっと今日現れた防護服の連中が乗っていたんだと思います。

それを目撃したあと、会社の運転手仲間からも同じような話を聞きました。

北から見慣れない不思議な大型車両がたくさん東京に入ってきていると」

運転手の話は実に詳しくて臨場感にあふれ、つくり話には思えなかった。ワカコも青年も熱心にそれを聞く。

「戦車みたいな、そしていやにのっぺりした車体なんです。

なにか原発に関係している車に違いないとピンとききました。

そして実は、先ほどから気になって占拠されたというビルをまわってきたんですがね、やっぱりあののっぺりした例の大型車が、首都圏電力も経済発展省も取り囲んでました」

やがて到着した恵比寿駅で降ろしてもらって、
二人は自然とジャック・オ・ランタンに足が向かう。

JRも運転は見合わせているようで駅構内はざわめいていた。
都内の電車が悉くストップしてしまっているのだ。いずれの新幹線も全て止まっているとアナウンスがあった。

しかし、N95マスクをがっちりつけた3つのカボチャは今日も目の穴からあたたかな灯をもらしてそこに鎮座していた。

ワカコと青年は恵比寿駅構内の、きちんと営業を続けていた成城石井で食料を買ったのだが、カボチャから離れがたくて、

ジャック・オ・ランタンの傍らで新聞紙を敷いて、腰を下ろしてそこでピクニックよろしく夕餉をとりはじめる。

ワカコはワインのひんやりしたキャップシールをくるくると剥がしていき、非常持ち出し袋として道具を取り揃えているリュックから万能ナイフを出してコルクを抜く。チーズも切る。オレンジを向いて、ダークチェリーの缶詰をと、オリーブの瓶詰めめの蓋を開ける。

最初に二人に声をかけてきた若者のグループもまた都内のデモの帰りで、
そこに車座になって座り始めた。

ワカコと青年は酒を振る舞い、彼らと話をする。

いつのまにかジャック・オ・ランタンを中心としてたくさんの人が集まっている。

不安な気持ちを共有して、

そしてまた、脱原発という同じ目的を持った仲間が自然に集まっていた。

そこで署名活動をはじめた者もいて、

署名をしようと足をとめた人もまたその酒宴に参加していく。

酒が足りなくなればまた誰かが買いに走る。

すべて外国産の、汚染されていない食料でのうたげだった。

駅構内でこんなふうに酒宴を催していても、

電車が止まっているせいなのか駅員が注意してくることもなく、
輪がどんどん広まる。

どうやらツイッターでもこの宴会の様子が拡散されているらしい。

しかも、

ワカコは、

死神のアカウントがそれを広めていることに気がついた。

祝杯だ！

死神はツイートでそう謳いあげている。

一体何に対しての祝杯なのかよく判らないまま、

そこに集まる人は確実に増えていった。

919さようなら原発集会とデモが起きた日、

首都は謎の防護服集団に制圧されて、不安に思った若者が身を寄せ合っている。

そのうち一人の若者が大声を出した。

「首都圏電力の本社ビルが消失したというツイート」

消失？

消失というのは一体どういうことだろうか。

その場に居合わせた者たちは、各々スマートフォンや携帯を覗き込み、

情報を集めだす。

一体首都で本当に、なにが起きはじめているのだろう。



↑タイで撮影。フィルターも通してない素の色。加工もしていない。ラズベリー色の夕暮れの中、うつ病だったので美しさにも気が付かず無意味にシャッター一切ってきたらしい。病気がよくなってこのときの写真を見返して、こんな綺麗な場所と時間にいたのかとあとから気づいた。

恵比寿駅のジャック・オ・ランタンの周りで、脱原発の意志のある者たちが自然に寄り添い語らっている心地のよい時間にも、死神はツイートを吐き出し続ける。

そのことをワカコが時々気にしているのが僕には分かった。

僕のいつも眺めていた、この美しい女性が、原発事故以来、

死神のアカウントを使って、あのようなおどろおどろしいツイートを生み出していたとは。

僕はあの本格的なマスクで顔の半分を覆うようになった本物の彼女を見つめながら、他方ではそのツイートも、彼女のものとは知らずまた読んでいた。

さらには彼女が変装した男のことも見ていた。

彼女にはいったいくつの顔があるのだろう。

「首都圏電力の魂を狩ったるは吾であり、吾でない。多くの人間の望むが通りに吾が死の鎌を振り下ろすのみ。吾に裁可する力はなし。決めるはうつし世を生きる者の渴仰のみ」

死神が、消失したという噂の飛びかう首都圏電力についてそのようなツイートをしていた。ワカコが、

「私のとても好きな小説に死神という登場人物が出てくるの。もっとも死神というのは概念のようなものかもしれないけれど。

死神は、いろんな人達を試していくの。

憎いヤツがいれば、そいつをどうしたいんだ？殺したいのか？

どんな方法で死に追いやりたいのか？
どんな残虐な方法でも思うとおりに自由に選べる。
一番強く願った方法で私が代わりにそいつの魂を狩ってやろう。
実際に手をくださるのは私だ。
しかし決定するのは、君だよ、ってね」

僕はその小説を知っていた。
僕の母国である国の人間が、僕も使う母国語を使って書いた小説だった。

「でも、それはあくまで小説の世界の話よね。
実際にはそんな都合良く願ったとおりに憎いやつを、
誰かが代わって殺してくれたりするはずはないの。
もちろんそんなことができればどんなにせいせいするか判らない。
でも・・・そんなことが許されたら」

そこでワカコは言葉をつぐむ。

僕達はその先について話すことを諦めて、
恵比寿駅の宴の輪からもそろそろ離れることにした。

ワカコに、僕と一緒に、次の赴任地であるシンガポールに来てくださいと言うつもりだった。
少なくとも、ここで車座になって多くの者と集うまでは。
しかし彼女はトーキョーを離れる気があるのだろうか。
N95マスクで顔を覆って、彼女は戦い続けている。
僕はその言葉を発することができないまま、ワカコの隣を歩いている。

僕は、ワカコが今話してくれたその死神の出てくる小説を、
大学時代に読んだ。
僕は経済学部に通う、
今よりもさらに人付き合いの希薄な、そして内気な学生で、
永遠に続く呪いのように思えた時間の中で、ひたすら時間を浪費して暮らしていた。
あの無為の時間の中で、その小説を読んだ体験は、
他のとりとめない浅薄な思い出の中に埋もれてはいたが、
それでも覚えてはいる。

僕と同じ国の、同世代の男性が書いた小説が欧羅巴大陸のみならず、

北米でも連日ベストセラーになっていることは当時ちょっとしたニュースになっていたから、その作家の名前と小説のタイトルは僕の国の人間で知らない者はいないのかもしれない。薄いページの表紙の、かなり厚い本だった。

そして、僕は、ワカコがそのページの表紙の本を、かなり頻繁にくり返し読みかえしているのを確かに目撃していた。

実は有隣堂の洋書コーナーでワカコを初めてみたときも、その本の作者のほかの著作（僕の母国語でもある言語で書かれている原書だ）を幾度も手にとっていることから、僕の母国語を解するのかと気になったことがきっかけで、彼女のことをまじまじを見ることになった。

今夜の都心はやはりパトカーがいきなりどこかでサイレンの唸りをあげたりして物々しい。僕は、今、やっとワカコの隣を歩いている。今、彼女に言うべきことがたくさんあるはずだった。なのに、今はこの穏やかな幸せを壊したくなかった。ワカコのマスクと前髪の間、澄んだ瞳にうっとりみとれているままで、ひたすらずっとずっと、穏やかに過ごせたらどんなにいいだろう。ただ彼女とぴったり寄り添い合い、何もかも忘れて静かに目を閉じていたかった。



↑初めての海外旅行の写真です。今回更新した小説の舞台のNYではなくて、この旅行の行き先はロンドン。でもひそかに写ってる人の背中にNYCと書いてあるので選んでみました。笑。

早朝の羽田を経た飛行機は約半日の飛行時間を経て、NY時間のまた同じ日の早朝に到着する。12時間経過したはずなのに、時差がほとんどそれと同じくらいあるために、私が機内で過ごした12時間ぶんを人生の中で儲けたような気がする。

このまま日本に戻らなければ、ずっとずっと12時間得をしたままになるのだろうか、そんなことを最後の1時間ほどは考えていた。

日本に戻る・・・というのは、また放射能の中に身をおくことだ、とわたしは考える。放射能に「被曝する」恐れがなくなったら、もちろん、帰りたい。

しかし。

いつか、日本の首都圏の放射能汚染が、すっかりなくなることなど、ないのかもしれない。私もまた昨晚からツイッターというものに登録してみて、色々な情報を漁った結論は、そうだった。

核汚染はそんななまやさしいものではない。

放射性物質は半減期というものを迎えても半量にはなるが消えてなくなるわけではない。

事故当初よく聞いたヨウ素というのはたった8日ごとに半減期を迎えるが、プルトニウムという物質などは半減期を迎えるまでに何万年という歳月が必要で、つまり私が生きている間に半分に減ることすらない。

いや、子どもを生んだとしても、その孫の孫の孫が生まれても、まだ半減期には至っていない。放射性物質とは、そういうものらしかった。

ヨウ素のあと、よく取り沙汰されるようになったセシウムにしても半減期は30年で、半減してくれる頃にはわたしはもう70歳近い。

そしてこれまでは当たり前前に寿命を全うすれば生きられると思っていた70歳まで、無事に生きられるのだろうか。「被曝」しちゃった身体で・・・。

さらに半減するまでのんびりそばで待っていても、ひたすら被曝し続けるだけだ。

セシウムが発する γ 線は、分厚いコンクリートだって突き抜ける。障害がなければ100メートル先

まで飛んでいく。

放射能は待ってくれない。ずっとずっと放射線を飛ばし、届く範囲にいれば、常に被曝は続く。もっと怖いのが内部被曝で、食べ物や飲み物、そして空気から取り込んでしまった放射性物質が体内に蓄積し、身体の内側から至近距離でずっと被曝を続けることになる。

わたしは震災以降、仕事で食べ続けてきた食物たちによって、どのくらい内部被曝してしまったのか。

放射性物質が付着した埃を、空気と一緒に吸う危険性があるので、例えばワカコはあんなマスクで防御していたんだ。

わたしだけでなく、そんなものに常に遺伝子を傷つけられて、人類は一体どうになってしまうというのか。

わたしは、事故から半年経って、ようやくことの重大さに気づいた。

いや、どこかで気づいていた気がする。

でも、知ろうとしなかった。

だって知ってしまったら、もう東京でおとなしく働けない。

東京の人間は、まだ東京にこんなに沢山人がいて、普通に暮らしているとお互いを見て安心しあいながら、平然と暮らしている。でもみんなが普通に暮らしている根拠は、やはりみんながいるからと普通にしている、まったく自分と同じような存在を鏡で見ているに過ぎない。

誰も、本物の安全が存在すると確かめたわけではない。

そして、放射能の恐ろしさを知っていた人間は3月、ワカコみたいに東京を離れたたり、戻ってきてあんなふうにはマスクをしていたんだ。

もうすぐ着陸態勢に入るのでトイレにいったおこうと席をたつ。

トイレからちょうど、一人の少年が出てきた。

そして彼は、わたしだと気がつくと、

「お姉さんも、放射能から逃れてアメリカへ？」

と聞いてきた。

同じビジネスクラスに、

一人の少年を連れた母親らしき女性が乗っていることは気づいていた。

少年は小学校の低学年くらいだろうか。その年代の男の子なら飛行機に乗ったりしたら、大人しくしてられない頃ではないかと思うが、

その少年はずっとおとなしく本を読んだり、機内の映画を見たり、とても行儀がよかった。

母親と思われる女性は、上品な服装をした聡明そうな女性で、私とたいして年齢は変わらないように思えた。彼女の方もずっと背筋を伸ばして分厚い本を読んでいた。とても優秀そうな親子なので、見かけてからなんとなく気にはしていた。

そして、わたしももし20代半ばくらいで出産していればこの少年ほどの子どもがいてもおかしくないのだと、どこかでそのことも考えていた。

少年のとっさの質問に、

「ええ。そう」

と返事をするのがやっとだった。

「やっぱりね。もう日本にはいられないよね。僕達は震災後はずっと福岡県に避難していたんだけど、

もう日本にはいられないってお母さんが判断して、今日これからアメリカに引っ越すんだ」

少年はずいぶんお行儀がよかったと思ったが、発言を聞いているととても利発なタイプだと分かった。



今回は去年の夏にいったハワイの写真をポラロイド風に加工してみた。ハワイ旅行記も途中なんですが電子書籍内においてあります。いちおう[こちら](#)。

919デモに乗じて防護服姿の武装勢力が出現した騒ぎのあった次の日、佑介は様々な仕事や手続きに追われて、ほとんどツイッターもテレビや新聞のニュースをチェックする暇もなかった。紗英は、自分の会社のNYの事業所に雇用したことにして、労働ビザを発行する手続きを会社の人間にとらせていた。

そして自分自身、しばらく仕事の拠点をNYにおく。もちろん日本といたりきたりにはなるだろう。

それでもなるべく紗英の側で暮らしたかった。

公私混同と言われそうだが、自分にとって会社は「公」というよりほとんど「私」だ。

自分で作ってここまで大きくした会社なのだから、社員に迷惑をかけない範囲で何をしようと自由だ、と佑介は思った。

20代に興じたこの会社を大きくするために払ったたくさんの犠牲について佑介は思い巡らす。あまり気分のよい追憶とはならない。

いつか老人になって引退したとしても気持ちよく振り返ることのできる思い出は少ないと思っている。そのくら危ないことや汚いこともやってきた。

スマートフォンが振動したので見ると、紗英からメールが入っていた。

無事にNYに到着したことを知らせるものだった。

それまでオフィスの自分の個室に食事も運ばせて、籠って仕事に没頭していたのが、

一気に現実に引き戻された。

それで佑介はいったん仕事を中断し、その日はもう人と会う約束も会議もないことを確かめて、外に出ることにした。

今日の東京は、昨日と比べてうって変わって静けさに満ちていた。

もうヘリコプターの轟音やパトカーのサイレンは遠くからでも聞こえない。

港区のこの界隈がこの時間帯にこんなに静かなことは珍しいのではないか。

本当はすぐにでもツイッターにアクセスして、何が起きているのかを知るべきなのだろうが、仕事で疲れた頭が痺れるようにそれを拒んでいる。もう少しだけこのまま疲れを癒すようにになにもかも忘れていたいと佑介は思い、あてもなく都心の街並みの中をうろうろ歩きまわる。

いや、人はそこそこの数、見かける。なのになんだか、不思議なくらい静かなのだ。

空気の透明感という秋の気配がそこかしこに、物寂しい印象を与えているだけだろうか。

東京は震災後、節電ムードによって確かに暗くはなった。

それにしても、なんだか今日の東京は、変だぞ、と思うものの、それがなんであるのか佑介は確かめる気力がわかない。

そのうち歩くことにも疲れを感じて、佑介は個人的によく利用している、外資系ホテルの上階にある会員制のバーで休むことにする。

会員専用フロア直行のエレベーターで最上階に降り立つと、やはりホテルの中も、なんとなく活気に欠ける気配がした。

もちろんいつも賑やかというほどの場所ではなく、

寛げる穏やかな雰囲気が入って会員になっていたのだが、

それにしてもどこことなく変だという違和感をここでも感じて佑介は釈然としない気分になる。

それでも、ゆったりした一人がけのソファー席を選び、

好きな銘柄のモルトウィスキーをストレートで頼み、それを味わっていると、

ずいぶん気持ちが穏やかになってきた。

ウィスキーはワイングラスのような丸いふくらみのある、脚のついたグラスに注がれていて、独特のピートの香りを発しながら、間接照明の穏やかな光ととけあうような琥珀色でゆれていた。

ここもまた東京の夜景を一望できる。

思えば佑介はオフィスも自宅マンションも地上20階以上の高さにあり、利用する店までこんな高い場所ばかりだ。

高いところが好きなわけでもなく、気がついたらそんな生活をしている。

都内にある、今でも両親の住む自分の実家はこじんまりとした2階建てで、そこで生活していた大学時代までは、普通に地上の高さに暮らしていたはずなのに、もうその頃の感覚がうまく蘇らない。それほど歳をとったつもりはなかったが、あの10代の日々はとても遠いものに感じられる。

仕事でよく通うマンハッタンの摩天楼にしたって、より高く、高く上を目指している。

天を突き破る勢いのスカスクレイパー。

紗英の北陸にある故郷の街には、ほとんど高い建築物がなかったことを佑介は思いだす。

駅前のビジネスホテルがようやく10階の高さがあったかなかったかという程度で、たぶんあの街
あのホテルが一番高い建物であるはずだ。

紗英は本当はどんな場所で暮らすことを望んでいるんだろう。

そして自分は？

自分と紗英がこの先一緒に生活していくとしたら、

どんな場所で暮らしたい？

どんな生活がしたい？

何が最優先なのかな？

佑介はソファに沈み込むように身を預けている。

分かっていたはずだった。

一番大切なものなんて、自分でいつだって気がつけるはずだと思っていた。

誰でもそう思っているに違いない。

それなのにたいていの人は、一番大切なことを忘れたまま生きているんじゃないか。

愛している人の命や健康以外に大切なものなんて、あるのだろうか。

佑介は、自分が泣いていることに気づいた。

そのことに気づけただけでも、生きてきた甲斐があったのではないか。

原発事故は悲しい出来事だが、

これがなければ、一番大切なものがなにか気付けないところだったんじゃないか。

そしてまだ気づいていない人が、この東京には、大勢大勢いるんだ。



ロンドンでの一枚。

ワカコは、青年と一緒に恵比寿駅を出て、青年の棲家であるマンションにやってきた。

部屋の中がずいぶんガランとしていてる。

荷物はほとんど箱に詰められ、もうすぐ引越しをするために準備をしていたことがありありと分かった。

「引っ越すの？というか日本から脱出・・・」

ワカコは自分の声色が青ざめているのが自分でもわかる。

「僕の勤め先の会社が、シンガポールに移転するんだよ」

青年は少し申し訳なさそうな表情をした。

「そうよね、放射能まみれの東京で営業を続けるなんて考えてもクレイジーよね」

ワカコは、少し前まで、アカウントが乗っ取られたことや、そのアカウントの死神が、首都圏電力を「消失」させたのは、人々の願いであったこと不気味なツイートをしていたことにすっかり気をとられていた。

しかし、今日知り合った、運命の相手だと思い込めるほど一緒にいるのが自然に思えるこの青年と一緒にいられる時間が限られているかもしれないことに気づいて呆然とする。

「僕と一緒にシンガポールにいつて暮らしませんか」

青年はワカコの目をまっすぐ見つめていた。

信じていいのだろうかと思問して、でもワカコはもうほとんど信じていることにも気づく。

青年は本気で言っている。それは絶対にわかる。彼は冗談で言ったり、その場限りの嘘をついていない。

「シンガポールは、熱帯の国なのかな」

そうつぶやきながらワカコは広いリビングにまだそのままになっていた大きなソファーに座る。

青年もワカコによりそうようについてきて隣に座る。

ワカコの手を握っている。

「そういえばきっと熱帯だね。日本と、日本に住む愛しい人のことばかり考えていたので、勤め先が移転するシンガポールのことはなにも考えてなかった」

「愛しい人？」

ワカコは青年に尋ねる。

「僕はもう何年も昔からあなたを知っています。

あなたの棲んでいる場所もアパートメントも知っている。

週に2回は昼休みにアトレの有隣堂の洋書コーナーを訪れる。

最近は仕事帰りに駅の成城石井で買物をして帰る。

よく買うチーズやお酒の銘柄も知っている」

そんなことは当然だという気がした。

ワカコはこの青年がずっと昔から自分のことを知っていてくれていたことをちっとも不思議に思わないし、

彼が自分の身边を調べていたとしても、深い深い愛情しか感じられない。

いつもつけられていたのだとしても、むしろそれをとても嬉しく感じた。

二人は抱きあう。

ワカコは幸せだった。

ワカコは幼い頃、水上生活に憧れていた。

長じてナローボートの存在を知って、

そう、これよ、こういうものに棲んで、

どこかに定住するのではなくて、

気ままにいろんな場所で生きていけるといいなあと思っていた。

所有物はナローボートに積める程度にする。

それすらも、万が一ボートが嵐やなにかのせいで

沈む場合には命だけ持って逃げ出しても惜しくはない。

身軽に、なにも所有しないで生きていたい。

そして思いたったときに気軽に移り住む。

18歳のとき、例の死神の出てくる著作に出会い、

それを書いた作家の国に通い始めてから、

国境やパスポートやビザというものが存在することにずいぶん悲しい思いをした。

あまりにも入国が頻繁だと、入国審査で怪しまれたこともある。

その国の言語を勉強していたので、

研究のためにその言葉で書かれた文献を探しにきている、などを答えてはいたが、

いつかなにかの手違いで入国拒否を受けて強制送還などということになれば、

わたしはもう二度とあの国に入国もできなくなりはいしないか。

ひどい話だ。

単に好きな人が住む国だから通っているだけなのに、
不法滞在とか、妙な犯罪の嫌疑をかけられることがありうるなんて。
そもそも、結婚相手を見つけてころがりこもうと考えてる人間を入国させることを歓迎しないという風潮が先進国にはあるらしいが、
一体どういうわけなんだろうとワカコは憤った。
個人の住む権利や結婚相手をさがす権利について、
国家が制約を設けたりしてよいのだろうか。
結婚が目的かどうかはともかく、好きな人がいてどこかの国に通ったとしてそれは悪いことなんだろう。それに結婚が目的だとしてもそれが悪いことだと思えなかった。その結婚がどこから打算でどこからピュアなものだと誰が裁きをくだせるというんだろう。
ワカコは当時、その作家と知り合ってなんとか個人的に懇意にしたいという野望があった。それは果たして犯罪じみたことなのか。
誰構わずナンパしにいくわけじゃない。
その人の本を読んで好感を持っていて、偶然に任せておいても出会える可能性はとても低いから、
可能性をあげるために努力してるんだ。
そのどこかいったい犯罪なのか。ナンパをしたって本来悪いことでもない。本気で、誰か教えてよ！と思っていた。



イタリアで撮った写真。

原発事故のあと、時々みる夢だ。

最後の瞬間。

それは恐怖の映像のはずなのに、

しかし恐怖の桁が何段階も一挙に大きくなりすぎているからなのか、

それが放射能そのものの性質であるだけで、人間の悪意や愚かさとは切り離された存在であるからなのか、

ひたすら美しかった。

その青い光は。

夢の中で僕は、

原子力発電所がついに最後の爆発を起こしたことを知っている。

使用済み核燃料もなにもかもいっしょくたに崩れ落ちたみたいだ。

息を呑むほどの青い光が溢れ出す。

こんな比喩しか思い浮かばないのがお粗末だが、イタリアの例の、青の洞窟の中の水の色みたいな、

純粹すぎていっそ毒なのではないかと怖いぐらいの青だ。

そして毒だと知っていても思わず引きこまれて飛び込んでしまいたくなる魅惑的な青だ。

青い光は音もなく、なめらかに空気を切り裂いていく。

光はどこまでもどこまでも伸びてゆく。

そして、それが美しくて美しくて、僕は涙を流している。

本当は恐ろしいことだから、美しくて感動することに罪悪感を抱きながらとれを止められない。

しかし、次の瞬間、僕は凍りつく。
その夢に初めてワカコが現れたからだ。
ワカコは光を発する中心点へ向かってゆく。
僕には止められない。
呼んでも叫んでもワカコは振り向いてくれない。
そしてそれを追って彼女を助けるべきなのに、
僕は身動きがとれなくなっている。
ワカコ、行っちゃダメだ。
ワカコ。

目を覚ますと、
僕のこの恵比寿のマンションの部屋のどこにもワカコはいなかった。
書き置きもなければ、メールや着信も残っていない。
昨日手をつないで歩いたのは夢だったのだろうか。
919デモの間じゅう、僕は白昼夢を見ていて、ワカコを見つけて喋りかけて仲良くなったという、
夢が自分の脳内だけに映し出されていた？

昨日、一緒に次の赴任先にいこうと言ったとき、彼女は確かに嬉そうに一緒に行くと
そう返事をしたのではなかったのか。
僕は荷造りのほとんど済んだ部屋を見渡す。
この荷物と一緒に新天地で彼女と一緒に新しい生活が始まると思っていた。
シンガポールは熱帯だから、
年中僕達はバカンスみたいな生活を送るんだって、甘い想像をした。

30分待って、彼女が戻ってこないと悟り、
僕はしかし彼女を探さずにはおれなくて部屋を飛び出す。
リュックにペットボトルの水や食料を入れてデモに備えたときの荷物をまた担いで、
歩きやすいスニーカーを履いた。
外は晴れていたが、なんとなく不吉な具合に空気が歪んでいる気がする。
すべてのものが凶々しい合図をこちらに送ってくるような気がする。
まずは駅に向かった。
恵比寿駅の前に、黒い塊がいくつもできてうごめいているので僕はぎょっとする。
それはカラスの群れだった。
ゴミが散乱しているのでもなく、
なぜかそこに大量のカラスが集まってきていた。
月曜日の朝なので、もう通勤中の人間が多く見られたが、

皆険しい顔でカラスを避けながら歩いていた。

空気をつんざくようなその黒い鳥たちの鳴き声が僕をますます不安にさせる。

そこで気づいて念のためガイガーで線量を測ったが、特に昨日と同様変化は見られない。

そして、駅構内に入って、ジャック・オ・ランタンを見て僕は愕然とする。

マスクは全て剥がされていて、カボチャの一つには、大きなアーミーナイフが突き刺さっていた

。



飛行
機

がJFKに着陸して、入国審査を通り過ぎたあと、

「待ってよお姉さん」という声が背後でして振り返ると、

それは機内で声をかけてきた、やはり放射能から逃れるために母親と一緒にアメリカに行くという小学生男子だった。

少年の後ろから母らしき女性も、わたしのほうに頭をさげながらこっちにやってくる。

その女性が機内でなんだか難しそうな分厚い本をずっと読んでいるのを見ていたわたしは、聡明そうな人につきもののとっつきにくさを感じていたが、

今こちらにむけられた表情は人懐っこさと人柄のあたたかさがにじみ出ていた。

それでほっと身体力を抜けて、わたしのほうからも二人に近づいた。

少年のほうはついに駆け寄ってきてくれる。

「すみません、息子がどうしてもお姉さんに話しかけたいと申しまして」

母親も追いついて、少年を真ん中にしてわたしたちは3人並んで歩く形になった。

早朝のJFKのターミナルには他に到着便も多くはないらしくて、わたしたちが降機した便の乗客以外に人はまばらだった。

「ねえ、同じように日本から避難してきた者どうし、もし困ったことがあったら協力しあおうよ

。

というか、僕のママ、そんなに外国に慣れてるわけじゃないから、助けてほしいんです。

良かったら連絡先とか教えてほしいんだ」

少年がそう言い、お母さんのほうも恐縮した表情で、「良かったら・・・」とわたしのほうを見た。

わたしにとっても、外国で誰か仲間がいたほうが心強いので、こちらこそ喜んでと、すぐに電話番号もEメールアドレスも記載しているプライベートな名刺を渡し、しばらく滞在する予定のホテルの名前を告げた。

「ああ、このホテルだったら私たちの滞在するホテルから近いと思います。いつかお食事でもご一緒にゆっくりお話できると嬉しいです。

近いうちに連絡させていただいてよろしいですか」

とお母さんが言い、少年の方も、ニコニコと「そうだよ、一緒にご飯食べにいこうよ。僕、本場のハンバーガーが食べたい。日本じゃもうずっと外食なんてしてないでしょ」と明るい声をだした。

「ホテルが近いんでしたら、良かったら今からタクシー一緒にませんか」

わたしのほうもすっかり打ち解けた気分になりそう提案した。

と、そのとき、飛行機を降りてすぐ電源を入れて海外でもインターネットを使えるように設定したばかりのスマートフォンが振動しはじめた。

わたしは二人に断って電話に出る。

電話をかけてきたのは、佑介がこちらでわたしのことを頼んだというマーティンという男性からだった。

車を借りて空港まで迎えにきてくれているという。

それは聞いていなかったことだが、わたしが飛行機に乗ってしまってから彼の方から気をきかせて佑介にも空港まで迎えにいくことを申し出てくれているそう。チェックすると、佑介からもその旨を伝えるメールが届いていた。

こんな早朝にどうもありがとうとわたしが恐縮して言うと、どういたしましてと軽やかな返事が返ってきた。

そして、機内で知り合いになった日本人の親子と一緒にだというと、それじゃあみんな一緒に乗っていくようにと、気さくな口調で車種と色を伝えられた。

ターミナルを出ると、タクシー乗り場の横に空色の巨大なアメリカ車が停まっていて、近づいていくと、

すぐに運転席からマーティンと思われる男性が出てきた。

まだ早朝の5時、まだ辺りはほとんど夜といっているほど薄暗かったが、マーティンはすらりと長身の、そして感じのいい笑顔の青年だということが見て取れた。少年が、

「お姉さんの彼氏なの」

と聞いてきて、お母さんが「これ」というふうにな少年を諫める。

説明しておいたほうが良いと思って、自分の恋人の友人なのだとお母さんのほうに伝えと、「お姉さんのその恋人もアメリカ人？」

と少年が興味津々な声で聞いてきた。

日本語で我々が会話しているとマーティンがまったく意味が分からないととっさに思ったせいか、

「いいえ、日本人なの、彼は」

と、思わず英語で返事をしてしまう。

少年が「お姉さん英語が上手だね」と子どもらしい無邪気さで褒めてくれて、わたしはたいして英語に自信がなかったので、恥ずかしくなって言葉につまってしまう。

マーティンの運転する車はまだ暗い道路を疾走し、

行く手には、明かりがほとんど灯っていない巨大なビル群のシルエットが連なって、それはひとつの大きな城砦の塊のように見えた。

「うわあニューヨークだねえ。東京の高層ビル群と、やっぱりどこか違うよね。僕、英語を喋れるようになるかなあ。こっちの学校に通うんだよ」

少年が、子どもらしい興奮した声で話してくれるおかげで、わたしたち大人もなごやかに自己紹介めいた会話を進めた。自己紹介によれば、少年の方は結城真道くんといい、お母さんは翠さんと言うらしい。

まだホテルのチェックインの時間ではなかったので、マーティンの提案で朝食を食べに行くことになる。

NYの朝が明けていくのを眺められる素敵な店でゆっくりしましょうと、マーティンはハンドルを軽快に切っていく。

放射能から逃れて、悲壮な気分で日本を発ったはずだが、思いがけず連れもできて、まるで観光旅行にきたような楽しい気分になっていることに気がついた。

こんなリラックスした気分は久しぶりだった。

マンハッタン島にこれから渡るのかと思っていた橋の手前で、車は水辺に沿って折曲がり、ウォーターサイドにぽっとあたたかそうな灯りのともった一軒の店の前で停車した。



佑介はウイスキーでくつろいだ気分になって、ようやく丸一日離れていたツイッターにアクセスする気になる。恵比寿駅で919デモのチラシをもらってから本格的に始めたツイッターだったが、原発事故の情報、放射能の情報をいち早く知るにはツイッターしかないということがよく分かった。というより、これまで権威があるとされてきた巨大なマスコミが、箝口令を敷かれたかのように、ほとんどまともな情報を流していない。情報統制というものは、どこぞの独裁国家のやることかと思っていたが、まさに自分の棲んでいた日本が、原子力産業の利権の頂点に立つものに支配された独裁国家だと思い知った。

電力会社は、独占企業にも関わらず、巨額の広告費を普段からマスコミにばらまいて、事故の前から情報をコントロールしてきたことに全く気が付かず自分たちが生きていたことを311後、佑介はようやく知った。ツイッターの界限ではしかしこのようなことは事故が起きて間もなくから常識のように語られており、そして東京を含む首都圏の放射能汚染が深刻なものだという前提で人々は行動していた。

自分のように下手に学歴が高かったり、これまで社会的に地位が高い人間ほど真実に気が付かず、それどころか、自分たちが国に裏切られるはずはないと、躍起になって国や電力会社を擁護するようなヒステリックな態度をとっているということも知った。意地になって首都圏の汚染を認めないほどではなかったが、佑介はどこかでそんなことがあるわけないと、そういう情報をどこかで遮断して9月まで過ごしてきたことにひやっと背筋が冷たくなるのを感じた。そのせいで、紗英があんなふうになんて鼻血を出して不安に生きていたことに気づいてやれなかった。そして、首都圏の、特にビジネスマンを中心に人々は重く口を閉ざし、無関心を装っていることもツイッターでの情報を読んで初めて自覚させられた。それまでの自分を思い出せば、まさに無関心層というやつだったのだと佑介は胸が痛くなるような後悔を覚える。

原発事故は尋常ではない出来事だったが、それでも日本経済をたちゆかなくしてはいけない、自分の会社だってこのピンチを逆手にとってでも成長していかなばならないと信じていた。原発の間近である地域の子どもがマスクをして学校に通うニュース映像などを見て、かわいそうに思うことはあっても、放射能汚染はその地域だけの特殊な問題で、首都に住む自分たちはこれまで通りに生活することが復興につながると言い聞かせてきたような気がする。なぜ東京の放射能汚染をまるで気にせず無邪気にやってこれたのか、真実を知った今は到底理解できないが、確かに自分はそうだった。

ツイッターを眺めていると、昨日「首都陥落」という文字が飛び交っていたが、その、首都圏電力や経済発展省、国会議事堂などが防護服集団に占拠されてしまったということの続報が様々な憶測も含めてツイートされていた。

まずは、首都圏電力が消失してしまったという事実が佑介の目をひいた。消失とはいったいどういうことなのか理解できずにそれに関するツイートになるべく読むことに集中する。

しかし、誰もその真実について理解したり、説明できたりする者はおらず、とにかく、首都圏電力の社屋そのものが、きれいに消失したということだけが事実のようだった。

あったはずの場所から、根こそぎ建物がむしりとられて、そこがハゲ坊主の空き地になっているということではないらしい。

社屋があった場所が、折り紙をおりたたんでそこだけ埋没し、両隣はそのぶんくつつき合うというように、

存在そのものが最初からなかったかのような消え方だという。

そんなSFじみたことが起きて良いのかと信じられなかったが、

そういえば原発事故が起きてから、まるでSFみたいな世界に放りこまれたようなものだったと佑介は思い直す。

極めつけは昨日の防護服集団だ。

もうなにが起きても不思議ではないのかもしれないと佑介は埋もれるように座っていたソファで、姿勢を正すようにして起き上がった。

そういえば原発事故後、世界各地でUFOの目撃が多発しているというツイートを何度も読んでいた。添付された動画を見ると、いくつかはイタズラに思えたが、いくつかは宇宙人が本当に飛来してきているとしか思えないものだった。

佑介は、本当にもう、なにが起きても不思議ではない気分だった。

そして、「死神」という存在が、

その防護服集団の出現、さらに首都圏電力の消失に関わっているらしいところまで分かった、佑介は酔いが醒めて、頭がすっきりしていることに気づく。

しかしそれは不快な感覚ではなくて、こんな非現実的な状況になって初めて、自分が世界とまともに向き合い始めている手応えを感じた。

不謹慎だとは思わない。

自分には守るべきものがある。

気づくのが遅すぎたかもしれない。

それでもなんとかするしかない。この世界を生き抜いていくしかない。

佑介は、グラスが空いたことを察してやってきたウェイターにチェックを頼み、バーを出ることにした。



夜と朝の汽水域をひたひたと満たすしずかな水面からたちこめるような靄に紛れてワカコは歩いている。

ツイッターのタイムラインは、同じタイムゾーンに生きているはずの日本人なはずなのに、この深夜から早朝にかけてこそ活発に発言をする、まるで時差のあるような生活をしている者たちで、むしろにぎやかな時間帯だ。

昨日デモで知り合った金髪の青年の部屋を出て、ワカコはひたすら歩いていた。

919デモの最中から起きはじめたことについての様々な情報が、今この瞬間にも全てを追えないくらい大量に発信されて、それがまたリツイートされ増殖していく。

あぶくのように生まれては消えてゆく情報たちもまた、この汽水域へ支流として流れ込み、時間も思念もなにもかもがいっしょくたに、またどこかへ流れていく。

いまや、この水域にさえ、放射性物質が流入してきているような気がする。

ワカコは、今日もしっかりとN95マスクをしている。特に風の強い日のためにゴーグルも持ち歩いている。

帰宅したら念入りに耳の中や目を洗浄するような生活は、一体この先いつまで続くのか。

洗浄していてうっかり耳の奥にたまってしまった水をぬくために、再び呼び水として新しい水をいれる。そして水道の蛇口から出る新しいその水もまた汚染されているのかもしれないし、耳の奥とまじりあいゆすいだあとの水も、幾許かの放射性物質をまた引き連れて、下水へ流される。それらの水もまた、この水域へ繋がっているはずだ、とワカコは考える。

そして、あらゆる地球の水は必ず繋がっている。

蒸発して雨になって、惑星を循環する水。

そして気流。

放射性物質が静かに地球全体に拡散していく。

目には見えないけれど、確実に。

そしてあらゆる場所で放射線を出して、届く範囲のものたちを被曝させてゆく。

地球はこうして、少しずつ死にむかって、沈み始めている。

次第にワカコは、どこへ向かって歩いているのかよく分からなくなってくる。

ツイッターアカウントはやはりのっとられたままで、「死神」のアカウントにはもうログインできなくなっていた。

なぜ自分のアカウントが乗っ取られて、しかも首都を占拠した連中の声明を届けるもののように使われているのか。

もともとフォロワーは数千人あったが、あの防護服集団の声明を出すアカウントとして瞬く間に拡散されて、

今はもう10万人近くフォロワーがついていた。

しかし、しばらく新しいツイートは出されていない。

民衆の総意として、死神は、民衆が願った命を奪いにいくのだと主張していた。

ワカコは思う。

そんな都合のよいことは起こりうるだろうか。

ワカコは、原発推進派を憎んでいた。

ズタズタにしてやりたいと常に思っていた。蜂の巣みたいになるまで撃ちぬいてやりたいと強く思っていた。

しかし、それを本当にできるとは思っていなかった。

どれだけ憎い相手でも、殺しをやってしまったら、日本では犯罪者として逮捕されてしまうのだ。

合法的に相手を追い詰めていく以外にないと思っていた。

しかし、あの防護服の集団みたいな人たちが現れてくれて、あの薄汚い連中に天誅を下してくれるなら、本当に胸がスカっとするだろうと思っていた。

こんなに都合良くそんな連中があらわれてくれるなんて。

しかし、それが自分のツイッターアカウントを使うような存在でなければ、の話だ。

仕方ないので、予備アカウントを使ってツイッターにアクセスしていたワカコだったが、ふいに誰とも交流のないはずのその予備アカウントにメンションが届いたことに気づく。

それは死神から届いたメンションだった。

死神のアカウントを乗っ取るくらいなら、

ワカコの予備のアカウントを見つけ出すことくらいたやすいのかもしれない。

しかし、ワカコはそれを待っていたような気もする。

誰なの？あなたは。

いいえ、わたしのことを待っていたのよね？

わたしもあなたを待っていた気がする。

なぜあなたが生まれたのか、わたしだけが知っているから。

探しても、探しても、世界中探してもあなたは見つからないと思っていたわ。

でも、ついに、わたしに声をかけてくれたわね。

ありがとう。

ワカコは靄の中を、さらに足を早めて前進していった。

その人を目指して。



アーミーナイフの突き刺さったジャック・オ・ランタンを見て血の気がひく思いをして、僕はとにかくワカコを探す気になる。

その瞬間、足元をなにか黒い塊がすぐ近くを疾走していくのでぎょっとする。カラスだった。駅前に群がっていたカラスたちが駅のコンコースまでに入ってきて、低く、床をかすめるように飛んでいた。

もう一度長いエスカレータを使って恵比寿駅構内を出ると、先ほどよりさらに多くのカラスが群がっていて、

上空にも数多く飛び交っている。

空が黒く塗りつぶされそうなくらい大量のこんなカラスを見るのは初めてだった。

なにか尋常ではない焦りを感じる。それが、カラスの群れを見たことが心理的に影響を及ぼしているのか、本当に世界に異常が起きているのか、僕には判断がつかない。

しばらく街のなかを走っていき、ようやくカラスの群れが頭上から消えた。

カラスを無意識に避けるように走っているうちに、僕は静かな住宅街の中にさしかかっていたふと、前方に公園の入り口を見つけ、僕はそこにベンチでもあれば座らせてほしいと思って入っていった。

小さな新しい児童公園で、植わっている樹木はどれもまだ若くひょろひょろしたようなものばかりだし、遊具もどれも真新しい。

そして、まだ朝の早い時間なのに、小さな子どもがそこで数人遊んでいるのが目に入った。
全員砂の上にぺたっとおしりをつけている。

「だめだ、そんな場所に直接座ったら。土には放射性物質が降り積もったままだよ」

僕はすぐさま近づいて行って子どもたちに言う。

なのに、誰も聞こえなかったように、僕の方を見ようとしめない。

一人の5歳くらいの女の子は、すぐ近くに生えていた草をむしって、
それを口に含んだ。

「この草はここに蜜がたまってるのよ」

その子がそう言うと、

周りの子達も次々に同じ草をむしりとり、

それをくわえてちゅうちゅうと吸いだす。

「甘いね」

「うん甘い」

僕には蜜を出すような草が本当にあるのかどうか知らない。

しかしその子たちは、ひとつを吸い終わると、また次の草を探して口に運ぶ。

「ねえ、聞こえないかい、草を口にいれるのはやめたがほうがいいよ、ねえお願いだ、君たち」

僕はさらに大声を出して子どもたちに言うが、誰も僕の声に気が付かないみたいだ。

「甘い」

「うん」

「おいしいね」

「うん」

「もっともっと食べよう」

「あまい蜜だ」

子どもたちは僕の言葉が聞こえないみたいだった。

こんな至近距離で大人が叫んでいたら、もし僕の日本語が通じないとしても、こちらを驚いて見るのではないかと思うが、

全員耳が聞こえないように、僕の方には関心を払わない。

本当に自分が透明人間か何かになってしまった気がして、自分の腕や掌が透けていやしないか確かめる。

確かに自分の腕も掌もちゃんと見えるのに。

もしくはこの子達は、全盲で耳も不自由なのか。

いや、生えている草を見分けてちゃんとそれを選んで摘んでいるし、友達の言葉は聞こえているのだ。

一体なにがどうしたというのか。

そのうち、やはり5歳くらいの、やんちゃそうな男の子が、

えいっと砂をつかんで、近くの子に投げつける。

それはその子の顔面にまともにかかってしまう。

「なにすんの！」

砂をかけられた女の子は、やはり砂をつかんで、

それを投げ返す。

草を吸うことに飽きたそれぞれは、

今度は砂をつかんでみなにぶつける遊びに夢中になっていく。

あたりは、もうもうと砂埃が舞う。

細かい砂の粒子が、空気と一緒にこの子どもたちの目や鼻や口に入っていく。

「君たち、お母さんやお父さんはどこなんだ？」

僕はもう気が狂いそうだった。

大人の僕達でさえ、マスクをしたり、食べるものに気を使って首都圏をサバイバルしている。

しかしこの子たちは、一体普段からどんな生活をしているというのか。

あらん限りの声をふりしぼっても、子どもたちには僕の声がまったく届いていないようで、誰も僕の方をちらりとでも見ることはなかった。

「誰か、この子たちの親はいませんか？誰か」

僕はついに叫びだした。

こんなことを子どもたちにさせていいはずがない。

「誰か！！」

誰でもいい、他に言葉を伝えられる大人を探そうと、公園の外に出るが、早朝の住宅街にほかに人気はない。

どうしてこんなに静かなんだ。誰もいないんだ？

腕時計に目をやるが、もうそろそろ通勤のために人が歩き始めていてもおかしくない時刻だ。

僕は途方にくれて、ひたすら住宅街を動きまわった。



寒い上にひどく気の滅入るような雨が続いていた。

この街では基本的に古い建築の骨組みはそのままに、中だけを新しく貼り替えていることが大半で、部屋を出てエレベーターに乗ると、近代的な設備の整う部屋に比べると信じがたいくらいほどそれは旧式で、ギシギシいう稼動音の唸りは、足元に続く地上6階の高さまで、地表ではなくてもっともっと地底の奥深くから這い出て、その細長い空間を、呪いのように震わせながら届いてくるような気がした。

いつかその古いエレベーターのロープが切れて墜落してしまうとか、扉が開かなくなるとか、そういう憂目にあいそうだと毎回心配しながらもそれを利用しないわけにはいかない。

1階にあるメールルームの郵便受けを覗いて、何か届いているのでは、

それもエアメールが、

と未だに期待してしまうのだが、

今日も空っぽであるその古い箱には

日本にいた頃みたいに、

通信販売のカatalogなどが詰め込まれているということももちろんなくて、

私は郵便受けだけを覗くためにあの呪いのような音をたてるエレベーターを使ってわざわざ降りてきたんだということに改めて気づいてしまう。

NYのアパートすべてがそうなのか判らないが、

管理人もドアマンも常駐しないものの、この建物にはメールルームが存在して、郵便配達屋はその部屋の鍵をあらかじめ持っていて

それでこの部屋に入り、さらにメールボックスの外側から郵便物を投函してくれる。

業者が自由に郵便受けのある場所に入出入りしてダイレクトメールやちらしを投げ込むことはできないため、

こちらの社会に根っこをもつわけではないわたしには、ダイレクトメールすら届かない。

日本にいるときは鬱陶しいと思いつたそれらすら自分には一枚も届かないと、
本当に自分が世界でたったひとりきりになってしまった気もする。
晴れてさえいれば、郵便受けが今日のように空っぽでも、
そのまま玄関から外に飛び出して散歩でも始めて、
そもそも散歩するために部屋を出てきたのだという気分になることも
可能だったのにと恨めしく思っている自分に気がつく。
郵便受けのがらんどろがあまりにも堪えたんだろうか、
私は自分でも意外に思ったが、
気がつくや冷たい雨の降る表へ出ていた。
太い毛糸で編んだパーカーを羽織っていたのでそのフードを頭に被せて、
足早に歩いた。
雪にならないで雨だというのに身体の芯から凍えそうな寒さだ。

近所の雑貨屋に飛び込んでみる。

食料品から日用雑貨まで揃う、よろず屋のようなその店は、韓国系の一族が経営していて、
ここに住むようになってから、
一番頻繁に利用していると思う。

「Hi, Sae」

ほとんど一日じゅうこの店の番をしているサトが一応わたしを名前と呼んでくれているので、
この界隈の地元に溶け込んでいる気分を味わうこともできるが、
そもそもこのサトにすらなかなかわたしは心をひらくことができないでいる。
この街の人は、皆フレンドリーに接してくれはするが、
やっぱり友人を作れるかどうかといえは、
わたしの資質にも関係するのだと思うが、そう簡単な話ではなかった。

また帰ることがあるのかどうなのかよく分からない気持で
あの日、NY行きの飛行機に乗ったことは確かだが、
まさか帰ることが不可能になるとは思っていなかった。
帰る場所がなくなってしまうなど。

海外にいた日本人にはとりあえず暫定的な滞在許可が降り、
そのままずるずるわたしはNYにすることになった。
そのうちほとんど全ての国で、帰る場所を失ったニホンジン、暫定的に職を得る許可まで出る
に至り、
私はこの街で、運良く日本人向けの情報誌を作る会社に就職できた。
一体なにが起きてしまったのか、
いまだにうまく飲み込めない。

こ最近では1人暮らしだし、特段凝った料理もしていないのだが、
この店にいくと、アジア系の食材がおいてあるのでついつい色々買ってしまう。
旅行気分のうちは、
いかにもアメリカ的な食べ物を食べておもしろがっていた。
巨大なハンバーガーやステーキ、お寿司にしてもカルフォルニアロールのようなものを。
当然のことだが、
これが一時的な滞在ではなくなった瞬間、それらの食べ物の魅力は色褪せた。
わたしはどうやって慣れ親しんだ食べ物を切らさずに自分に調達すればいいのかという心配を、
それこそ真剣にした。
この先住む場所はどうするのか？仕事は？保険は？という心配、そして日本の知り合いや家族の
安否を気遣うことと、同じくらいの熱心さで。
例えば納豆。例えば醤油。例えば味噌。
そういうものがもしかして一生自分の目の前から消えるかと思ったときのちょっとしたパニック。
。大豆があれば、そうね、とりあえずその3つは自作できるのかしら。
なぜ、あの深刻なニュースを聞きながら、そんなことも同時に心配できたのだろう。
帰る国がなくなったことを聞きながら、納豆や醤油や味噌の心配をしていたなんて、
結局誰にも打ち明けることができないままだ。
いつか自分がもっと病んでしまったら、
例えばセラピストに向かって涙ながらにこう言うのだろうか。
「信じられます？わたしは愛する人達の安否も分からない状況の中で、
明日食べる納豆や醤油の心配をしていたんですよ」
海外のドラマでよく見るようなセラピーの場面では、
主人公たちはリラックスできそうな巨大な椅子やソファに腰掛けている。
ああいうのはお金持ちだけが利用できるセラピーなのだろうか。
でも結局あの日から、わたしはセラピーを利用するには至っていない。
ああいうものは、
そう、どこか贅沢な悩みを持て余している裕福な都会人のものだという予感があったけれど、
わたしは自分がいまだにおめでたいあの、トーキョーに住む都会人のままである気がしてしまう。
。今ではあれが一連の事故は、
「Tokyo nuclear accident」
と呼ばれている。

事故が起きてからしばらくは悲劇の引き金となった原子力発電所のあった東北の地名が海外の報道でも用いられたが、
今はTokyo といえば、あの悲劇を指す代名詞だ。
そしてその言葉はいろんな意味を含んで、様々なことが世界で語られている。
脱原発の動きはまず最初にヨーロッパ大陸を吹き荒れるように舐め尽くしていき、
やがてアメリカも、そしてロシアすらもう手を引かざるをえなくなった。原発だけでなく、あらゆる核に対する、ヒステリックではない、根絶の動きが出現している。
小さい島国といえど、
あの国には1億人以上の人が住んでいた。
これまで、どんな兵器も、殺戮も、
それだけ大量の人間の命を奪うことはなかった。

今日は、懐かしいがんもどきを見つけてそれをひとパック買った。
パッケージには中国語が書かれていたが、
明らかに日本のがんもどきだ、これは、と思う。
醤油だしで甘く煮込んで、これと白いご飯を食べることを思って胸がときめいた。
サトは、東洋系の顔出ちだが、
自分の出自について多くを語らないし、生粋のニューヨーカ一然としていて、
わたしのよく買うアジア食材についても驚くほど無知だ。
なぜこの店で働いているのかといえど、
彼は小説家になるという夢があって、ここでの店番は仮の姿で、
店番をしながらもずっとノートパソコンを開いてなにやらを書き付けている。
働きながら小説を書ける環境ということで彼の選んだ、ここ3年ほどの生き方なのだそうだ。

「What?」
サトはがんもどきを見て眉間にシワをよせた。
「豆腐をつぶして水分を抜き、カットした野菜などと一緒に丸めてフライしたもの」だと答え
ると、
また大豆製品か、とサトは目を丸くした。
とにかく日本の食品は大豆からできているものが多いとサトは普段からコメントを漏らしている。
コメというより、君たちの主食は大豆だねと。
そして、脈絡なくこれを知っているか、
と、ふいに一冊の本をサトが目の前に差し出した。
作者の名前をじっと見る。
ええと、聞いたことがある。
昔大ベストセラーを出した、ヨーロッパの作家で、
そう、あのワカコが偉くご執心だったことをわたしは思い出した。

ワカコはこの作家の本を担当したくて、わたし達の勤めていたあの出版社に入社したことは、社内でも有名な話だったし、本人の口からも何度も聞いていた。

「この小説は、日本の原発事故をモチーフにしていると言われている」

サトが重々しい口調で言う。

「え？では最近出た本なの？」

ワカコからその作家は、ここ何年もずっと新刊を出しておらず、生きているのかどうかすらファンにも分からない状態が続いていることを聞いた記憶があった。

「英訳されたものが昨日発売されたばかりで、俺は昨日のうちに買って徹夜で読んだね。君も読むべきだ。これを貸すよ」

サトが本を、買ったがんもどきをいれてくれた包みに一緒に入れてしまう。

サトが有無を言わさない顔をしているのに気圧されて、わたしはそのハードカバーが入ったままの包みを持って、

店を出ることになった。



冷たい雨のそぼ降る中をまたとって返し、

呪いじみた軋む音を聞きながら老朽化したエレベーターでまた6階の部屋に戻った。

寒さのあまり鼻がつんと痛くて、鼻水が出ている。

毛糸のパーカーをすぐに脱いでハンガーにかけて、窓際のスチームの近くに置く。

濡れて重くなったチノパンツを脱いで、さらにその下に履いていた発熱素材のスパッツも脱ぐ。

これは日本がまだ存続する時代に、日本から進出してきたファストファッションメーカーのマンハッタンにある店で購入したものだ。

あの店は、日本が消滅して、当然そのメーカー自体も消滅し、しばらくしてやはりマンハッタンの店も消滅した。

ネル素材の部屋着に着替えて、ティーバッグで簡単に淹れたお茶をサイドテーブルに置いて、わたしはベッドにもぐりこんだ。

あの日から眠りが浅くなって、ラベンダーを詰めたサシェを枕元にいくつも置いていた。

雑貨屋などに入る度に安眠にまつわるものを探している。

結局乾燥したラベンダーを詰めたサシェがわたしにはお守りのようになって、それが少しずつ増えていくことになった。精油も試してみたが、わたしにはどうも向かなかった。小さな布の袋に入ったそれぞれを少し揉んで、新鮮な匂いがするようにした。

サトが手渡してくれた本を、ベッドの中でそっと開いてみた。

茶色のかっちりした表紙を開くと、そこに献辞があった。

To Wakako

ワカコ？ローマ字で綴られていたが、
わたしにはそれがワカコのことを指しているとは思えなくて、
そしてそれを目にした瞬間、むさぼるようにして小説を読み始めた。

※※※※※※※※※※※

先週この街を覆っていたあの陰気な雨雲が去ってしまうと、
一気に春めいてきた。
もうすぐ一年。
失われた祖国を悼むためにこの街でも、最初に起きたあの大地震の日に、大規模な追悼会が催されると聞いていた。
いろんなことに協力してほしいとあちこちから声がかかっていたが、
どれにも返事を出すこともできないまま、その日が近づいていくだけだった。
そもそも放射能を逃れて海外に脱出した人間などはごくわずかで、
それ以前から会社から任命されて外国に赴任していただけで難を逃れた人は、
国ごと雇用主も消えたわけで、それら多くの人が家賃や生活費の高いNYから去ったと聞く。
日本人街のようなものが各地に形成されそうな動きも時々耳にはさむ。
しかしながら、わたしは今はこの都会の雑踏に紛れているほうが心地よかった。
実をいえば、彼がかなりのお金をドルにかえてこちらの銀行にいられてくれたものが、
わたし名義として正式に受け取れるための手続きも進んでいたが、
（手続きはあのマーティンの友人の弁護士がほとんどボランティアで引き受けてくれた）、
わたしはNYで就職した情報誌の会社での仕事を気に入ってもいた。
もともと出版社で女性向きの雑誌や書籍を作る仕事が楽しくてならなかったのだ。
毎日がNY特派員になった取材だと思えば、こんな贅沢な環境はない。
社長は華僑の中国人で、わたしの能力をそれなりに評価してくれていた。
日本人向けの情報誌を元々作っていたが、ニホンジンが金を失ってしまった今、
ターゲットはほかのアジア系人種へシフトさせ、
それでも以前にあったアジア人の日本への憧れを求心力に、
今は亡き、懐かしいJapanをモチーフとした、
いってみればあの国の滅亡を売り物にしたともいえる、
フュージョン的な誌面を作っていた。

もちろんデジタルコンテンツがメインで、誌面という言葉は便宜上である。

失われた祖国を売り物にして心が痛まないかって？

仕事だと割りきってやるのは、わたしにはなんでもないことだ。それに今はなんとかして食べていくしか、ないのだ。

マンハッタンのオフィスに通うのがそこそこ便利な、川を越えた対岸の土地の住宅街にある古いアパートを借りて一人で食べていくぶんには、

彼のお金に頼らなくてもなんとかなるのではないかとも思えたし、実際に手に入らなかった時のために、なんとかしなくてはと必死でもあった。



NYで行われる、大規模な追悼集会を前にして生き残ったニホンジンであるわたしには、報道機関などから取材の申し込みも絶えなくて、個人的には断りたかったが、こちらのほうは勤務先の、華僑の社長であるマーからそれらについては引き受けるように命令されていた。娯楽情報誌を発行しているだけとはいえ、やはり情報を生業としている会社の経営者だけあって、報道機関とのコネクションには興味があるのだろうか。一体どんな利益が彼に寄与するのかわたしが知ることはなかったが、自分の勤務時間を裂いても構わないとのことだったし、最近ではマーの秘書がアポイントを受けてそのスケジュールを管理までしてくれていた。お決まりの受け答えも仕事だと思って機械的にこなしつつけている。取材で自分のことを話す際に、異国の地で就職させてもらえたマーの会社に感謝していると個人的に付け加えてはいるが、それはマーから命じられてやっていることではないし、正直そう感じているのだった。ただし、マーを個人的に慕う気持ちは一切ない。彼の表向きの温厚そうな表情が、仲間内だけになったときガラリと酷薄なものに変貌することを知っていれば、彼に気を許そうと思う人間はいないはずだった。同じ中国人の仲間だけに見せる、残酷な刃物みたいな表情は、普段一般の社員に対しても包み隠されていたが、なぜか彼は最初からそれをわたしには隠そうとしなかった。もう存在しない国の生き残りであるわたしを同胞とみなしたのか、取るに足りない存在すぎて気を許しているのか、よくわからない。

春の兆しが街を包みだし、温気ももっとりと重いくらいに感じたことが最初で、わたしは体調がよくないことに気づいた。

被曝をしてしまった身体ということをようやく自覚した去年の9月から気をつけてはいたが、自分の身体に起こる様々な変化には注意深くなっていた。日本にいるころしょっちゅう出ていた鼻血は最近では出なくなっていたが、これも被曝の症状だとアメリカにきてから自覚するようになった下痢はいまだに治る気配をみせない。

そんな体調の優れないある日のこと、オフィスのフロアに直接訪ねてきた女性ジャーナリストがあった。

某巨大企業と政治の癒着についてのスキャンダルをすっぱ抜いて以来注目を浴びている、完全な非営利報道機関であるその団体名をわたしも知ってはいた。日本でも原発事故が起きてからは、そのような報道機関が活動していたはずだ。

その女性はソフィ・カルという名を名乗った。

ソフィ・カル？

わたしはそういう名のフランス人の前衛芸術家を知っていたが、目の前にいる、まだお嬢さんとも呼びたいくらいの若いジャーナリストよりずいぶん年輩だったと記憶しているので、単なる同姓同名だと合点し、名前については特に尋ねなかった。

ソフィ・カルのタイトに撫で付けたショートカットはいかにもキャリアウーマン然として見えたが、全体的にまだ学生っぽさが伺えるほど、フレッシュな息吹を彼女は発散していた。

彼女がとりつきもなしに、わたしのデスクの横でこやかに微笑んで言ったとき、どうやってこのオフィスに入ってきて私を見つけたのか不思議だとかそういうことも思わず、その感じのいい笑顔に好感を抱いたことと、

体調が悪いあまりになにか理由があればオフィスから出てしまいたいと思っていたわたしは、今はとりたてて忙しくないから、このまま一緒に外に出て話しましょうともちかけた。

ランチタイムを少し過ぎた時間の近所のカフェに入って、おのおの飲み物を買って向かい合って座る。

注文するときに彼女が、糖分はメイプルシロップにしてくれ、ヨーグルトはローファットのものでとか、色々うるさく注文をつけていたのが聞こえていたが、

彼女の前に置かれた透明なプラスチックケースに入ったどろっとしたスムージー状のものが一体なんなのかすごく気になって、

「これは一体なんのジュースなの？」

と尋ねてみた。

「リンゴのシェイクなの。さらに最近はペクチン粉末を入れて飲んでるわ」

と、彼女はアルミ素材の袋を取り出し、そこから山盛り一杯の粉末をすくって出して、シェイクにいれてかき混ぜた。

その意味するところはわたしにも理解できて、

曖昧に微笑むしかできなかった。実は自分自身もペクチンは錠剤のものを毎日摂っていた。それ以外にも幾種類かのサプリメントは他の何を削っても買っていた。
わたしは自分のために買ってきたルイボスティーをゆっくりすすりながら彼女の言葉を待った。

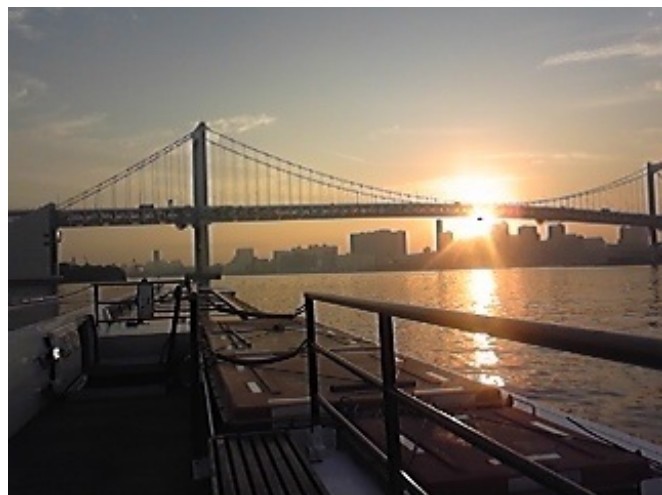
ソフィは、携えていた大きめのバッグから一冊の本を出すと机に置いた。
それは、先週、近所の店員のサトがわたしに読むようにと貸してくれたあの本に違いなかった。
わたしは借りた日に一気に読んでそれをサトに返し、
自分でもすぐ同じものを買って所有していた。
文学に疎いわたしでも、その作家のその新作が世界中で注目を浴びているらしいことは、次第にわかってきた。本国で発表されて、そもそも準備がなされていたかのように英訳もすぐに出たということらしい。
そしてわたし自身、彼の小説の凄まじいまでの迫力や完成度はある程度理解しているつもりだった。

「この本読みましたか」
ソフィがリングシェイクをずっと啜りながら聞く。やはり彼女には人懐っこくて人を安心させる雰囲気がある。いつも目がやわらかく微笑をたたえているようで、それでいて、少し悲しげなのだ。

「ええ読んだわ」
わたしは返事をした。
「どう感じましたか」
そう尋ねられて、わたしは、待っていましたとばかり、溢れそうになっていた思いが奔流のようになって自分の口から出がっていることに気づく。
母国語ではない英語を使わなくてもよいのなら、ともどかしい気持ちが一瞬わたしを支配したが、

わたしはこの本を読んで感じたことを、熱心に喋り始めた。
店には午後の明るい日差しが差し込んで、天然の木目を生かした家具をメインにした店内のインテリアはどれも眩しく輝いて見えた。
日本を支配した狂気について。
人々がなにかおかしいと思いながらも口にだせず、狂気の渦に引きずり込まれて、その黒い熱狂と暴走が誰にも止められなかったこと。
容赦無く土地も生命体も蝕んでいく核汚染。
足掻いても足掻いてもみなゆっくり蟻地獄にからめとられていくみたいだった。
その狂気について、苦しくてたまらないくらい濃密に書かれた、その作家の新作については、もう著名な評論家も色々書いているのだろうけれど、
わたしも興奮とともに誰かにそのことを伝えたくてたまらなかったのだ。

「この献辞に書かれているWakakoという人物について、心当たりがないだろうかと、わたしはそれが知りたくてあなたを訪ねました」
ソフィが言った。



ソフィ・カルがオフィスに訪ねてきたその日、そもそもずっと体調が悪いと思ってはいた。しかも、春の空気が一度到来したはずのNYは、その日の夕方にはまた冷たい風が舞い戻った。帰宅するために外に出た頃にはフリーザーの中にいるみたいに冷え込んでいて、身体が痛むくらいで、本当にこたえた。アパートに帰って、毛布にくるまっても寒気が止まらず思ってはかってみれば、40℃近い熱があった。なんとか解熱剤を飲み、そのままうなされながらひどい夜を過ごした。春と冬のせめぎあいわたしの身体の中でも起こっているような気がした。昨年、震災があってまだひどく混乱の続く日本に、ある日いきなり次々と桜が咲いていった時のことを思い出す。真下から見あげればたっぷりとした質感のあるその花の塊は、少し離れてみると、幻か霞のように儚い。そしてあの桜を見て過ごした時節、日本列島の東側には、ずっと濃い放射能が降り注いでいた。

夢にはその霞が漂ってはまた離れていき、
そしてまた次々と様々なイメージが差し込まれていった。

リンゴ・シェイクを飲み干すソフィ・カルの、青白い顔、悲しいみたいな、でも笑っている目、飲んでる最中に思い出したようにまたペクチン粉末の入ったアルミ製の袋をあけて、さらさらと注ぎ出す・・・

夢にうなされているような時間の中で、
色々な声も聞いた。

あなたを愛している
愛しているから
わたしはこの子をまもることにしたのよ
あなたにどれだけ憎まれても
あなたに愛してもらったお返しに
わたしはあなたの子どもを守るの
あなたのために
最後まで守りぬくわ

そうだ、あれはNYにくる飛行機の中で出会った翠さん・・・

NYに到着した朝、マーティンの車で辿りついた、
水辺のレストランで、朝食を食べた。
広い窓から水辺と、その向こうの摩天楼が眺められた。
夜が明けるにしたがい、対岸のマンハッタンの高層ビル群が朝陽を反射してきらめく。
旺盛に食べる息子の真道くんをいとおしそうにみつめ、
彼女は訥々と語った。
彼女の夫がどうしても東京の放射能の危険を認めなかったこと。
9月までどれだけ話し合っても通じなかった。
子どもを被曝させたくない思いで、家出同然に西へ避難したが、
旦那さんには、帰ってこないのなら離婚するとつきつけられ続けた。
「ひどい男性だと思うでしょ、なんでそんな非道な人と結婚したのかと思うでしょ。
でも東京の男性はみんなそんなものだったの。
うちの夫だけが特にそうだったわけではないのよ」
憤りを表現したマーティンに、翠さんはそう静かに話した。
翠さんは、ゆっくりと一語一語、考えながら英語をつなげていって話をしたが、それはどれもの確な表現だった。

わたしにはそんな東京の人のことがよく分かったから、
マーティンに、その東京の人々の異様な雰囲気について
翠さんの話を裏付けるように説明をしたが、
わたしにしたってほんの少しまで東京に危険があると思っていなかった。
いや、信じたくなかったのだ。

マスクを決してはずさなかったワカコがいつも目の前にいたのに、その意味するところを考えることをずっと拒絶していた。

放射能で汚染された地域の農作物を食べることがなにか犠牲をともなった尊い行為のようになり、子どもまで放射性物質を平気で口に入れ、また大人たちがそうするように仕向けていた。

夢が重くなったり、捻くれたりしながら、
熱の高いとき特有のふわふわした心地を、
袋を一気に裏返しにひっくり返してはまたもどすような激しさで訪れて、
また消えていった。



わたしは、自分自身が取材される一方で、
マーに雇われて作っているネットマガジンでも、3月の丸一年目の日を意識した記事を作っていた。

もともとファッションやグルメなど、軽い話題を扱う媒体なので、
社会性のある、重いテーマの話題に深く切り込み過ぎた記事は必要とされない。
追悼集会に向かって誰がどんな活動をしているのか、
読者の関心の高い有名人や、アーティスト、または人気のある店の取り組みを紹介したり、彼らへのインタビューなどを、
あくまでファッション性重視な方法で紹介する方針をとっていた。

その一方で、
生き残ったニホンジンの声は、
別の方法できちんと残していきたいと考えてはいた。

そのことを伝えたら、ソフィ・カルは協力したいと申し出てくれて、

今の会社に籍を置いたまま、
我々の非営利な報道機関のジャーナリストの一員となって、
記事を書いてほしいともちかけられた。
私の雇い主のマーに相談すると、それについては問題ないと言われた。

その日、私は仕事を終えたあと、
アパートの部屋でいつものように毛布に包まってテレビのチャンネルを適当に回しているうちに、
懐かしいドラマの再放送にいきついた。
そのドラマ、「SATC」の日本での最初の放送時、あまり熱心には見なかった。
とういより登場人物たちの、独身女性特有の悩みや痛みが、
リアルに自分とシンクロしすぎて、見るのがつらいと思った。
それでも番組のブームがなかなか衰えをみせず、
自分も編集部の一員だった女性情報誌の紙面でこのドラマを絡めたNYの観光案内特集を組んだことがあり、その担当になったのがきっかけで、関わりが強くなっていった。
また、初めて視聴した20代には生々しく自分も共鳴していた主人公たちの悩みは、その頃わたしは30代に入っていて、どこか冷静に眺められる余裕が出ていた。
取材のためにそれから何度かNYに行った。
その頃、自分がこんな形で居住するとは想像もしなかったと、あきれるような気分になる。

2012年、もうすぐ3月を迎えようとするNYで、しばらくわたしはドラマを安心して見た。
NYの実際の街の中で多くロケシーンのあるドラマだが、主人公たちの部屋もよく登場するドラマだ。
主人公たちの住むNYのアパートの部屋は、どれも居心地よさそうに見えた。
独立した女性の住む、自由の証の根城。
彼女たちが洗面所で使う歯ブラシやコップひとつにしても、彼女たちに馴染んで、
使いやすいそうで、快適な居住の小道具としてイキイキとして見えた。
彼女たちがデリバリー中華料理を紙でできたパックから直接食べていてもとても美味しそうに見えた。
わたしが同じ事をしても、とてもあんなふうには見えないし、おいしく食べられる気がしない。
そしてまた、私のアパートときたらどうだろう。
いつまでたっても、自分の棲家だと思えない。
クリーム色の壁紙に、淡いラベンダー色のふわふわとしたカーテン、同じ色の毛布やベッドカバー、
お気に入りの配色で、居心地のよい部屋を整えてみたつもりでも、ずっとくつろいだ気分にはなれないまだ。
借りぐらしの気分のまま、この部屋に愛着が持てない。

ここで根を下ろして生きていく覚悟など永遠に持てない気がする。

突然、ぷつぷりと祖国を喪ったのだから、そんなのは当たり前よ、といつものように自分を慰める。

しかし、国を喪うまえから、このドラマに出てくる女性たちのように、堂々と生きていたことはわたしには一度もない。

Tokyoという都市で、それなりに名の通る出版社に勤務して、流行を追う仕事に就いていてもいつも自分を肯定できなかった。

なぜあれほどいつも自信が持てず、おどおどしていたのか。

そしてそれはこの土地に暮らし始めても同じだ。

わたしはそもそも、自己を肯定できないで生きてきた。そして、少なくとも自分を肯定してくれているはずの男性も、国を喪った日に、同時に喪った。



3月の追悼集会のために、翠さんは息子の真道くんといっしょに、NYにやってきているらしい。

翠さんは当初、彼女のお父さんのコネで入学することになったNYの私立の小学校に息子の真道くんを入学させる予定でこちらにやってきた。

しかしあの日、日本が消滅して、おそらくはかなり裕福だったはずの実家からの仕送りも途絶えた彼女は、同じように祖国が消滅したニホンジンの子どもや女性などを保護する団体を頼ってNYから引っ越していった。

初めは、サンフランシスコにできた、そういう親子を收容してくれるコロニーのような場所に仮住まいしていると聞いていて、落ち着き先が決まったら連絡すると言われていた。しかし、向こうも慌ただしかったのだと思うし、わたしにも余裕がなかった。

今回、311の追悼集会のためにNYにくるという連絡をもらうまで、互いに音信不通になっていた。

3月に入ったその日、数日前からNY入りしているという翠さんと夕食を一緒にという約束をしていた。

約束の店についてみれば、先について座っていた息子の真道くんが、すぐにわたしに気づいて元気よく「紗英さん！」と手を振ってくれた。

なにが起きたのか判らないが、とにかく日本列島に住んでいたはずのニホンジン全てとまったく連絡がとれなくなった日々、憔悴しきっていた大人たちの中で、真道くんだけが、その存在がまるごと希望そのものとしてそこにあった。

そのことに、どれほど大人たちは救われたかわからないと、しみじみ思い出した。

久しぶりに会う翠さんは、最後に別れた日の記憶からは、信じられないほど顔色もよくなり、とても元気そうに見えた。

そして二人の隣に、銀縁のフレームのメガネをかけた、東洋系の男性が座っている。

濃い髭を生やして一見むさくるしいのだが、まだ30歳を越すか越さないかといったあたりの年齢に思える。

「こちらは陽介くん。彼もこの追悼集会のためにNYに来るって聞いて、紗英さんにも紹介したくて今日は誘ったの」

翠さんに言われて、その髭と眼鏡の男性は、

「初めまして」

と頭を下げた。

陽介と紹介されたその青年は気難しそうな仏頂面ではあるが、特に不機嫌というわけでもなさそうだ。

柔軟に愛想笑いをふりまくことのできないタイプだが、人に不快感を与えることを好ましいと考えているわけでもなく、どう振舞っていいのかバツが悪そうでもあり、思春期の不器用さをいまだに抱えてるタイプの青年としてわたしにはうつった。

「彼はね、高校を出てすぐアメリカの大学に進学して、そのままこっちで就職もしちゃってずっとアメリカで暮らしていた人なの。だからもう15年はアメリカ暮らしよね」

翠さんがそう説明してくれる。

「昔、お母さんが好きだった人なんですよ」

真道くんがケロッとした明るさでそうそう言い、その陽介という青年は、ますます苦しそうに表情を硬くする。

「では、翠さんと同世代？ ずいぶんお若く見えますね」

とわたしは陽介氏に話しかけた。

陽介氏は、ぎろりとこっちを睨みつけるようになってしまった自分の視線に自分で恥じいるようにして慌てて目を逸らした。とことん、不器用な思春期の少年みたいだと可笑しくなる。

「いえ彼は今年やっと30歳なの。わたしより8つ年下。同世代と言えるのかはわからない」

翠さんがくすくすと面白そうに言う。

翠さんが片思いしていた男の子、というわりに、翠さんの方は余裕に満ちた態度で、青年のほうばかりがぎこちない。

これは立場が逆なのかしら？ と、わたしは目の前の3人を眺める。

ひとまずは陽介氏のことはおいておいて、翠さんと、この数カ月のことをお互い夢中で報告しあった。



919デモの次の日の早朝にNYへの直行便に乗った際、ひと晩で荷造りをしなくてはならなかったというのもあるが、ほとんど日本から荷物を持って来なかった。

それどころか、日本から履いてきた靴も洋服もなにもかも棄ててしまった。

放射性物質が付着して、もうとれない気がしたからだ。

せっかく放射能から逃げてきたのだから、

なにもかもを一新して、出来る限り被曝を抑えて生きていきたいかったのだ。

アパートに移るまで泊まっていた、タイムズスクエアのホテルで、

当面身につけるものを買揃えてきて、新しく買ってきたものはクローゼットに吊るし、空いた紙袋に日本から持ち込んだ服も下着も靴もコートもなにもかも詰め込んで棄てた。

さらに、スーツケースもそのうち処分してしまった。

そこまでする必要があったのかどうかわからないし、

少し前まで無防備に被曝をして生きてきたのに、ヒステリーじみていただろうかと振り返る。

しかし、放射能が付着している何かを避けるとしたら、それは差別でもなんでも無いということが、今ならよくわかる。

避けたとしても、そのものを避けたいのではなく、付着してる放射性物質を避けたいだけなのだ。

汚染のひどい地域の人間が差別を受けているのではないかという問題を、まだあの国が存在してそこで暮らしていた頃、わたしも耳にしていた。

避難してきた土地で、汚染された土地から移ってきたことを理由にいじめられたとかそういう話だ。

それはまったく馬鹿げた意味のない、単なるいじめであり、人権侵害といっていいだろう。

しかし、放射性物質を避けるということは、本来汚くもない人間を汚いといっていじめたり差別することとは、全く別の問題なのだと今はわかる。

もし高濃度の放射性物質をからだじゅうにまとっている人が、わたしを抱きしめて、と愛する人に言うとする。

しかし、拒絶される。

「わたしに触れるのが嫌なの？わたしが受け入れられないの？」

と、絶望するのだろうか。

「君が嫌なんじゃなくて、放射性物質が危険だから避けたいと考えているだけだ。

僕が避けたいと思っているだけでなく、君にも避けてほしい。

身体を洗って、新しい服に着替よう。そして抱き合おう」

と愛する人が答えてくれれば、本当に愛されているということだ。

そうではなくて、放射能まみれの君のことも好きだからと、そのまま抱きしめてしまえば、そのまま被曝することを許すだけだ。

自分が被曝したくないということは、相手の被曝も、誰の被曝もゆるさないことだ。

自分が無頓着に被曝してしまう人間は、誰の被曝にも鈍感なのだ。

相手のことを意味もなく汚いと拒絶するわけではない。放射性物質を避けたいと考えているだけなのだ。

そして放射性物質がついていることは、汚いのではない。

危険なだけなのだ。

全ての人の被曝をやめさせたいと願う人が、汚染地帯の食物を拒否し、汚染地帯に行くことを拒否する。そして原発で労働する人の被曝もやめさせたいと願う。

汚染された食べ物を平気で食べる人は、汚染地帯でその作物を作っている人の被曝について心配する想像力が欠けている。そして、被曝しながら労働している原発の作業員の健康にも配慮できない。

そう、かつての自分のように、とわたしは思いだす。

汚染された食べ物をみんなで食べて、被災地を「食べて応援」しようという考えがあったが、あれは、

作物を作る人がこの先もずっと被曝を続けることを強いている、むしろ被災地とその人々を虐げる行為だったのだ。

汚染されたものを食べて助けられるのは、農家や漁師などに補償金を出すのをしぶっている電力会社と政府だ。

農家は命をかけてつくった農作物を、二束三文で買い叩かれるだけで、儲けるのは中間業者だ。本当に農家を助けたいなら、汚染される地域での農業をやめるようによびかけ、また、汚染された農作物は食べないことだった。

そして、仕事を失った生産者に当然支払われるべき補償金を出すように、電力会社と政府に訴える。

これが本当の応援だったはずだ。

しかし、

あの日、

そういう人々の思いも、

希望も絶望も、なにもかもを巻き添えに、

全ては終わってしまった。

なぜわたしのような人間が生き残ってしまうのか恐ろしかった。

放射能の危険を知ってマスクをしてまわりにそれを訴えていたのかもしれないワカコや、

わたしを脱出させてくれた佑介、

そのほか、ずっとデモなどの原発反対の活動に参加していた人たちではなくて、

日本から逃げるまで現実を直視しようとせずに生きてきたわたしのような人間が、

うっかり命拾いした。

そのことを、

わたしはいまだにどう受け止めていいのか、わからないのだった。



こちらで暮らし始めてまだ季節が一回りしていないので、毎年、この春先の季節がこうなのかどうなのかもわたしには未知のことだった。十分に春めいたかと思えば、急激に冷え込む日もあり、一度、ひどい熱を出してから体調が不安定なのも相まって、常に嫌な緊張感を味わいながらここ最近を過ごしていた。

それでもその日、翠さんと息子の真道くん、そして翠さんの旧知だという陽介氏との食事は、こころなごむひとときだった。

豪快なサイズのステーキや、つけあわせというよりメイン一品ぶんのボリュームはあるオニオンやポテトのフライを、お腹いっぱい食べて、わたしたちはおしゃべりを続けた。

とはいえ主に喋っていたのは翠さんとわたしで、陽介氏は求められれば当たり障りのないコメントを挟むくらいで、あとは8歳になる真道くんの相手になってくれていた。

一度NYで別れてからの時間の、それぞれの深かった孤独をお互いに埋めていくように、わたしと翠さんは共感しあい、一緒に悲しみを味わい、また希望を語った。

日本語で存分に胸のうちをあらいざらい話すという行為そのものにも、癒しがあったのかと思う。

それは翠さんもまったく同じようで、互いに食事が終わっても話し足りず、結局全員でわたしのアパートに移り、めいめにお茶やジュース、ビールを飲みながら話を続けた。

世が更けてきて、眠いといいだした真道くんを、陽介氏が寝室に連れて行って、どうやらそのまま二人共寝てしまったようだった。

二人きりになったので翠さんに、陽介氏のことを聞いてみた。もともとNY行きの飛行機の中で初めて知り合ったに過ぎなくて、こちらに到着してから、それぞれ忙しくしょっちゅう会っていたわけでもない。

しかし、今日の夕方からこれだけ盛大にお喋りをして盛り上がってしまうと、翠さんが、自分の昔からの女友達であるような気がしていきっていた。

「私が結婚する少し前に、わたしは陽介くんと知り合ったのよ」

翠さんも、学生時代の女友達に秘密を打ち明けるような親密な話し方だった。

「知り合ったって、どこで？」

わたしもはしゃいだような、それでいて他に聞いている者もないのに、ひそひそ話めいた声を出していた。

女どうしで、恋愛についておしゃべりする、純粋な楽しみをわたしは思い出しかけていた。

時間は真夜中、先ほどから雨の降る気配が続いている。

やわらかな、ひとつひとつの雨つぶが独立していない、あたたかい蒸気が街にたちこめながらすべてを濡らしてゆく音だ。

長い人類の営みのなかで、女たちが小さな秘密を共有しあう喜びは連綿と続いてきたであろう、そのすべての女たちの記憶が、濡れた土から掘り起こされて匂い立つような、春の夜の雨だった。

アパートに帰宅してお風呂に入ってしまうとすっかり気が抜けて、それからノートパソコンを開く気になどなれず、ソファに横になったが最後、ダラダラとテレビを見るか、雑誌などをめくるかして、ほとんど生産的なことができなくなってしまう癖は、日本で暮らしている頃からずっとだった。それで、わたしは最近、勤務先のオフィスを出て帰宅する前に、どこかコーヒーショップなどに立ち寄って、2時間ほどパソコンを開いて、ソフィ・カルがジャーナリストとして属す非営利の報道機関で発表する予定のレポートを書くことにしていた。夕方、オフィスを出て、マンハッタンに降りてきた透明な宵闇と、それと呼応するように存在感を示しはじめたネオンの中を歩いていると、自分がたった一人で、身寄りのないことがいっそ、すがすがしいと思えるくらいの気分を味わうことができた。だからわたしは少々ムリをしてでもこの都会で生きていくことを選んだのだ。

「紗英はもともと堅苦しい記事を書く分野の仕事をしていたわけでもないのだから、気楽なエッセイみたいな形式で構わないし、まずは自由に書いてみてちょうだい」

ソフィ・カルにそう言われて、形式を問わないというのが最初はとても自由に思え、ありがたいと感じた。

しかし、それは最初の頃だけで、いざ書き始めようとすれば、制約がないということは、選ばなくてはならない膨大な選択肢の中から自分でなにかを決定する、あるいは自分で新しいなにかを生み出すことだと思い知り、わたしは頭を抱えていた。

出版社に勤務した15年で、つくづく自分に独創性ある創造力などというものがないことは嫌になるくらい自覚していた。

なぜ出版社に入って仕事がしたかったのか、最近、自分の20歳の頃を思い出すことが増えていた。

北陸の田舎から大学進学によって上京したわたしにとって、都会のすべてが物珍しかった。

そして、必死に田舎者であることを隠し、都会に溶けこもうとした時期、とにかく女性向けのファッション誌を読んでいた。雑誌に書いてあることが実態のない虚構だとどこかで知りつつ、わたしは忠実に雑誌を吸収していった。

面白いことに吸収した知識を寄せ集め、それをあたかも自分で創り上げたような物語として構築しなおして誰かに語ると人の興味を買うことを知った。そんなふうにはわたしは雑誌から得ただけの知識で、東京を語ることができ、それゆえ出版社にもすんなり入社できたと思っている。自分の知識でも感性でもなく、寄せ集めを綺麗にコラージュして人に見せる能力はあった。だから雑誌などの編集は向いている向きもあった。ただし、自分の内側からなにかが湧いて出るように「クリエイト」されることはありえなかった。

そういえば、その時代に、リアルタイムで拠り所となる情報源は、雑誌をおいてほかに存在しなかった。

インターネットがこれだけ普及する前夜のことで、それは紙でできた雑誌文化が煌めいていた最後の時間だとも思っている。大学で4年過ごしている間にちょうど1995年をまたいだ。卒業してわたしが出版社に入った頃から、インターネットが爆発的に世界に台頭しはじめ、紙の出版物は早晩、滅びてしまうだろうと盛んに喧伝された。

それからの15年、紙媒体を扱う出版業界は沈みかけた船ではあったが、それでも存続したし、完璧に盛り返して再びの勝利をおさめるとは思えなかったけれど、特定の出版物はそれでも売れ続けたので、わたしはどうか仕事を失うことなく、東京で一人、自活して暮らしてきた。

インターネットのバブルは膨れるまで膨れて、弾けたとも言われるし、それがビッグバンとなって、本物のウェブ社会が到来したのかもしれない。しかし、わたしは少なくとも去年の大震災が起きた当時、多くの人が正しい情報を得ていたtwitterには無縁だった。NYに来る直前にTwitterで様々な真実をкаろうじて知ったに過ぎない。

私は、チャイナタウンの、中国茶を出すカフェに入って、色とりどりのランタンの灯る店内でノートパソコンを広げた。白色人種にひけめを感じるのは事実にはせよ、もう失われてしまった祖国への愛惜が、血のルーツが似ていると思われる同じアジア人種に引きよせることもあるだろう、わたしはチャイナタウンのほかにも、韓国、ベトナムなどアジア人の街を好んで訪れた。ローズヒップティーを注文すると、薄い繊細な透明なガラスのカップに、鮮やかなピンクのお茶が注がれたものが、錦糸の刺繍をほどこしたコースターの上に運ばれてきた。周りでは賑やかに軽食とお茶を楽しむ、主に中国系のアメリカ人のお喋りが聞こえて、活気に満ちている。この人達の祖先も、祖国をすててやってきたんだろうか。もう二度と帰らない覚悟で？わたしはお茶を飲みながら、しばらくその喧騒の中にたゆたっていた。



結局私は、記事の原稿がほとんど進まないまま、チャイナタウンのカフェをあとにした。

店を出て、振り返ると、店の軒先にも淡いグリーンやピンク、イエローのランタンがたくさん吊るされて、野外パーティのように賑やかだった。

NYへ来てから、街の風景や建築を眺めて楽しむ心の余裕もなかったが、

この店の外観は絵になると思って、わたしは店の前で何枚か写真を撮った。

何枚か撮ったものの写りを確かめながら、なかなか綺麗に撮れているし、昔勤めていた日本の出版社で出していた女性向けの出版物でなら、そこそこ大きな面積でこの写真を使っただろうと思う。

人種のるつぼというNYの紋切り型のイメージを、記事を作るときは、忠実に構築する。人々は、自分の知っている世界をふたたび雑誌で読むことを期待している。

いかにもNYらしいNYを、ちょっと新しいエッセンスを加えては、繰り返し何度でも掲載する。雑誌を読むというのは一種の予定調和の世界を楽しむことだとわたしは感じて、ずっと仕事をしてきたことを思い出した。あまりにもわかりにくい世界を、人は雑誌で読みたいとは思わないのだ。知っていることを確認することに、ほんの少しの新しい情報があればいい……。

夜の10時頃だったが、金曜日のNYの街はまだまだ賑やかで、私はしばらく歩くことにした。

街の喧騒に溶けこむようにあてもなく歩くのは楽しいことだった。

厳寒の季節手放せなかった分厚いダウンコートも今は必要なくなった。

着るものが軽くなったぶん、気持も少しは軽くなったような気がする。

先日、翠さんと再会できたことも大きい。この週末はいよいよちょうど一年目の追悼集会が行われる。

ノートパソコンなど荷物はリュックに入れて背負っている。

最近、このリュックを背負って、スニーカーといった、バックパッカーのような恰好ばかりしていた。こういうファッションは楽だというのもあるが、それ以上に、必要以上に自分を飾り立てることにすっかり興味がなくなってしまっていた。また、鏡の中の、さっぱりとした男子学生みたいな自分を見ると、若返ったような気がするし、気分がよかった。

原稿が進まないのは、原発事故が起きてから日本を覆っていた、妙な空気について、このNYの人々にどう説明してよいのか分からないのだ。

そもそも、本音を隠して、建前上は必要以上に慇懃無礼に振る舞う日本人の態度について、理解できる外国人は少ないのではないかと思う。

日本人だけが暗黙に了解しあっているあの文化は、他の国の人間とわかちあう必要もなかったもので、特に外に向けて言語化されてこなかったのではないか。

その奇妙にねじくれたような空気感を、さらに母国語ではない英語を使って説明することは、本当に難しいと感じていた。

記事ではなくて、わたしは次のような物語めいたものを最近綴っていた。



目を覚ますと午後の4時半だった。

昨夜はチャイナタウンのカフェから帰り道、なんだかんだと寄り道をして遅く帰宅し、それでも眠る気にならず、そのままなんとなくDVDを見たり、音楽を聞いたりして、明け方まで起きていた。

不眠がちだというのは安眠グッズをよく買っているが、いつも暗い夜に寝てしまうと、そのまま二度と目が覚めないのではという子どもじみたことを半ば本気で考えて、いつまでも電灯を消すのをためらううちに寝不足になることは自覚していた。それで今日のような週末は、仕事がないことをいいことに、本当に夜を寝ないまま過ごし、限界がきて明け方眠るということがしょっちゅうだった。そして昼間は長い間寝てるのだから、本物の不眠症というわけでもないのかもしれない。

そして土曜日の今日の昼間はほとんど寝て過ごしてしまったらしい。

夕方が近いから薄暗いのか、今日はずっと曇りがちな暗い空だったのか分からない。

いずれにせよ、この白っぽい暗さは、やがて濃紺の闇にとってかわるだろう。

また部屋が夜に支配されることが不安で、わたしは部屋を出ることにする。

丸一日食べてないのでお腹もすいていた。

先ほどまで確かに見ていた、アタマでは思い出せないのに、身体がしっかり覚えている夢の感触がなかなか抜けないまま、わたしは薄いコートを羽織る。

コートに閉じ込められたみたいにますます夢は私に居座る。

夢を反芻すると、あたたかな体液のようなものが身体から逆流してくるようだ。

一体どんな筋書きの夢を見ていたのか。

ストーリーなどなくて、この心地良い温度だけを味わうという夢だったのか。

近所を散歩したあと、元々寄るつもりでいた24時間営業のサトの店に入る。

この時間帯はサトではなくて、別の店番がいつもサトの座っている定位置にいた。初めて見かける、やはりアジア系の青年で、控えめな笑みをたたえたこの表情は、知っている、アジア人のものだ、と思う。サトにしても生まれた時からアメリカ人ではあるが、

彼ら、そしておそらくわたしにも共通する、どこかこのはにかんだような優しい笑みは、黄色人種に特有の美質だと私は思っている。

白色人種の、自分たちの優位性を疑ったことなどない、一点の曇りもない笑顔は、いくらこの国で同じ教育を受けてきても、受け継いだ血がどこか拒絶してしまうのではないか。

新聞各紙一面が、日本のあの災害から明日の日曜日でちょうど一年だということを伝えている。この店に置かせてもらっている、私の勤務先の会社の出すフリーペーパーの表紙にも「311」という文字がおどろおどろしく踊っている。

表紙のひどく扇情的なデザインを、雇い主のマーはひどく気に入って、デザイナーを直々に褒めているのを見かけたことを思い出す。

発電所の黒いシルエット、白い防護服に身を包んだ人の形、それらをうっすらと取り巻く薄い影のような煙・・・。

「おっと失礼、君には面白くない絵かな？」

マーは、他の社員の手前わたしには礼儀正しくそう謝ったが、本心では何を考えているのだろうと、いつものようにひんやりした気持を味わった。

わたしはアジアフードを中心とした惣菜の量り売りをパックに詰め、缶ビールの6本パックとともにそれを買った。

部屋が嫌で外に出たのだから外食にすればよかったのに、つつい麻婆豆腐や炒飯を見かけて抗えなくなった。

結局それを食べるために、また目と鼻の先の部屋に戻るしかなくなって店を出ようとしたところで、背後から声をかけられた。

サトだった。

「Hi、紗英。今日は休みなの？」

「そう、サトはこれから店番交代なの？」

「いや、僕も今日は休みだけど、夕飯を買いにきた。僕もすぐ近所に住んでるから」

そして、わたしの包みをじっと見て、

「それ、帰って1人で食べるの？」

と聞いてきた。

「ええ、もちろん」

いつも一人分の食事を買うときにこの店で、まさに毎度レジをしてくれてるサト相手に見栄を張っても仕方ないので私は素直に返事をした。

「ビールも1人で半ダース飲む？」

これはわたしがビールを買うときにサトがよく言う冗談だ。

「僕もこれから君と似たようなものをここで買うから、良かったら一緒に食べない？」

と思いがけずサトに言われてわたしは面食らう。彼がわたしに女性として興味がなさそうなのは普段接していてよくわかっているのに、純粹に近所付き合いを申し出てくれているのだとわかっていても、NYにきてから、地元の誰かに個人的にこんなふうな人付き合いをしてもらえんとは考えてなかったからだ。

「いいけど、どこで？」

「俺んちでもいいし、君のうちでもいいし。外で食べるにはまだ肌寒いでしょ」

「わたしのうちにくる？」

あの、いつも1人で夜を過ごすのが嫌な部屋に誰か他人が来てくれれば、もしかすると何かが変わるような、そんな期待が一瞬胸をよぎった。

「喜んで。君のアパート、君が入っていくの何度か目撃してるし、実はどの部屋なのかも知ってるんだよ。ラベンダー色のカーテンの部屋だ。君がこの店に来るようになってからあのラベンダーのカーテンが取り付けられたから。この近所の人みんなそれに気づいているのかどうかは知らないけど」

サトがこんなに親密に話をしてくれたのは初めてだった。

私の買った惣菜とかぶらないように、一緒に食べるものを選んで、ビール以外にもスプマンテを買って店を出た。1人ではスプマンテのボトルを開けることなどまずないわたしは、それだけでなにか華やかな気分になる。

まるで週末を恋人と一緒に過ごすニューヨーカーのようだと、わたしは過去にみたことのあるNYにを舞台にしたいいくつかのラブコメ映画を思い出していた。

第2章

第2章

20XX年 8月（ここ、南半球の8月は、真冬だ）



ここに、これから何か書き連ねようとしている、語り手となるわたしについて、まずは何か語るべきなのか、わたしは迷う。

とはいえ、何かわたしが文字を連ねたところで、しかも「日本語」で書いても、それを読んでくれる人は少ない。

そう、あまりにも少ない。

ほとんど存在しないと言ってもいいだろう。

わたしの文章ごときに誰か興味を持ってくれるはずがない、という謙遜ではない。

文字通り、そんな人間はもうほとんどいない。

日本語が分かる人間がもう、驚くほど少ないという、本当に字義通りのことを述べたまでだ。

かつてあの列島には日本語を使って暮らす人が1億人以上いた。

あの列島の上で生きる1億人余りはほとんど全員日本語を使ったし、日本語しか使えなかったとも言える。

当時（わたしがまだ日本列島で暮らしていた頃、西暦2011年辺りまでだ）、地球上において、母語として使っている人口が1番多いのは中国語で、公用語として使用している人口が1番なのは英語だったと聞く。

（沢山の方言が存在するのだが、ひとくくりとした）中国語を母語として使う人口と、公用語として中国語を使う人口はほとんど一致しており、おおよそ世界で12億人だったそうだ。

一方、英語は母語で使う人間が3億5000万人程度なのに対して、公用語で使う人口は14億人にもものぼり、英語は世界の共通言語という認識だった。

ところで、日本語である。

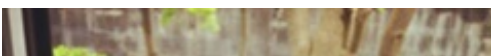
母語人口としても、公用語人口としても、その数は、世界でベスト10に入るほどで、あの小さな島国だけで通用していた言語としては、かなり巨大な言語だったのだと思う。

日本語もまた、母語として使う人口と、公用語として使う人口は一致しており、それはつまり日本列島の上に暮らす人の数でもあった。

もちろん、日本では英語ができることが成功への道だとさかんに喧伝されていたし、英語教室が繁盛していた。高い教材も飛ぶように売れていた。

英語は確かにできるにこしたことはなかった。

しかし、できなくてもなんとかなった。



日本は、日本語しかできなくても、その中でそこそこ広い見



識を持ったつもりで生きていくには不都合ないと思われる、日本語だけで完結した、それなりに豊かな文化圏として存在した。

世界のあまた存在する言語を（とりわけ英語を）、上等な日本語に翻訳する人材は豊かすぎるほどに存在したから、日本列島で日本語しか知らないで暮らしていても、世界の文豪の小説から、映画やゴシップネタ、政治経済ニュース、最新科学情報に渡るまで、ひと通り知ることは可能だった。

無論、日本語しか使えないから「ここまで洗脳されたのだ」と、あの頃盛んに言われたものだし、確かにそれは事実なのだが、いざ、その言語を失ってみれば、わたしたちはなんと豊かな言語を持っていたのだろうか、と嘆息するしかない。

日本語そのものが消滅したわけではない。

しかしそれを使う人間がほとんど存在しないということは、言語の滅亡なのだ。

日本語が誕生してから著されてきた膨大な書物も、読む人がいなければただの紙の山だ。さらに、あの列島に存在した紙の書物のほとんどは救出することができなかった。

ただし、インターネット上には膨大な日本語は残っていて、それらにアクセスすることは今でも可能だ。

しかし、残された、日本語を解するほんの僅かな人間が読むにはあまりにも膨大な量で、リンクからリンクを辿っているうちに、ひたすら茫洋とした気持ちになるのだった。それにインターネットに日本語が残されるようになったのは2011年までのほんの15年ほどで、ネット上に残る日本語のほとんどはその時代に書かれたものに限った。それ以前の日本語で書かれたものたちは、忽然と消滅したも同然だった。

この土地の乾いた風に吹かれていて、ふいに湿ったモンスーンの匂いを思い出すことがある。

そして、あの、海を渡ってきたばかりの風だけが持つ、なつかしい湿り気を探している。

同じように、この土地のマーケットなどを歩いていて、その喧騒の中に、聞き慣れた日本語が混じっていることはないかわたしは無意識に探している。

いつも。

どんなに混み合っていてうるさい中にいても、わたしには聞き分けることができる気がする。

日本語を話す人と、久しぶりにたっぷりとおしゃべりがしてみたいという渴望のあまり、どんなひそひそ声でもわたしにはキャッチできる気がしている。それが日本語ならば。



しかし、読んでくれるあてがないとかこちながらも、わたしはこうして書いている。

日本語で。

なかば自嘲気味にこんなことを前置きとして付け加えておいて、誰へのエクスキューズのつもりなのか自問自答する。それはつまり、その、ほとんど存在しないと思っていた読者があらわれたときに、その希少な相手に向かってへの言い訳だというのだろう。

そう、今、これを読んでくださっている、貴方への。

そして日本語で書くことへの執着が自分にまだ残っていることに驚く。

多くの人に読んでもらいたいといった希望や野望が、わたしにはまだ残っているのだろうか。

すっかり日本語から離れて暮らしていても日本語はやはり不自由なく使える言語だ。

2011年、日本でわたしは20代後半だった。外国語をある理由から熱心に学んでいたとはいえ、結局、わたしの母語は日本語なのだ。日本語以上に、思うままに操れる言語はない。それは日本語を長く使わなくなった今でもそうなのだ。

わたしは今書いているものを、Web上に日記をつけるように気楽に綴っていくつもりだ。

現に数日前に書いたぶんは、誰でも読むことのできる電子空間にアップロードしてある。

鍵のついた日記帳ではなくて誰でも目にすることのできる場所に書くというのは、誰かに読んでほしいという願望があるからだとも言えるし、どうせ読む人など存在しないゆえに、鍵をつける必要などないからなのか、自分でも、本当のところは、もうよく分かっていない。

手触りのある紙を、インクにひたしたペン先で引っ搔いていくことに憧れることもある。上質な紙にインクを滲ませてゆく行為を夢想すると、それだけでいい文章が書ける気すらする。

しかしわたしは結局キーボードを叩いている。

漢字に変換したい度にスペースキーを押しながら、文節をひとつ書き終える度に、タタンとリターンキーを押しながら、「日本語を」綴っていく。

傍らに、置いていたコーヒーがすっかり冷めてしまっている。

そして、おしよせてくる眠気に抗わないで、毎晩、眠るってしまう。

パチン。

スイッチ・オフだ。

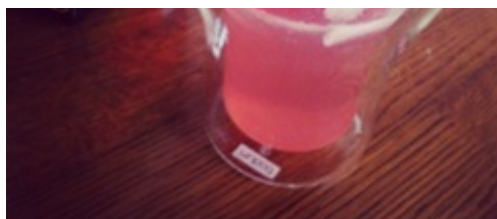


目を覚ます。

透き通った光線の中で、ここがどこなのか、逡巡する。

随分歳をとったはずだ。

それでもこういう寝覚めの瞬間に、一瞬自分がまだ随分若かった頃の気分がよみがえることがある。



すぐに現実に引き戻されるものの、確かにわたしにも若かったことがあるのだと懐かしくてあたたかい気分になる。着替えて顔を洗い、薄手のカーディガンを羽織って個室を出る。

この施設の南側に、庭にせり出すようについている、硝子張りの温室みたいな部屋があり、そこに朝食は準備されている。

そこで食べることもあったし、プレートの上に好きなものを乗せて持ち帰り、自室で食べることもある。よほど体調の優れないときは頼めば部屋に運んでもらうことも可能だ。

誰とも顔を合わせたくない朝は、自室の中にある冷蔵庫の中のもので簡単に済ますこともある。各個室には簡単なキッチンもあった。

温室のような食事のスペースのほかにも、施設内に共用スペースはいくつもあった。図書室やスポーツ・ジム、談話室、映画を上映するための部屋もあった。

それでもほとんどそういった場所に顔を出さない人もいた。

どちらかといえばわたしは社交的なほうなのかもしれない。

建物の廊下は、明るいブルーに塗られていたて、共用スペースの大部分もこの鮮やかなブルーがデザインの基調となっていた。

ちょうど、そう、あの、宝飾店ティファニーのテーマカラーである、涼しげでいて、華やかさのあるこのブルーに、こんな場所で再開して、不思議な気持ちにしたものだ。

それに白と、シルバーの組み合わせで、この建物は統一感のある内装となっていた。

砂漠地帯にこの施設はあるのだが、敷地内は特別な管理がなされており、庭の植物の植生は四季が存在するかのような構成だった。

建物の窓からは、たっぴりとみずみずしい樹木を眺めることができた。

敷地の外は、不毛の砂漠地帯だということをたまに忘れてしまう。